

## 第五章 VI区の遺構と遺物

### 1. VI区の概要

#### ① 総説

VI区は、石積遺構が出土したⅢ区とⅤ区の間で設定した調査区である。VI区の一部はⅢ区の東と西に回っており、旧冷泉小学校体育館の解体に伴っていったん埋め戻したⅢ区南半部分とそこから東・西・南の三方向に調査区を拡大したような形で調査を行った。

令和2年11月12日に表土掘削を開始して調査に着手した。表土の攪乱層を除去した面を一面とした。また、砂丘の上面が高く検出されたⅤ区の経験から、攪乱の除去に当たっても、極力土層観察を先行した。VI区は、Ⅴ区と同様に砂丘上に営まれた生活面であり、4面の調査を実施した。ただし、砂丘が高い南東付近では、第3面で砂丘が顔を覗かせた。

Ⅱ区からⅢ区を横断してのびてきた中世初頭の港湾遺構である石積遺構は、VI区においてもその延長部分が遺存していた。石積遺構は、VI区にはいるといったん途切れるが、同じ軸線上で断続的に遺存していることが明らかとなった。とくに、VI区から構造を変え、水際に向かって石垣状を呈することは変わらないが、その上面を敷石で整えず、幅が著しく狭くなっていることが判明した。

VI区では、古代から中世の井戸が多数検出された。古いものでは9世紀にさかのぼり、古代以降、土地利用が図られてきたことが明らかになった。Ⅲ区第2面で検出した大型の壕状の掘り込みである114号遺構は、VI区においても、その北半分を大きく掘り取っていた。

VI区の調査は、令和3年3月16日埋めもどして終了した。



Ph.110 VI区第1面(北より)

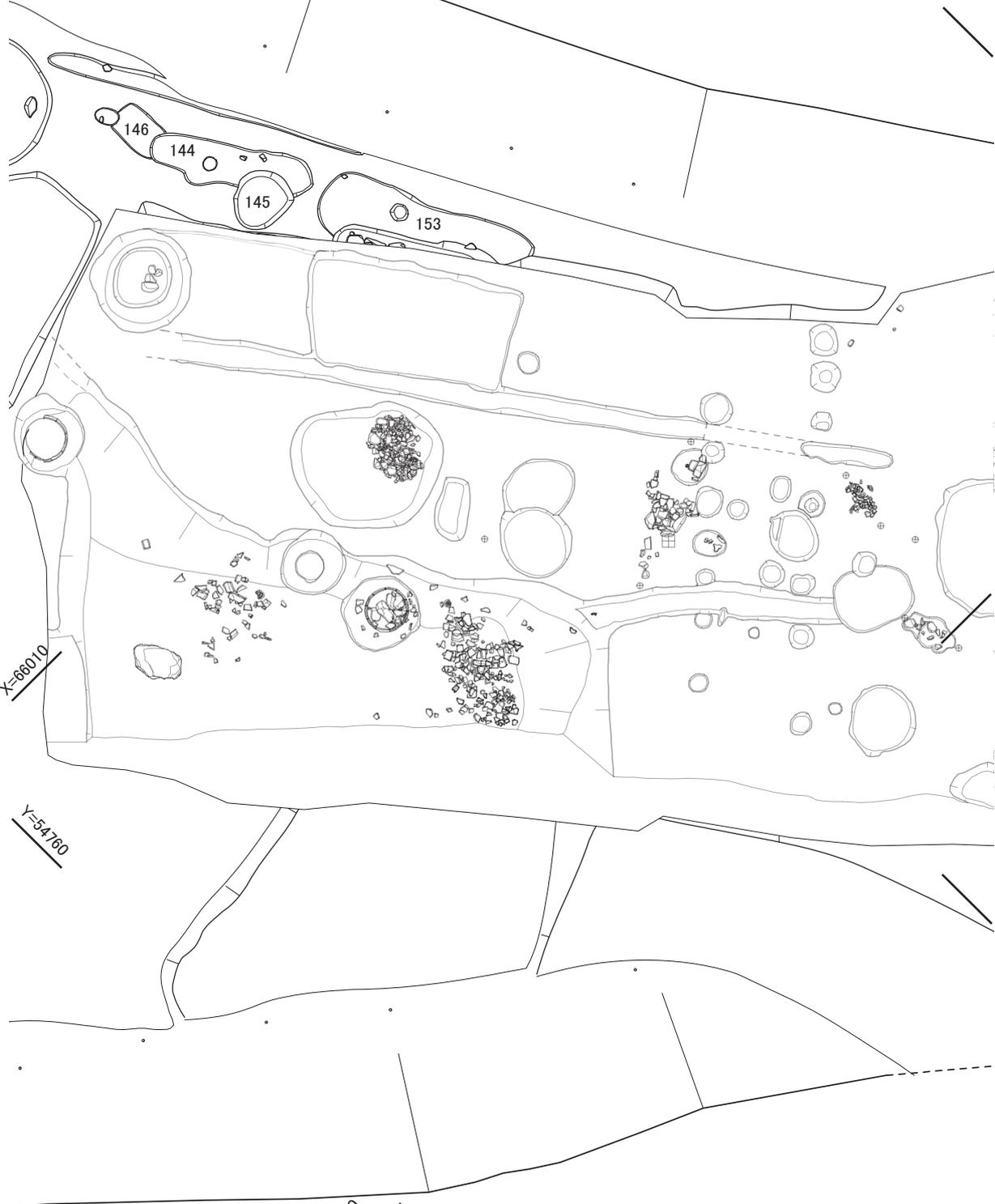


Fig.76 VI区第1面遺構全体図(1/100)

X=66000

Y=54780

Y=54770



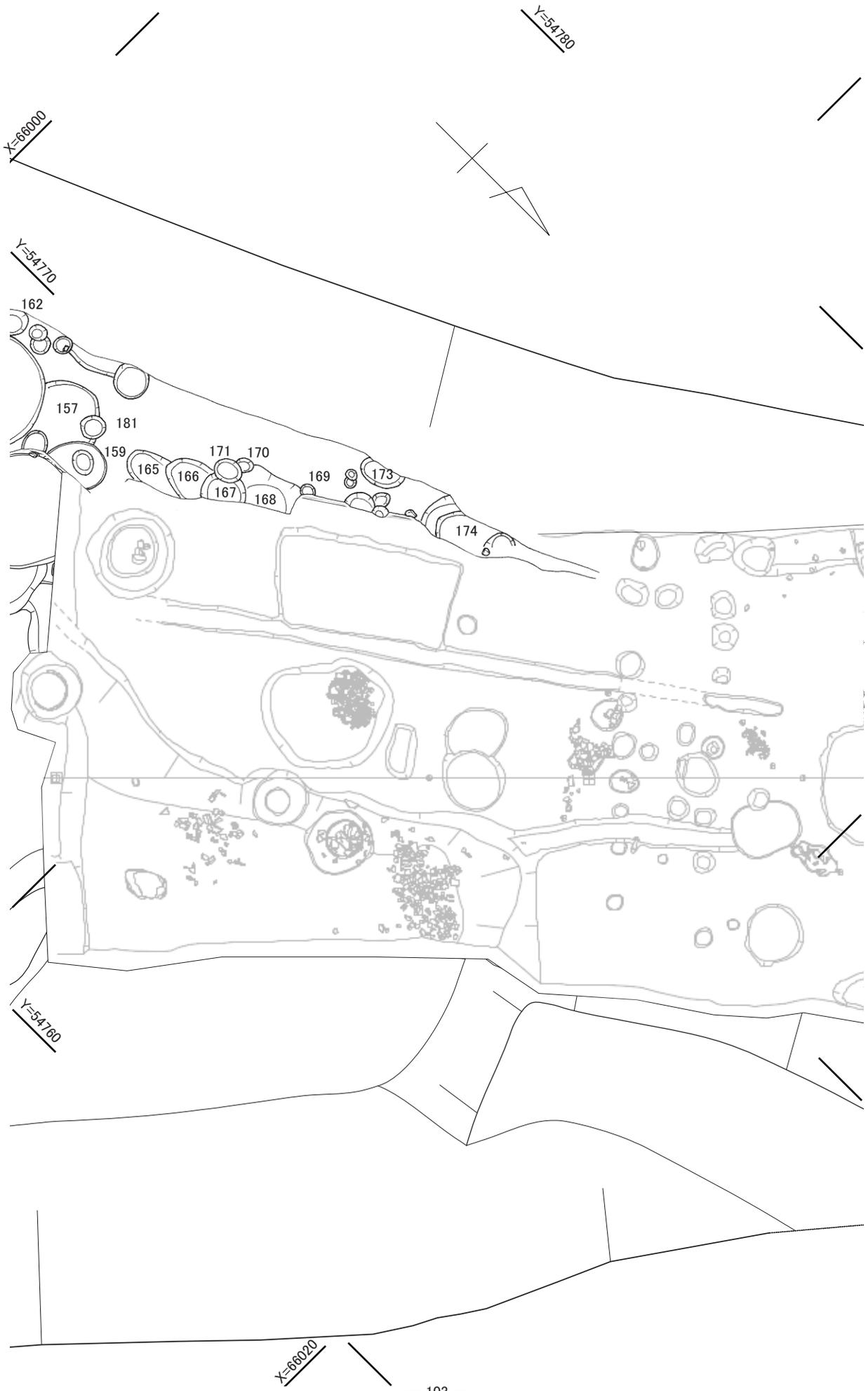
X=66010

Y=54760

X=66020



Fig.77 VI区第2面遺構全体図(1/100)



## ② 第1面

現地表から2.1mほど掘り下げた標高2.25～2.7mで設定した調査面である。

暗褐色土壌の整地層を基盤とするが、鍵層があるわけではなく、厳密に同一生活面を確認できたわけではない。柱穴、廃棄土坑、溝状遺構、井戸など154基の遺構を調査した。

溝状遺構は、長く直線的にのびるものではなく、「く」字型、あるいは「コ」字型に屈折する短いもので、礫・瓦片の集中廃棄を伴うことも多い。建物の基礎などの用で掘られたものと思われる。

第1面で検出できた井戸は、ほとんどが近世以降の瓦井戸である。

第1面の北半分は、大型の攪乱が数基掘られているのみで遺構らしいものは見当たらない。ここは、Ⅲ区第2面で検出・調査した大型の壕状掘り込みである114号遺構の延長部分に当たり、Ⅲ-144号遺構はⅥ区に入って大きく弧を描いて屈曲して終息する。

近世の遺構検出面である。

なお、第1面の西端付近に掘られている攪乱の底から、石積遺構の石列が顔を覗かせている。

## ③ 第2面

第1面から20～40cm掘り下げて設定した遺構検出面である。標高2.1～2.3mを測る。第1面と同様に暗褐色土壌を基盤とする。

第2面においては、柱穴、溝状遺構、廃棄土坑など141基の遺構を検出した。溝状遺構は、第1面のそれとは異なって、Ⅵ区を北東から南西に縦貫するもので、排水もしくは区画、あるいは両者を兼ねた機能を持つものと思われる。遺構は、溝状遺構の付近に集中しており、溝状遺構を離れると、極端に分布が薄くなる。

中世末～近世の遺構検出面である。



Ph.111 Ⅵ区第2面(北東より)

#### ④ 第3面

第2面から30～40cm掘り下げた遺構検出面である。標高1.7～2.1mを測る。おおむね、砂丘砂層の上面が基盤となっている。

柱穴、廃棄土坑、井戸、溝状遺構など、114基の遺構を調査した。柱穴は、溝状遺構の南側から、ほぼまんべんなく検出された。ただし、溝状遺構の北側は、前述したようにⅢ区114号遺構によって大きく損なわれているため、溝状遺構の北と南で遺構分布の差を強調するのは早計といわなくてはならない。Ⅵ区東辺の状況を見ると、本来は溝状遺構の北側にも濃密な分布があったものと考えられるだろう。

第2面の溝状遺構とほぼ同位置から溝が検出された。溝の蛇行・重複は第2面の溝に比べて激しい。井戸は、393号遺構と299号遺構の二基を検出した。393号遺構は、16世紀代の井戸で、405号遺構（溝状遺構）を切っている。405号遺構は、15世紀代に位置づけて大過ないだろう。299号遺構は、結い桶を井側に用いる井戸で、12世紀後半の井戸である。第3面の南角および、西壁際の南端近くから、二基の土師器皿一括廃棄遺構が検出された。完形品もしくはそれに近い状態の土師器皿・坏を一括廃棄したもので、13世紀代に位置づけるのが妥当だろう。

229号遺構は、12世紀後半で少し早めの時期を示すが、この付近は、砂丘の上面が完全に露出していた部分で、そのために古い遺構も一緒に検出したものと考えられる。

第3面は、13世紀代から中世後半までの遺構検出面である。



Ph.112 Ⅵ区第3面(北東より)

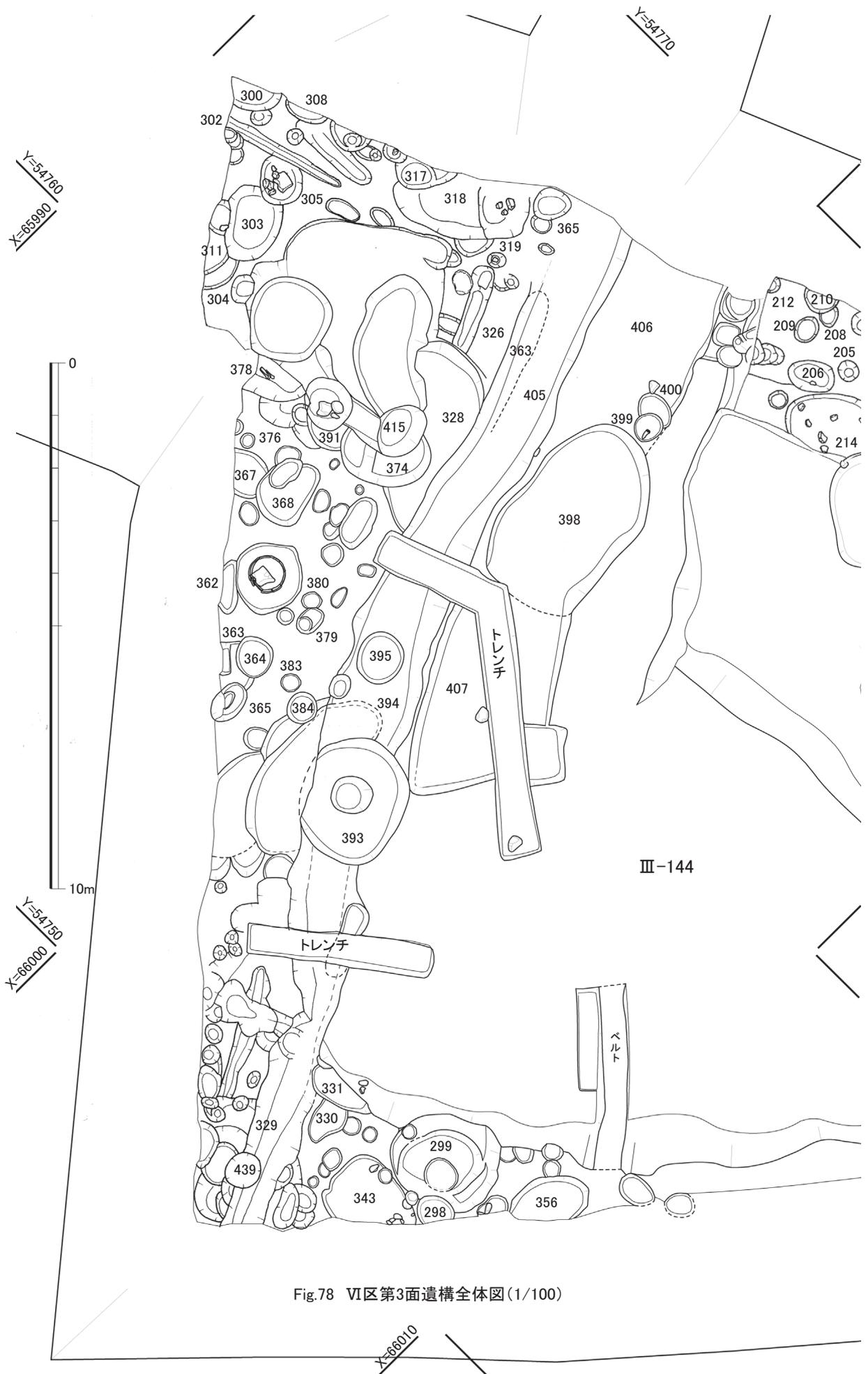


Fig.78 VI区第3面遺構全体図(1/100)



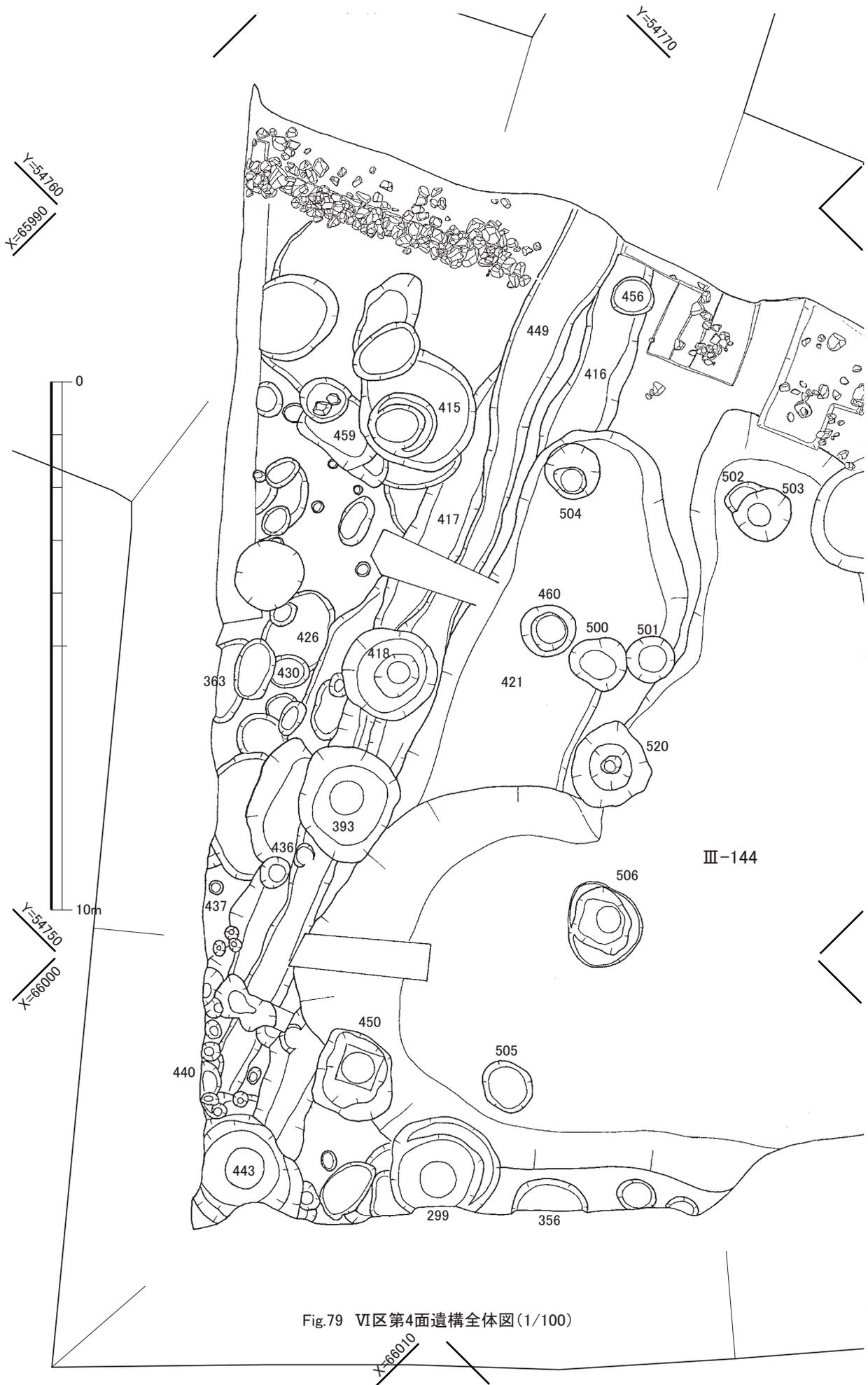


Fig.79 VI区第4面遺構全体図(1/100)

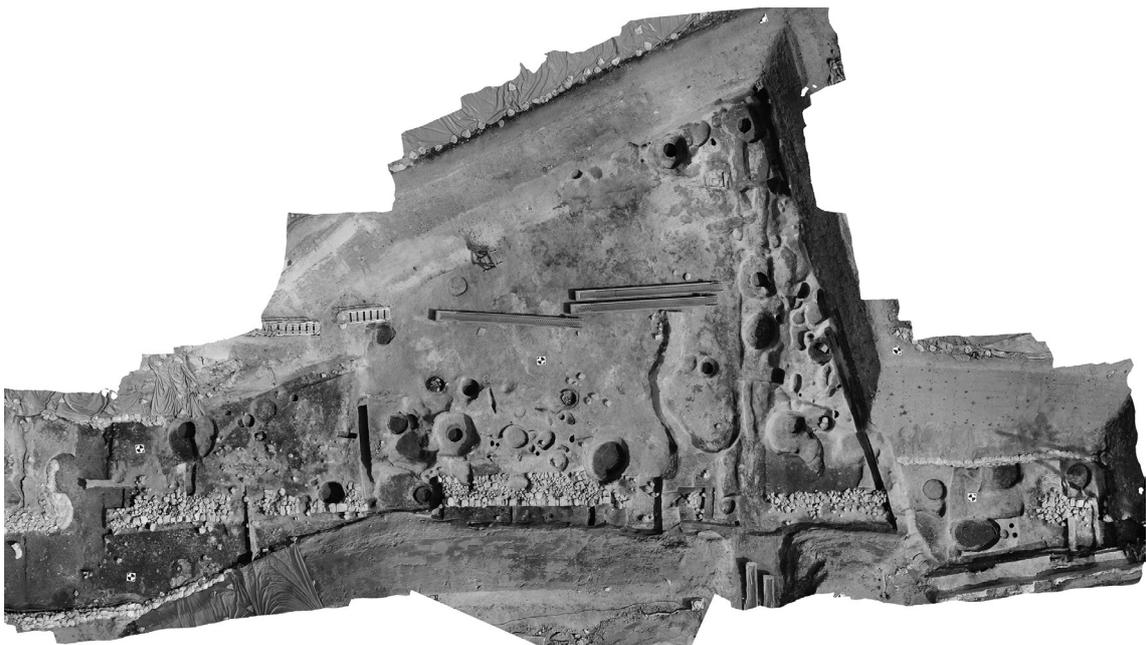


## ⑤ 第4面

完全に砂丘砂層の上面を露出させて遺構検出を行った面である。

標高は、最も高いVI区東隅で、2.2m、西に向かって砂丘は下降していき、VI区西壁際で、1.5mをはかる。西壁際ギリギリの手前から、石積遺構を検出した。中世初頭の港湾関連遺構と位置付けられている石積遺構の一部であるが、この石積遺構は、砂丘砂層に乗っておらず、砂丘砂層の上にすりつくように堆積した河川堆積層の上に、整地土層を伴って築かれていた。(『博多津』博多191 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1468集)。砂丘砂層は、VI区南角から5mほど東で河川堆積層の下に潜り込んでいた。砂丘は北に向かって下降していくが、Ⅲ-114号遺構で掘り取られているため、VI区内では、その具体的な様相は知りえなかった。砂丘地形の復元に関しては、第十一章で検討を試みる。

第4面は第3面のダメ押し的な調査であり、22基の遺構を調査したにとどまった。柱穴、廃棄土坑、井戸、溝状遺構、を検出・調査したのだが、VI区においては井戸が比較的多く検出された。450号井戸は9世紀の井戸である。井側に、方形板組を用いるものである。このほか、Ⅲ-114号遺構の床面以下に残された井戸が点々と出土している。遺構自体の遺存状態が悪いため時期の判定は難しいが、古代の可能性のある井戸等は503号遺構、501号遺構、520号遺構、11世紀後半と思われるものが504号遺構、454号遺構、12世紀前半では460号遺構、12世紀後半では455号遺構などである。港湾遺構である石積遺構の年代は、11世紀後半に構築され、12世紀前半いっぱいまで機能し、12世紀中頃には放棄されたと考えているので、VI区の井戸には、石積遺構以前に掘られたものから石積遺構の時期に使用された井戸、石積遺構廃止後に作られたものなど、石積遺構と港湾空間を検討していく上で、重要な示唆を与えてくれる可能性がある。これについては、次年度、石積遺構前面の調査成果を報告した後に、全体の空間構成として検討したいと考えている。



Ph.113 VI区第4面全景(オルソ画像 南西より)

## 2. VI区の主要な遺構と出土遺物

VI区では、520基の遺構を調査した。

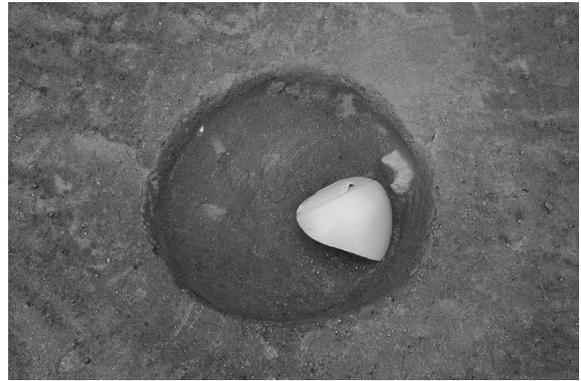
以下、主要な遺構と出土遺物について報告する。

### ① 005号遺構

第1面で検出した土坑である。床面近くから、白磁四耳壺の胴部片が出土した。

Fig.80に白磁四耳壺の実測図を示す。内面には円形の染みが認められる。

12世紀～13世紀の遺構であろう。



Ph.114 VI区005号遺構(南西より)

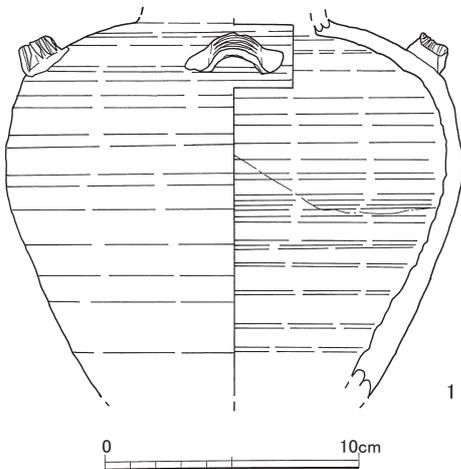


Fig.80 VI区005号遺構出土遺物実測図(1/3)

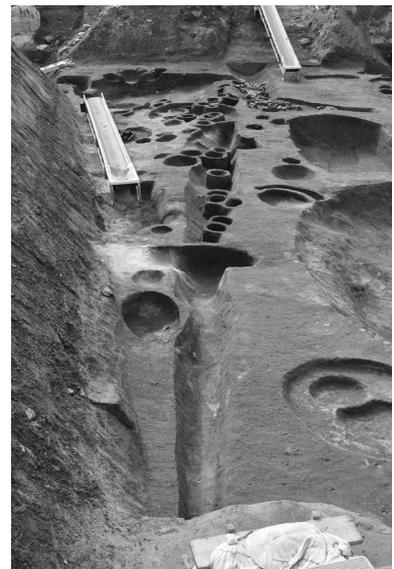


Ph.115 VI区005号遺構出土白磁四耳壺

### ② 230号遺構

第2面で検出した溝である。最大幅1.0m、深さ30cmで、主軸方位は真北から62°東偏する。

出土遺物の一部をFig.81に図示する。1・2は、青磁皿である。全面施釉の後、畳付を削って露胎とする。高台内は白磁となる。景德鎮窯の製品である。3は、明の青花皿である。4は白磁で、畳付きを露胎とする。5は、白磁の八角杯である。高台内に「十」と墨書する。6は、有田焼の染付皿である。7は、白磁の大型壺の底部である。8は瀬戸窯の天目碗である。体部外面下位の露胎部分には、鉄錆で化粧がけする。9は、滑石製の人形である。ケズリと線刻で、細かい意匠を描く。顔は、線刻で目・鼻・口を描く。左右の耳は、小孔であらわす。体部は全体に四角く成形しているが、右手は胸の前で袋をつかんでいる。袋は、右肩を跨いで背中にぶら下がる。左手は、胸の前あるいは腹の前に添える。胸には右前に来た着物を線刻で示している。右足は、欠損している。左足



Ph.116 VI区230号遺構(北東より)

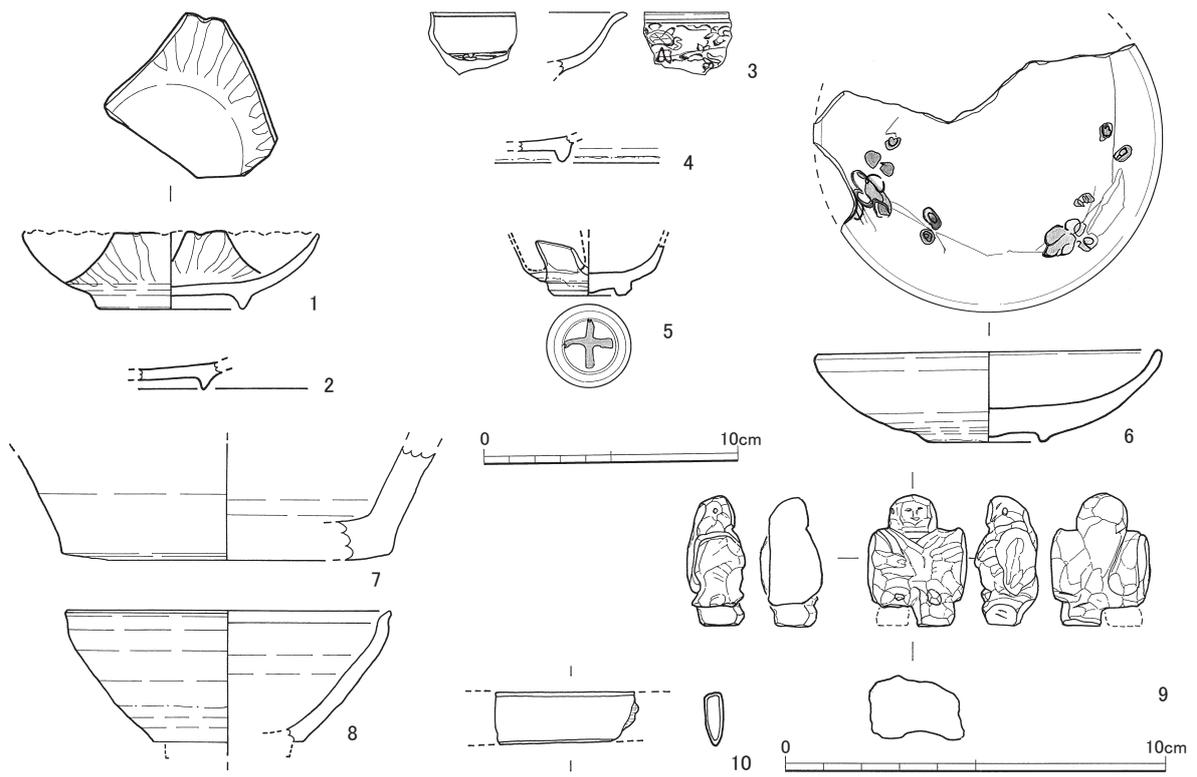
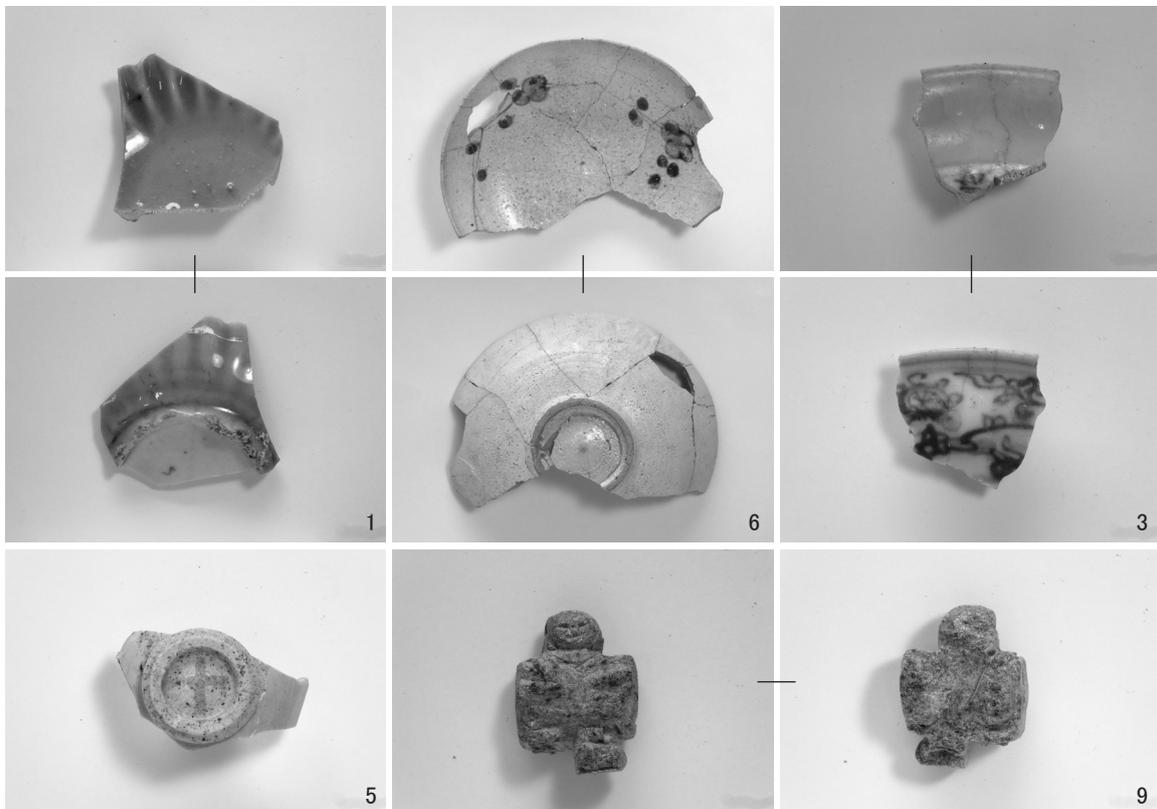


Fig.81 VI区230号遺構出土遺物実測図(1/3、1/2)



Ph.117 VI区230号遺構出土遺物

は、安定感がある四角に作るが、左右の足の正面に小さい突起がある。これをつま先と見れば、足の下に丸い包みの様なものを踏まえているように見える。それを俵と見たら、左右の足で俵を踏まえ、背に大きな袋を担う姿は、大黒天像を想起させる。現在なじみがある大黒像は、右手に小槌を掲げ、左手に福袋をもって肩にかけ、両足はそれぞれ米俵を踏みしめる。しかし、本来の大黒天像は異なり、右手を腰に当て、左手で袋をもって肩にかける。足は、米俵を踏みしめたりはしない。大黒天像が現在のように福の神の相になったのは、室町時代とされるが、本石像は、右手で袋をからい、左手を腰に（腹に）添えるなど、古体の大黒天像の鏡像といえる。以下は推測になるが、簡便な滑石づくりの石像であることから、製作者を職人ではなく素人と想定し、古体の大黒天像を見てそれを真似て、手すさびに作ったと考えたい。実は、古体の大黒天像は、大宰府の観世音寺に現存するのである。それを拝した後、記憶をもとに作ったとすれば、鏡像になったとしても不思議はない。一方で、福の神としての大黒天にあやかりたいがために米俵を踏ませたのではないか。庶民の福の神信仰を示す遺物としてとらえたい。

溝の時期は、有田焼の皿が示す17世紀前半であろう。

### ③ 274号遺構

第2面において検出した土坑である。長辺3.2m、短辺1.7mの不整形を呈する。

土坑が円形に膨らんだ部分に、瓦片がまとまって廃棄されていた。瓦片の集中廃棄の状況は、275号遺構につながっているように見える。



Ph.118 VI区274・275号遺構(北東より)



Ph.119 VI区274号遺構(北東より)



Ph.120 VI区275号遺構(北西より)

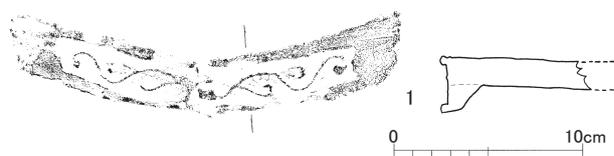


Fig.82 VI区275号遺構出土遺物実測図(1/4)



Ph.121 VI区275号遺構出土瓦

④ 275号遺構

第2面で検出した、幅約1.2mの溝である。274号遺構に切られ、その先にあるべき、東の延長部分は検出できなかった。

東半部分に、瓦の集中廃棄が見られた。集中廃棄はそのまま274号遺構の瓦廃棄につながるようにも見えるが、判断できなかった。両遺構の間で、瓦の様相に違いはなく、一連の遺構と見ても、切りあいと見ても、ほとんど時期差は認められない。

軒平瓦の瓦当を図示する。近世瓦である。

⑤ 299号遺構

第3面の東壁寄りから検出した井戸である。径2.2m前後の円形の掘り方を持ち、そのやや北東よりに径約75cmの結び桶を据えて井側とする。第3面から1.3mほどの深さまで調査したが、湧水のためにそれ以下の精査は断念した。水溜は確認できていない。

出土遺物の一部をFig.84に示す。1~6は、土師器である。1・2は皿、3は坏で、底部は回転糸切りする。井側内から出土した。4~6は碗である。7は瓦器碗である。回転台成形、底部押し出しの筑前型瓦器である。8~13は、白磁である。8~10は皿、11~15は碗である。このほか、越州窯系青磁、高麗青磁、砥石、石鍋等が出土した。

12世紀後半の井戸である。

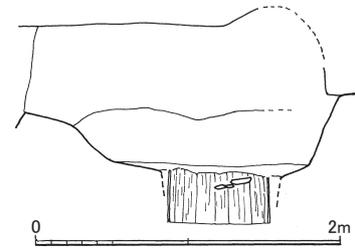
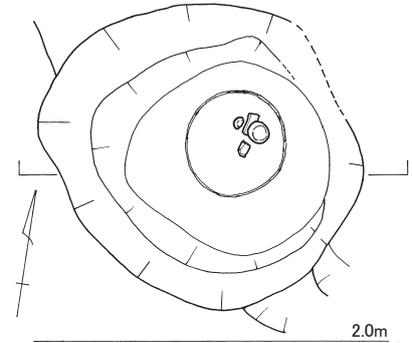


Fig.83 VI区299号遺構実測図(1/50)

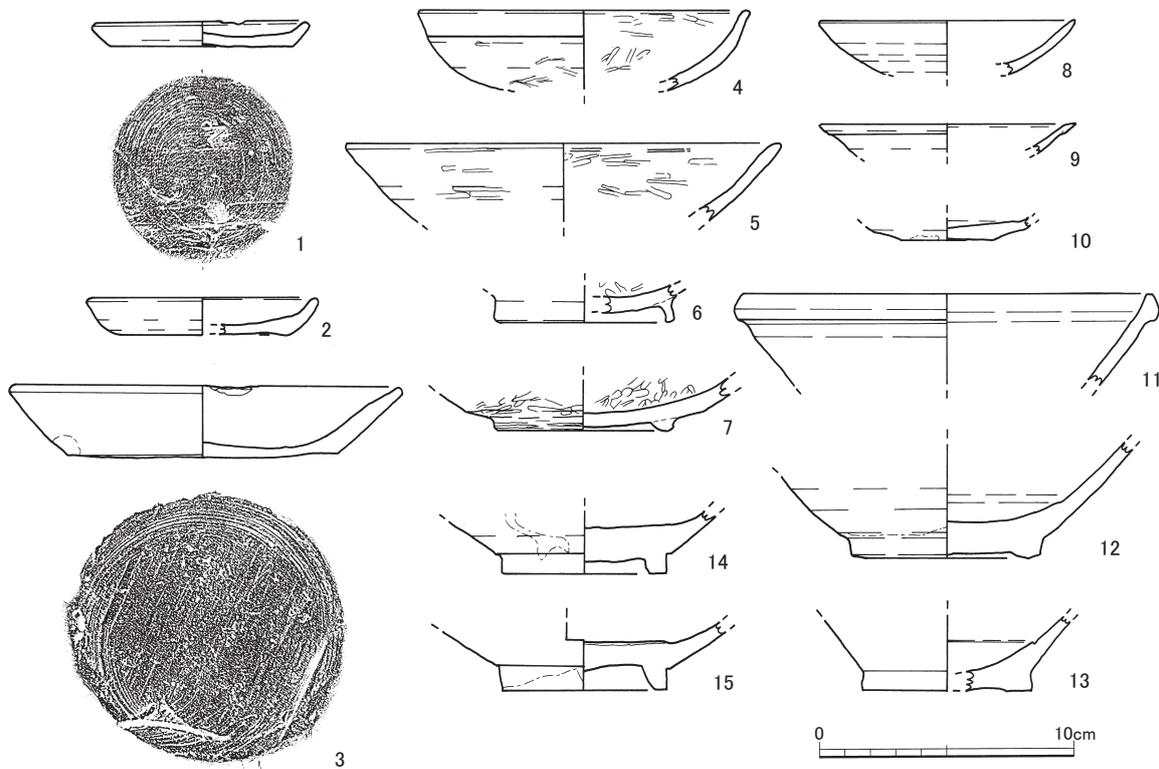
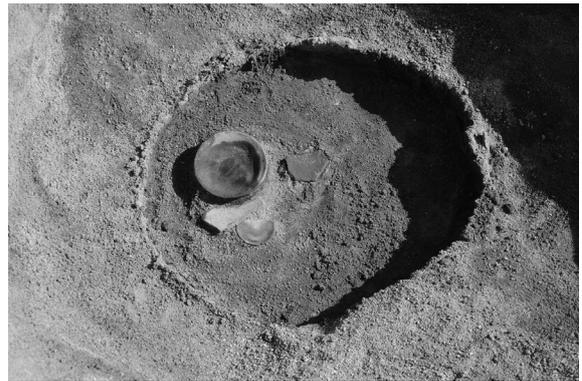


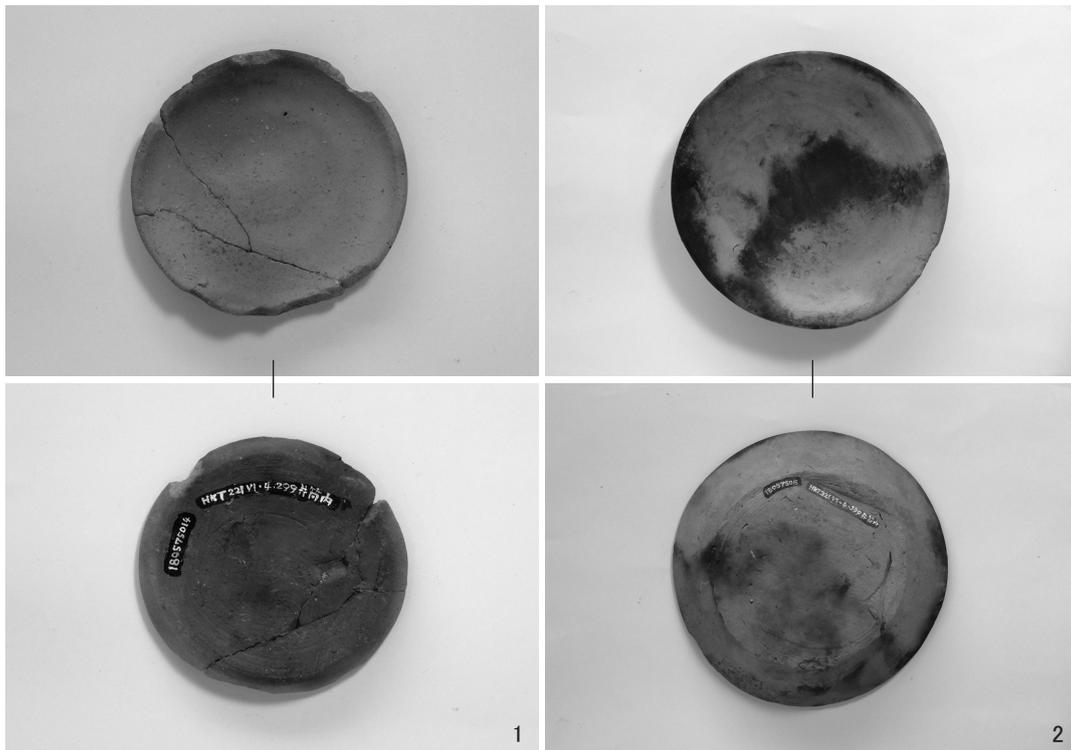
Fig.84 VI区299号遺構出土遺物実測図(1/3)



Ph.122 VI区299号遺構(南より)



Ph.123 VI区299号遺構井側遺存状況(北より)



Ph.124 VI区299号遺構出土遺物

⑥ 305号遺構

第3面西端近くで検出した土坑である。長径1.0m、短径0.8mの楕円形を呈し、30cm弱の深さをはかる。床面の中央に大振りな石が顔を出しているが、下層の石積遺構の石である。

南東壁から床面にかけて土師器皿・坏が一括廃棄されていた。

Fig.86に出土した土師器を図示する。1～4は皿、5～13は坏である。底部は、回転糸切りする。器形、法量的によくそろっており、規格化された生産であったことがうかがわれる。

13世紀代の土坑である。



Ph.125 VI区305号遺構(東より)

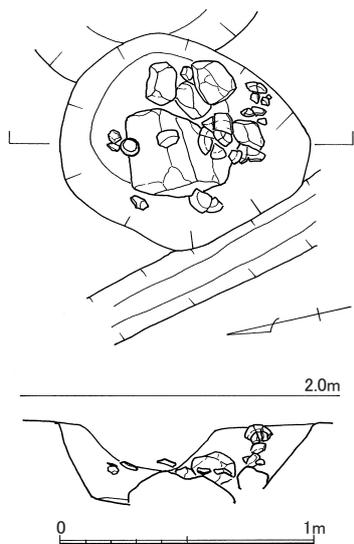
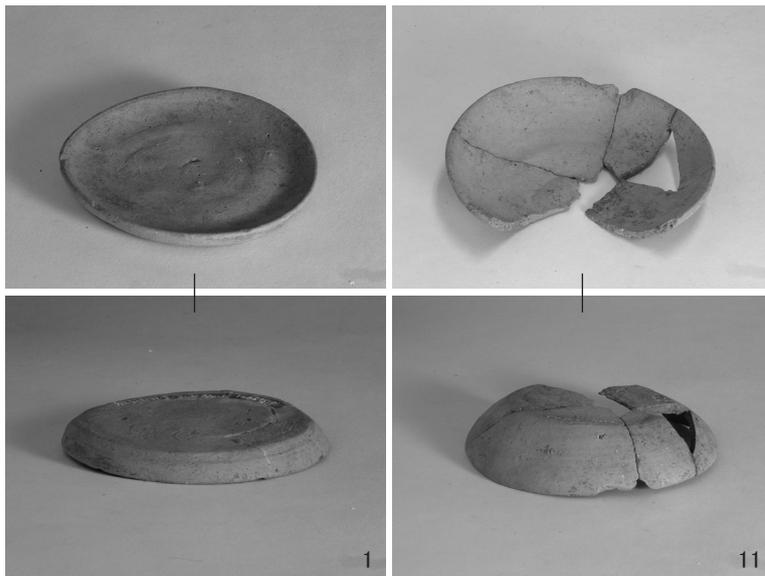


Fig.85 VI区305号遺構実測図(1/30)



Ph.126 VI区305号遺構出土遺物

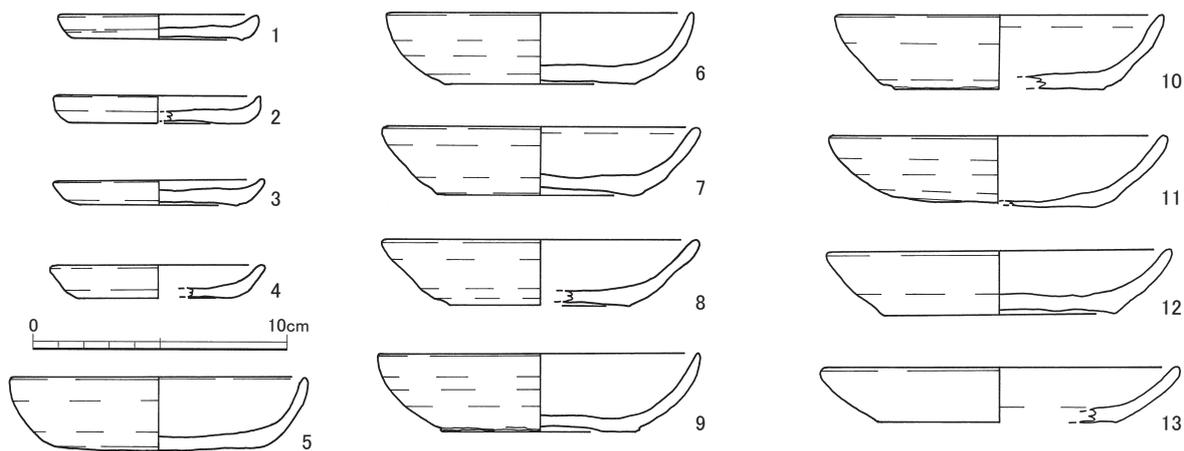


Fig.86 VI区305号遺構出土遺物実測図(1/3)

⑦ 319号遺構

第3面の西辺寄りで検出した土坑である。318号遺構（土坑）に切られ過半を失うため、規模はわからない。埋土中に北東から流れ込む形で、土師器の皿・坏が一括廃棄されていた。

Fig.88に一括廃棄されていた土師器の皿・坏を図示する。1～5は皿、6～8は坏である。すべて、外底部は回転糸切りで、板目圧痕が見られる。内面は横ナゲ調整で、内底部はナゲ調整する。

土師器皿・坏から13世紀代の廃棄土坑である。



Ph.127 VI区319号遺構(南西より)

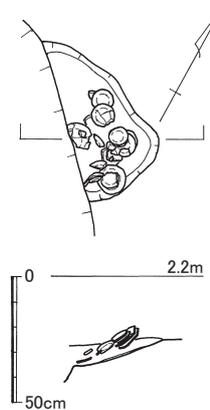


Fig.87 VI区319号遺構実測図(1/30)

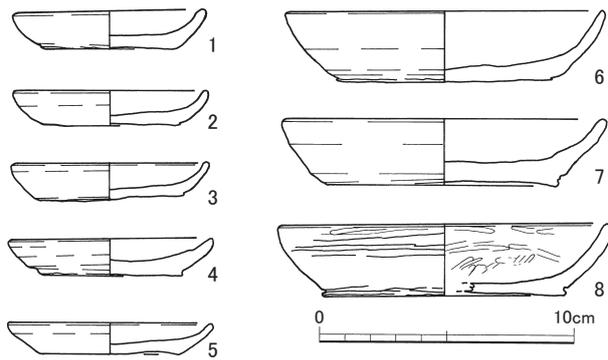
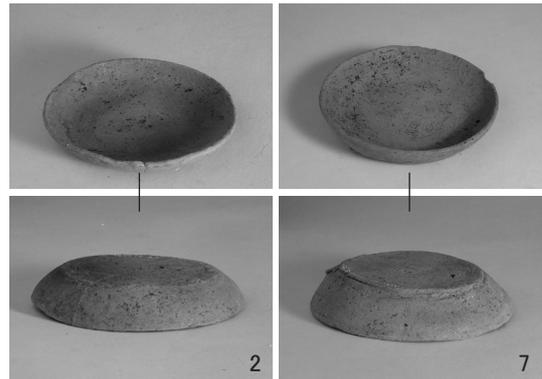


Fig.88 VI区319号遺構出土遺物実測図(1/3)



Ph.128 VI区319号遺構出土遺物

### ⑧ 393号遺構

第3面中ほどの西寄りで検出した井戸である。405号遺構を切る。径2.0～2.2mの掘方を持ち、そのほぼ中央に径約70cmの結い桶を置いて井側とする。湧水のため、結い桶の下部（標高0.8m）以下の確認はできなかった。よって、水溜の有無は不明である。

出土遺物の一部をFig.90に示す。1は、土師器皿である。底部は回転糸切りする。口径7.1cmと小ぶりの皿である。2・3は明の青花で、2は皿、3は碗である。4は、瓦質土器のすり鉢である。口縁部の内外面は横のハケ目、体部外面は、縦方向のハケ目で、体部内面には5条単位の摺り目がつけられている。5は土師器の土鍋で、外面には煤が付着している。内面は、びっしりと密に横方向のハケ目調整が見られる。外面には指頭痕が並ぶ。6は、瓦質土器の湯釜である。垂直に立ち上がった口縁端部を欠く。胴部中位には小さな突帯が廻っている。突帯以下には、煤が付着している。7は、朝鮮王朝の陶器で、いわゆる舟徳利である。体部外面には、緑褐色の釉をかける。平底の底部は露胎である。このほか、備前焼V期のすり鉢・瓦等が出土している。

出土遺物を全体的にみて、16世紀前半を主とした井戸として大過ないだろう。

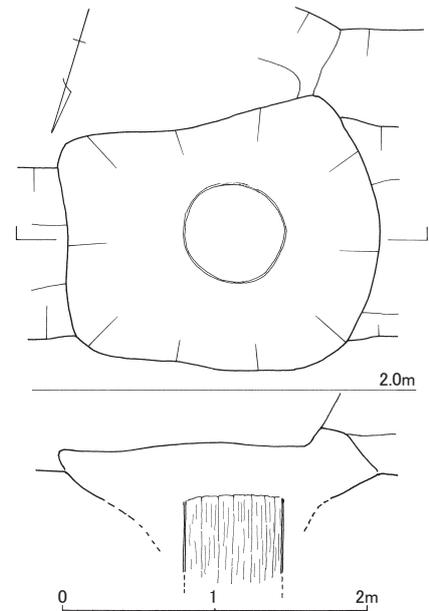


Fig.89 VI区393号遺構実測図(1/50)



Ph.129 VI区393号遺構(北より)



Ph.130 VI区393号遺構井側遺存状況(北より)

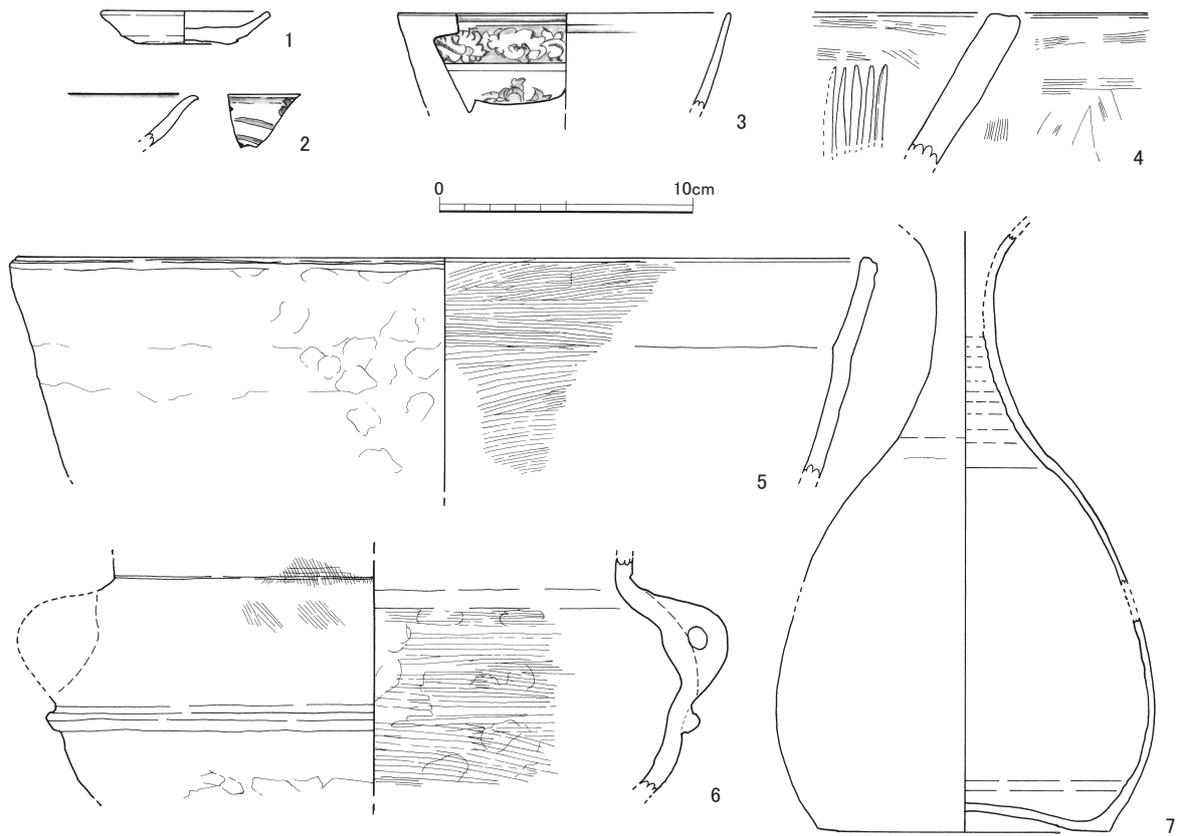


Fig.90 VI区393号遺構出土遺物実測図(1/3)

⑨ 399号遺構

第3面で検出した土坑である。406号遺構（溝）を切って掘られている。径60cmほどの円形の浅い土坑で、白磁壺が廃棄されていた。

白磁壺をFig.91に示す。口縁部から肩部のやや下あたりまでを欠失した破片であるが、おそらくは四耳壺になると思われる。底部は完存する。内底部には、重ね焼きの窯道具跡と思われる円形の砂目が見られる。頸部が細くしまった器形であったと考えられるので、筒状の長い窯道具を立てて重ね焼きしたものと思われる。

12～13世紀代の土坑であろう。

⑩ 405号遺構

第3面で検出した、VI区を南西から北東に貫く溝である。検出時の遺構名称に加えて、調査時にも部分毎に名称がつけられているため、遺構名称に混乱が見られる。遺構検出時に幅1.6mほどの溝と想定した405号遺構は、精査の結果、二条の溝の重複であることが確認できた。東半部においては南が浅く北が深い二段掘り状を呈する。それが、中ほどになると、境を接し



Ph.131 VI区399号遺構(西より)

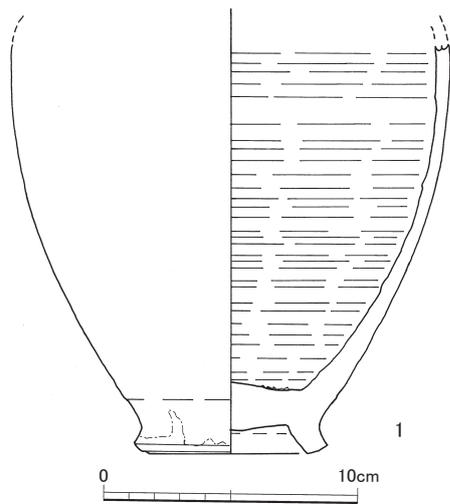


Fig.91 VI区399号遺構出土遺物実測図(1/3)



Ph.132 VI区399号遺構出土白磁四耳壺

た二状の溝に分かれる。さらに西側にいたって、北側の溝が南側の溝を切りこむ形に代わる。ただし、遺構番号としては、この切り合いに対応してはならず、遺物的には二条の溝に分離することはできなくなっている。いずれにせよ、ほとんど重複した溝であり、連続した掘り直しが想定できるために時期差は生じないと思われるので、全体を405号遺構として、報告する。

主な出土遺物を、Fig. 92に示す。1は、土師器の坏である。内外面ともに横ナデ調整する。2は、越州窯系青磁の鉢である。内外面ともにオリーブ色の釉を施釉する。口縁部の上面は露胎となる。3は、中国の白磁碗である。口縁は小さく肥厚して玉縁となる。4～6は、朝鮮王朝の陶磁器である。4は白磁碗である。見込みには、重ね焼きのトチンの目跡が残る。5・6は、陶器の皿である。5は、灰色の釉をかける。6は、内面から外面体部下位まで白化粧した上に光沢のある透明釉をかける。全面施釉で、高台の畳付きには胎土目がのこる。7は、中世須恵器の甕の口縁部である。内外面とも横ナデ調整する。体部外面は、平行叩き目が認められる。香川県の十瓶山北麓窯跡の製品であろう。12世紀代の遺物である。8・9は、備前焼のすり鉢である。直線的に開いた体部から、口縁は「く」字型に折れてまっすぐに立ち上がる。10は、土鍋である。内面は横ハケ調整、外面には煤が付着している。11は、軒平瓦の瓦当である。瓦当面には圏線も何もなく、中央に大きく「大」字を置き、その三方に一文字ずつ「大」、「乗」、「寺」と配する。第221次調査地点に、鎌倉時代後半から近代まで存在した大乘寺に由来する瓦である。このほか、朝鮮王朝の舟徳利などが出土している。

これらの出土遺物から、16世紀前半の溝であると考えられる。



Ph.133 VI区405号遺構(南西より)

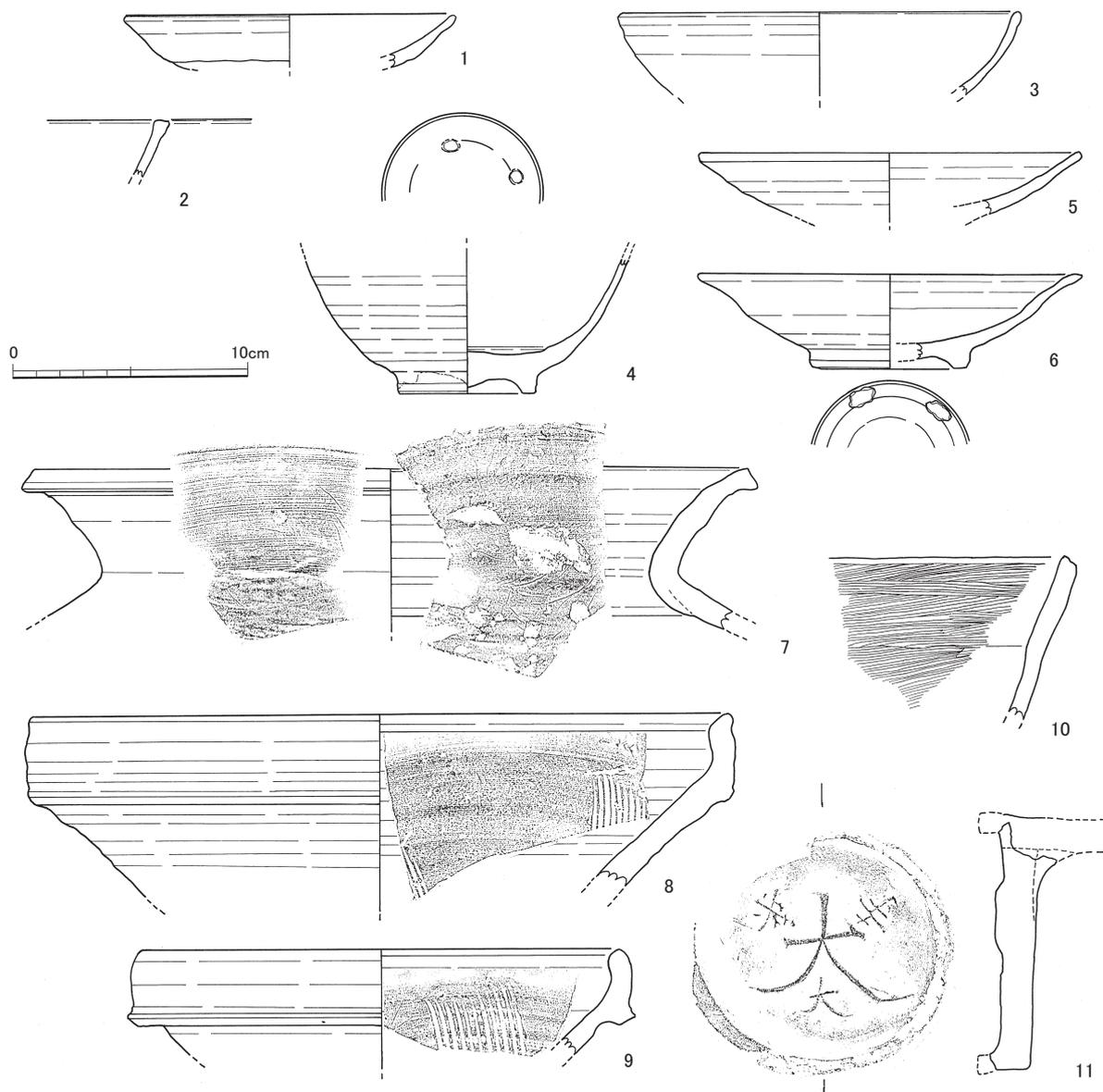
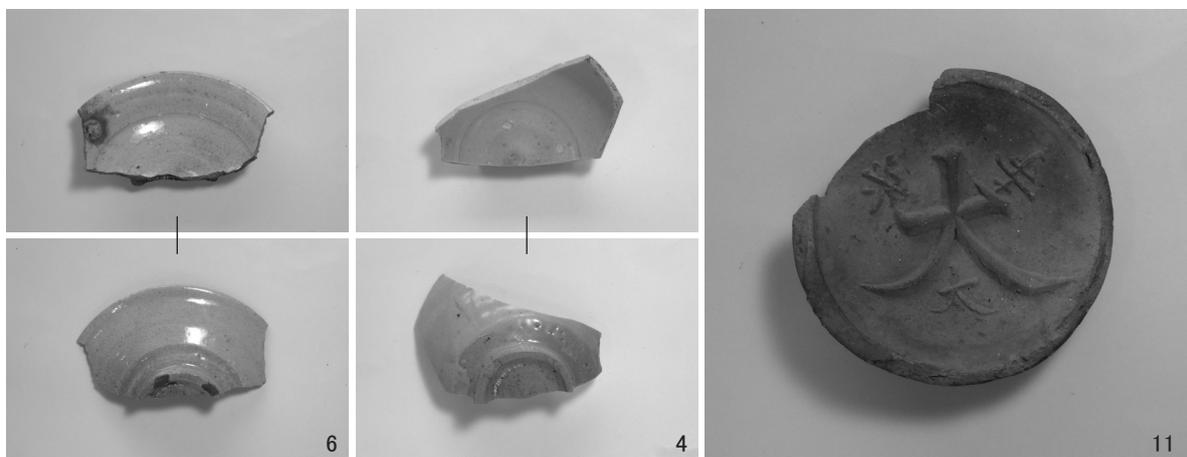


Fig.92 VI区405号遺構出土遺物実測図(1/3、11…1/4)



Ph.134 VI区405号遺構出土遺物

⑪ 406号遺構

第3面において405号遺構に平行して検出した溝である。405号遺構とは切り合い関係にあり、405号遺構に先行する。幅1.0m前後で、深さは20cm前後を測る。調査区西壁から3.5m分を検出したところで、大型土坑である421号遺構に切られて延長が追えなくなるが、東壁付近で検出した329号遺構(溝)がその延伸部分に当たるものと思われる。

出土遺物の一部をFig.93に示す。なお、切り合い等の重複から、一部の遺物が混入している可能性がある。遺物相的に時期差があるわけではないので、図示しているが、1・2・5・6・13～16・18・19が、それに当たる。

1・2は土師器の皿である。底部は回転糸切りする。3～14は、白磁の碗である。15～17は青磁である。15・17は龍泉窯系、16は同安窯系。18・19は陶器である。

遺物の同定に問題はあるものの、12世紀後半～13世紀前半の幅でとらえられる。



Ph.135 VI区406号遺構(北東より)

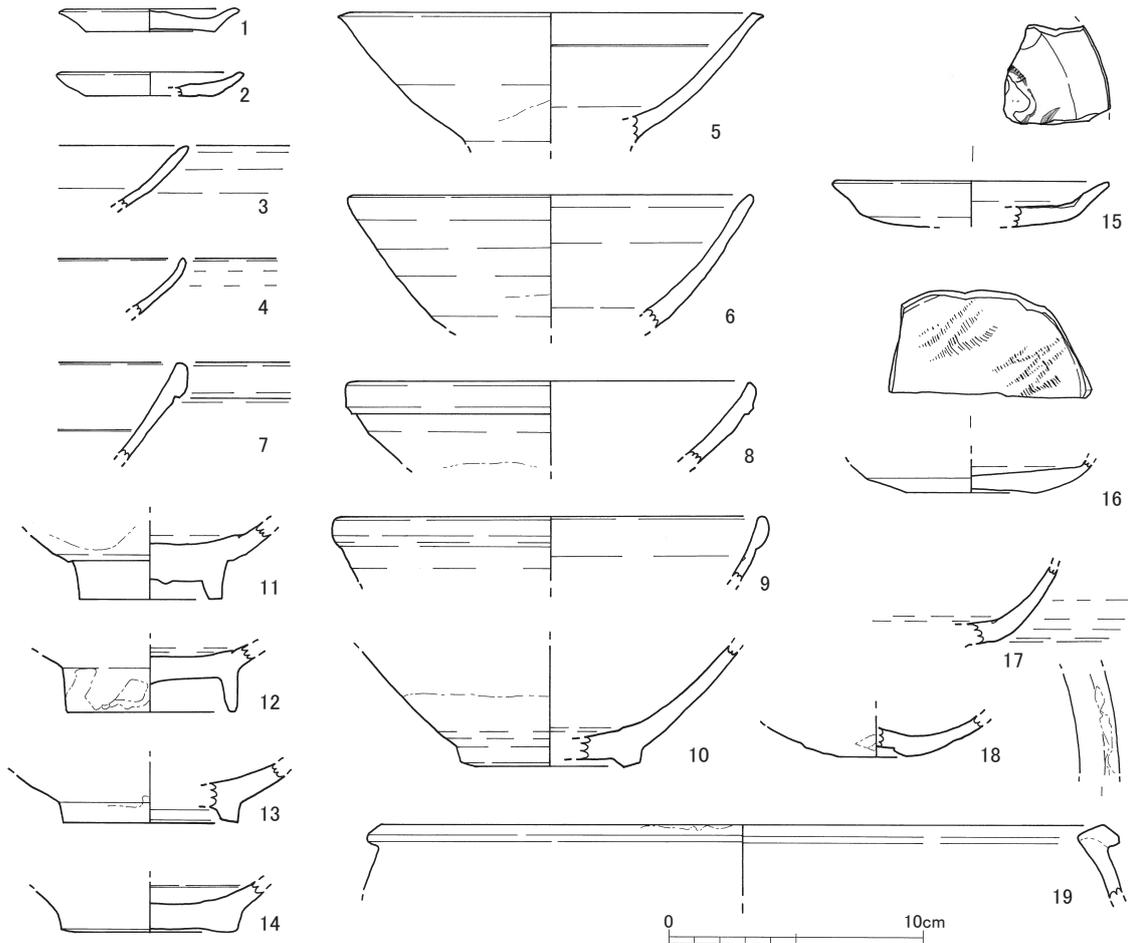


Fig.93 VI区406号遺構出土遺物実測図(1/3)

⑫ 418号遺構

第3面の南側中央付近で検出した井戸である。405号遺構に切られる。径1.8mの正円に近い掘方を持ち、その中央やや西寄りに直径40cmの井側を据える。井側は、木質の遺存が確認できたにとどまる。井側の上位に、これとほぼ同じ内法で石が配されていた。木質の位置からみると若干東にずれているが、井側の上部は石積であったものと考えられる。

須恵器・土師器・青磁などが出土しているが、細片が多く、時期否定は困難である。中世前半とみるにとどめたい。



Ph.136 VI区418号遺構上部配石検出状況(北西より)

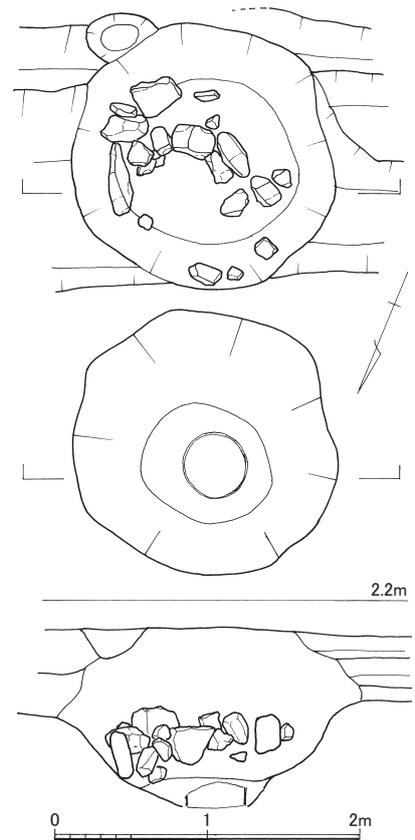


Fig.94 VI区418号遺構実測図(1/50)

⑬ 443号遺構

第3面のVI区の東角で検出した井戸である。短径2.0m、長径2.5mの楕円形の掘方を持ち、そのほぼ中央に径75~80cmの結び桶を置いて井側とする。遺存した結び桶の一段目は標高0.8m付近に下端があるが、それ以下は湧水のため、確認できなかった。

掘方はより下位まで続いているので、何らかの施設が設けられていたと考えられるが、次の段の結び桶は検出できなかった。水溜等、より規模の小さいものであろう。

出土遺物の一部をFig.96に示す。1~3は、土師器である。1・2は皿で、底部は回転糸切りする。3は、体部をヘラ磨きした碗である。4は土師器の甕である。5は国産陶器の甕の口縁である。常滑窯か。6~11は、白磁碗である。9~11は、極めて薄手の精品である。12は青磁で、同安窯系の碗である。13~16は褐釉系の施釉陶器である。このほか、底部をヘラ切りする土師器の皿・坏、瓦器などが出土した。

出土遺物全体を見ると、12に図示した同安窯系青磁碗を最新の遺物としており、12世紀後半の、比較的早い時期の井戸と位置付けて大過ないだろう。

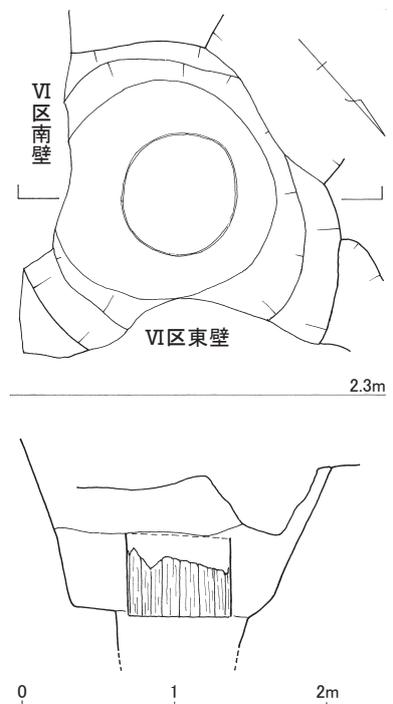


Fig.95 VI区443号遺構実測図(1/50)



Ph.137 VI区443号遺構(北東より)



Ph.138 VI区443号遺構井側遺存状況(北東より)

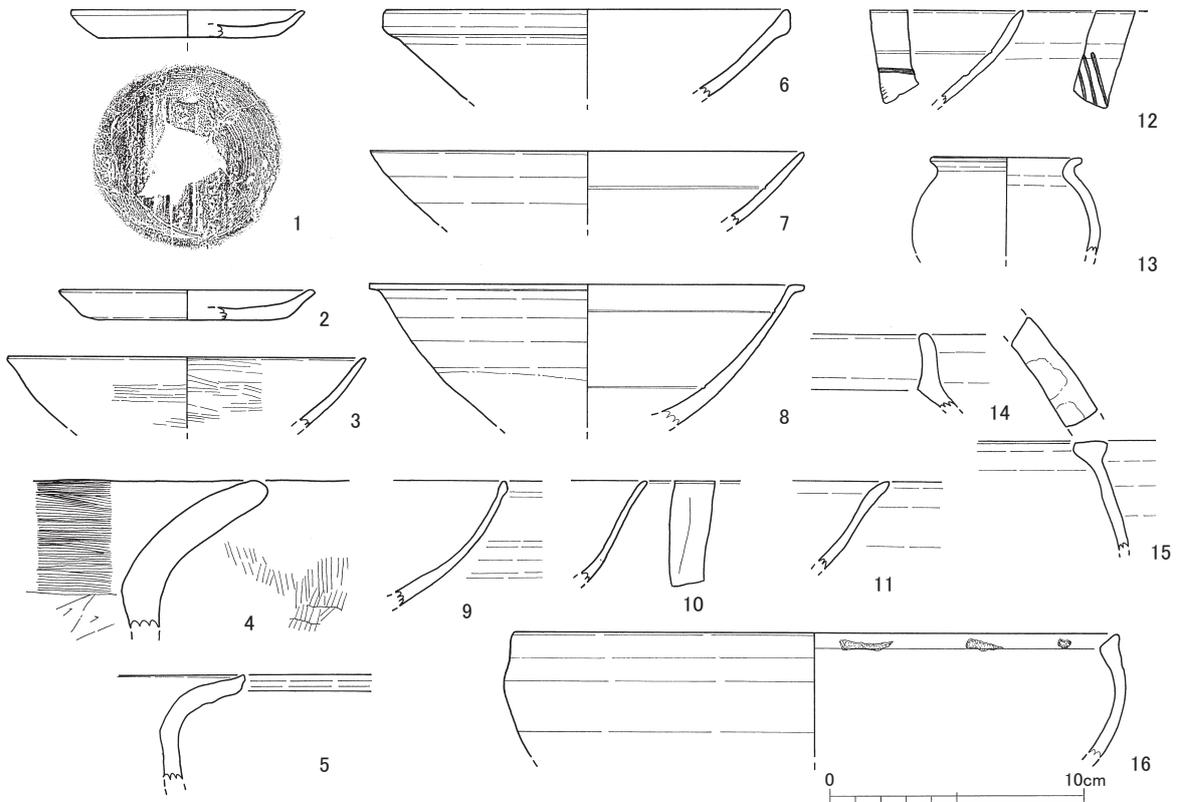
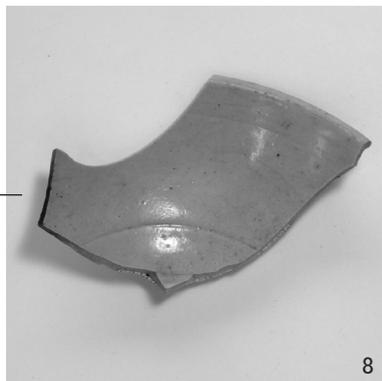
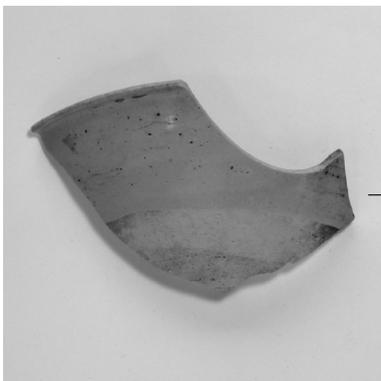


Fig.96 VI区443号遺構出土遺物実測図(1/3)



Ph.139 VI区443号遺構出土遺物

⑭ 450号遺構

第3面の東片近くから検出した井戸である。Ⅲ-144号遺構に削られて過半を失うが、最下部はほぼ遺存していた。

掘り方は一辺約1.5mの方形を呈するようである。現況では、おおむね三段に掘りこまれている。井側は、一辺75cmの方形である。板材を横方向に寝かせて方形に立てており、四隅近くには縦に板を打ち込んでいる。井側内には、直径60cmほどの曲げ物を据えて、水溜としている。曲げ物は、木質痕を見る限り、高さ67cmで、この間に継ぎ目は見られない。かなり大型の曲げ物を用いたといえる。水溜のやや上、井側の最下部の埋土から土師器の小碗が出土した。井戸を埋め立てる過程で入れた（置いた）ものであろう。

出土遺物を、Fig.98に示す。1・2は、土師器である。1は、上述した小碗である。外面は横ナデ、内面は口縁部付近をヘラ磨き、体部はコテ当てで平滑に調整する。高台内には「×」印の線刻が見られる。2は、甕の口縁である。3～6は須恵器である。3は、坏蓋、4～6は坏である。小片のみが出土している。7～9は、平瓦片である。上面はいずれも布目で、下面は、7は縄目叩き、8・9は単線の斜格子叩きが見られる。

このほか、焼き塩壺の破片が出土している。

1の土師器小碗から、9世紀後半に使用を停止して埋め立てられた井戸である。

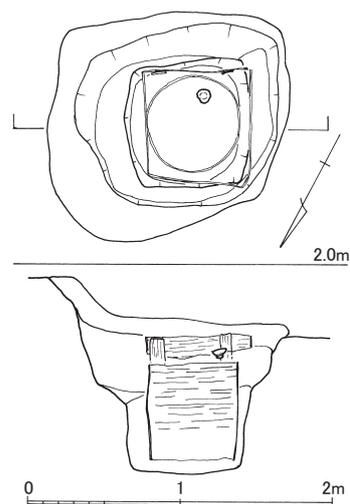
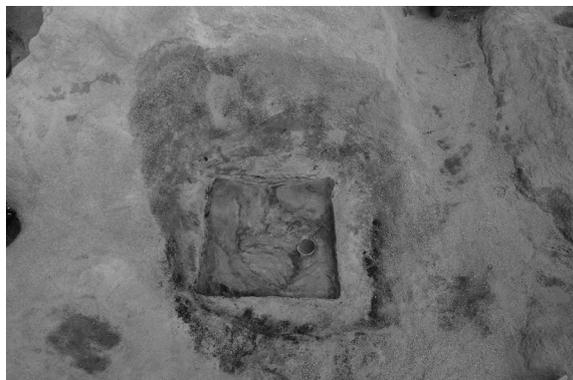


Fig.97 VI区450号遺構実測図(1/50)



Ph.140 VI区450号遺構方形板柵確認状況(北西より)



Ph.141 VI区450号遺構方形板柵検出状況(西より)



Ph.142 VI区450号遺構水溜曲げ物検出状況(北西より)



Ph.143 VI区450号遺構完掘状況(北西より)

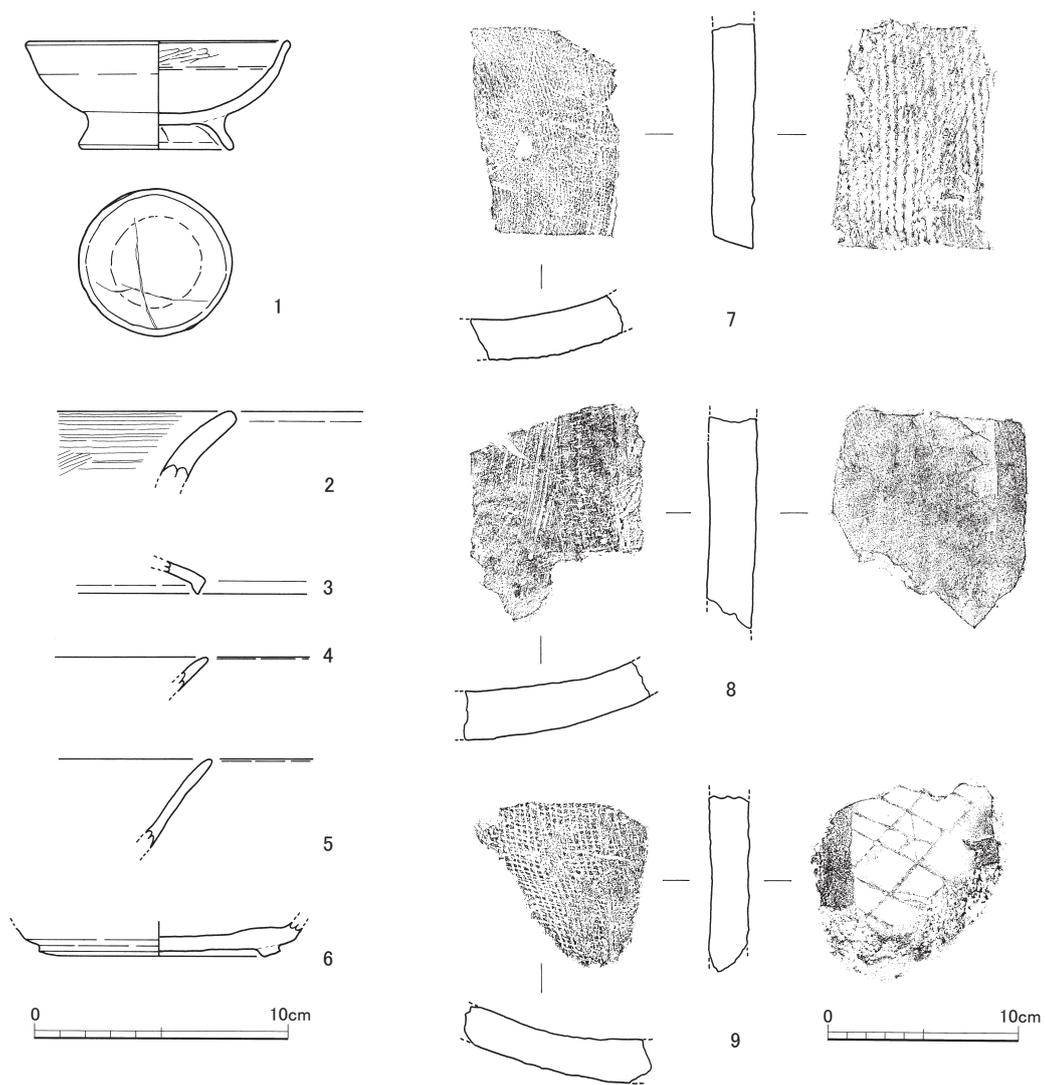


Fig.98 VI区450号遺構出土遺物実測図(1/3、1/4)



Ph.144 VI区450号遺構出土遺物

⑮ 454号遺構

第4面において、VI区がⅢ区の東側に回りこんだ東辺近くから検出した井戸である。Ⅲ-114号遺構の底からの検出であり、井戸の最下部しか検出できなかった。

掘り方は、径1m前後の円形で、東によって径50cmの結び桶が検出された。井側の最下部である。その内側がさらに径30~40cmで、15cmほどくぼんでおり、水溜と思われる。

出土遺物をFig.100に示す。1~3は、土師器皿である。底部はヘラ切りする。4・5は、瓦器碗である。回転台成形で、筑前型である。内外面とも、密にヘラ磨きしている。6・7は、白磁碗である。8は、高麗青磁の碗である。やや肌理は粗いが緻密な胎土を用いて、大振りでありながら薄手の碗を成型している。口縁部は如意状に外反する。精製品であるが、外面は二次的に被熱している。9は、砥石である。図の右面は、全体が大きな破面であるが、そのために左図の砥面は安定する。また、破面の中央には擦過痕が見られ、工具の先端を研ぐのにも使っていたことが想定される。左図の上面及び各側面は、砥面として使い分けされている。図の上側は欠損する。安山岩製の砥石である。

11世紀後半の井戸である。

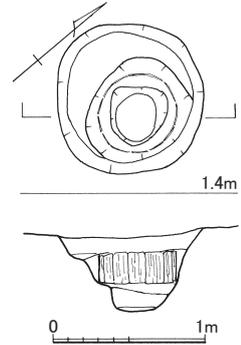
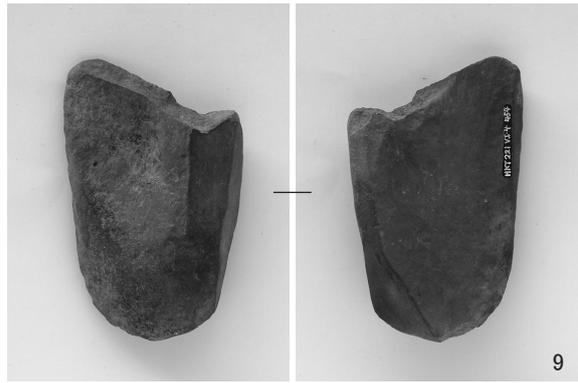


Fig.99 VI区454号遺構実測図(1/50)



Ph.145 VI区454号遺構(南東より)



Ph.146 VI区454号遺構出土遺物

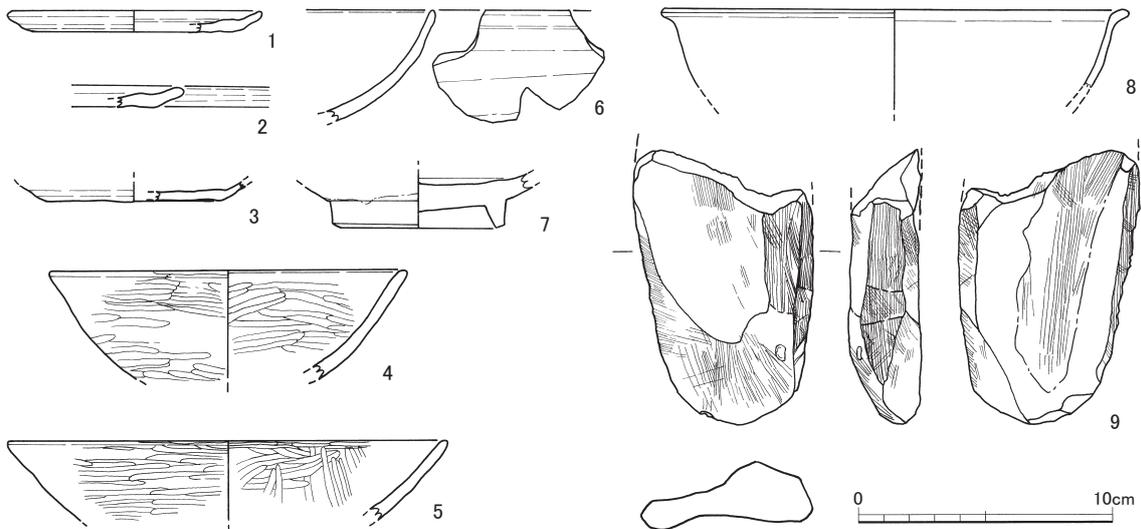


Fig.100 VI区454号遺構出土遺物実測図(1/3)

⑩ 460号遺構

VI区第4面の中ほど、421号遺構の底面から検出した井戸である。井戸の最下部が遺存していた。

掘り方は、径1m前後の円形で、径50cmの木質が検出された。井側の最下部であることから、水溜の曲げ物と考えられる。その場合、井側はすでに失われていることになる。

Fig.102に出土遺物を示す。1・2は、土師器の皿である。底部は回転糸切りする。3・4は、瓦器碗である。3は、体部外面には幅の狭いヘラ磨きを内面にはコテ当てで成形した上に幅広のヘラ磨きを浅くくわえている。体部は筑前型にしては薄手につくる。5～8は白磁碗である。5の底部には、墨書が残る。一文字としてはとらえ難く、「黄二」もしくは「黄」花押であろう。6は、直線的に開く体部の碗で、見込は輪剥ぎする。8は高台部分であるが、外面は露胎、内面は見込を輪剥ぎする。このほか、楠葉型瓦器碗、景德鎮合子蓋、陶器などが出土している。

12世紀後半の早い時期の井戸であろう。

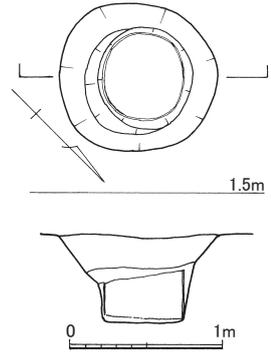
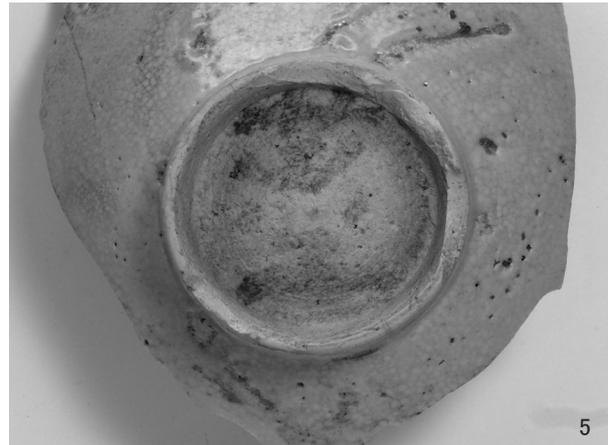


Fig.101 VI区460号遺構出土遺物実測図(1/50)



Ph.147 VI区460号遺構(北東より)



Ph.148 VI区460号遺構出土遺物

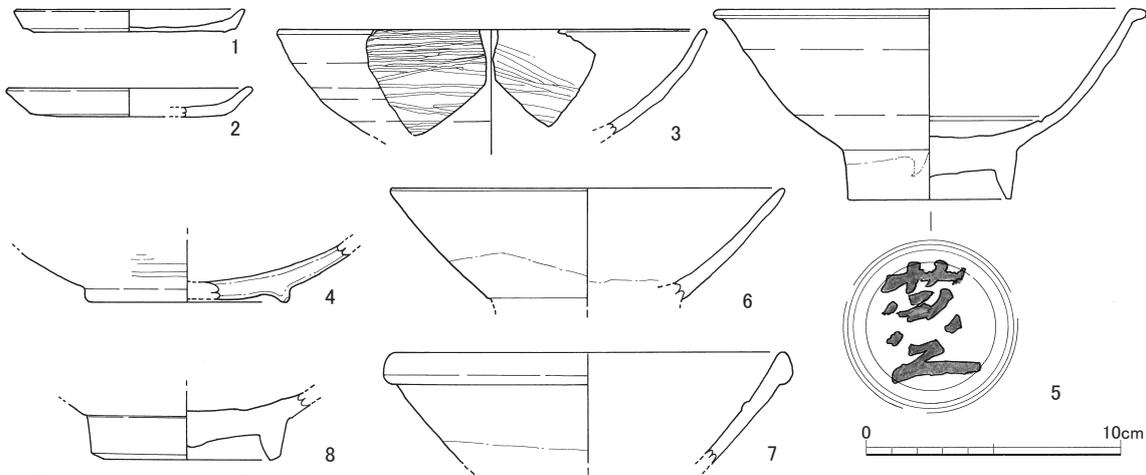


Fig.102 VI区460号遺構出土遺物実測図(1/3)

⑰ 501号遺構

460号遺構のやや北側で検出した井戸である。90cmほどの円形の掘り方に、径50cmの円形の木質（水溜）が検出されたのみであり、井戸の最下部が遺存したものである。

Fig.104-1～5は須恵器である。1・2は坏蓋、3～5は坏である。6は、土師器の坏である。

このほかに出土遺物はなく、これによる限りは、9世紀前半の井戸と考えられる。



Ph.149 VI区501号遺構(北より)

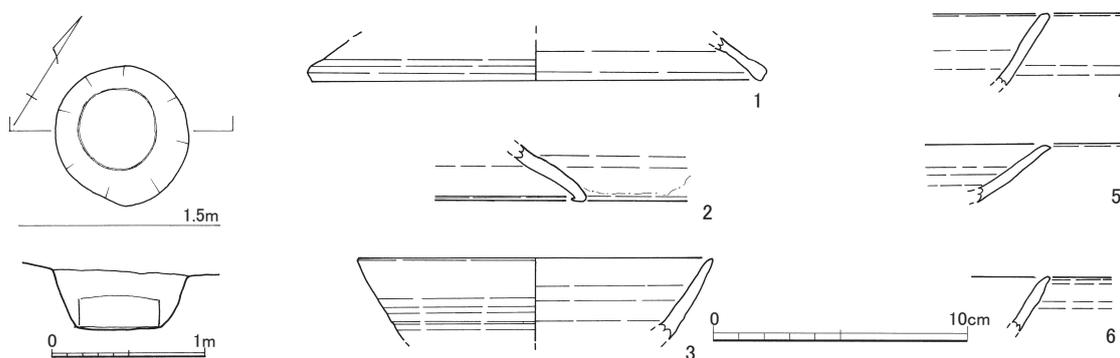


Fig.103 VI区501号遺構実測図(1/50)

Fig.104 VI区501号遺構出土遺物実測図(1/3)

⑱ 503号遺構

VI区第4面の西よりから検出した井戸である。Ⅲ-114号遺構による大規模な掘り込みの西端部分に当たるが、掘方と井側のほとんどが失われていた。また、南側において502号遺構とした土坑と切りあうが、本来の井戸掘り方の広がりを見るとこの部分に別の土坑が存在する可能性は低く、503号遺構の一部がたまたま残っていたものとした方が妥当であろう。

出土遺物は小片のみであり、図示に堪えなかった。須恵器、土師器、黒色土器A類などが出土している。陶磁器類の出土はなく、古代、9～10世紀の井戸の可能性はある。



Ph.150 VI区503号遺構(西より)

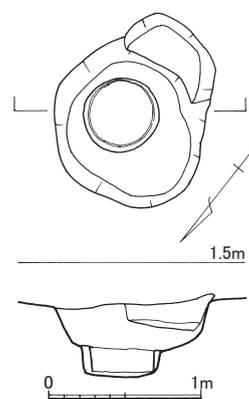


Fig.105 VI区503号遺構実測図(1/50)

⑲ 504号遺構

VI区第4面の西より、421号遺構の底面から肩部にかけて検出した井戸である。掘り方の一部と井戸の最下部が遺存していた。421号遺構の肩に残っていたようだが、確認はできなかった。421号遺構底面での掘方平面、421号遺構肩部における掘り方の遺存状態から見ると、第4面のレベルで径1.8mの円形の掘り方が推定できる。421号遺構底面で、直径45cmの円形の木質が確認できた。木質は、20cmほど垂直に追うことができた。おそらく、曲げ物を用いた水溜であろう。

出土遺物は、土師器の坏（底部ヘラ切り）と須恵器小片のみである。時期比定は困難であり、古代の井戸とするにとどめたい。

⑳ 506号遺構

第4面の中ほど、やや東寄りから検出した井戸である。Ⅲ-114号遺構の底面からの検出で、掘方と井側のほとんどが失われている。遺存した部分で、掘方は長軸1.7m、短軸1.5mの卵型を呈する。そのほぼ中央に直径55cmほどの円形で垂直の落ちがあり、木質等は確認できなかったものの水溜と考えられる。

底部糸切りの土師器片が若干出土したのみであり、中世の井戸という以上の時期比定は困難である。



Ph.151 VI区504号遺構(北東より)

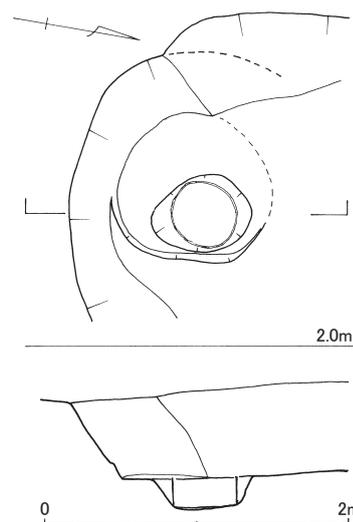


Fig.106 VI区504号遺構実測図(1/50)



Ph.152 VI区506号遺構(南東より)

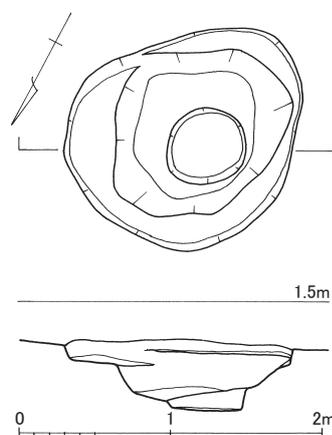


Fig.107 VI区506号遺構実測図(1/50)

㊦ 520号遺構

VI区第4面の中ほどで検出した井戸である。Ⅲ-114号遺構によって、大部分を失っている。掘り方の南半分がⅢ-114号遺構の南壁部分にかかっていたために、北側に比べて比較的遺存していた。

掘り方は、推定で、直径1.8mほどの円形を呈する。発掘調査時の現況では、第4面から20~25cm下がったところで段を成して、二段掘りとなる。二段目は、直径0.8m前後の円形である。さらに中央部分は、径40cmほどでくぼんでいて、おそらくこの部分が水溜になると思われる。

調査時には、まず検出レベルで一段目の掘り方内には礫が広がっていた。垂直分布をみると、中央が周囲よりも6cmほど低くなる逆レンズ状を示している。これを除去して掘り下げると、二段目の掘り方の肩に沿って、弧を描いて礫の分布が見られた。二段目の弧状の礫は、井側周囲の埋め土に落とし入れられたものと考えられる。一段目の礫は、井側の上を覆っているために、井戸の廃絶後に埋まったものであることは明らかである。これらのことから推測するに井戸の廃止に当たって、井側・水溜を抜き取るために大規模な掘削がなされたのであろう。掘り方の一段目は、井戸に伴うものではなく、この廃止時の掘削に伴う可能性がある。そして、井側・水溜を抜き取った後、その大穴を埋めたのだが、完了近くまで埋めた段階で、井戸跡全体に礫をばらまいて、さらにこれを埋め込んだものと思われる。

出土遺物をFig.109に示す。1~3は、須恵器である。4は、黒色土器A類の碗である。外面は横ナデ調整、内面はヘラ磨きする。9は、土師器碗の底部である。高台は高く、広い。6・7は、弥生土器である。VI区では、他の遺構でも、しばしば弥生土器や古式土師器の混入が見られた。10~14は瓦である。縄目叩き格子目叩きを持つもので、いずれも古代の瓦である。15は、砂岩製の砥石である。

9世紀代の井戸であろう。

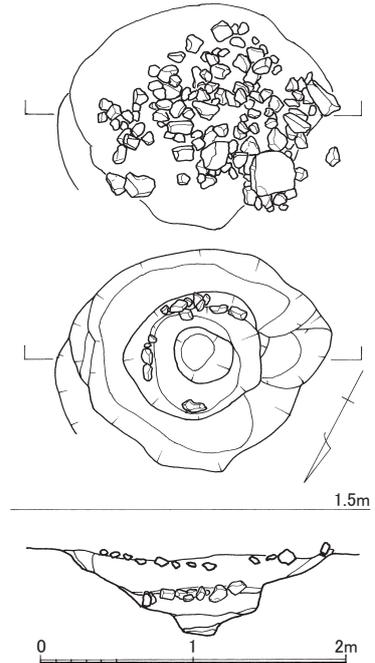


Fig.108 VI区520号遺構実測図(1/50)



Ph.153 VI区520号遺構礫群検出状況(西より)



Ph.154 VI区520号遺構(北西より)

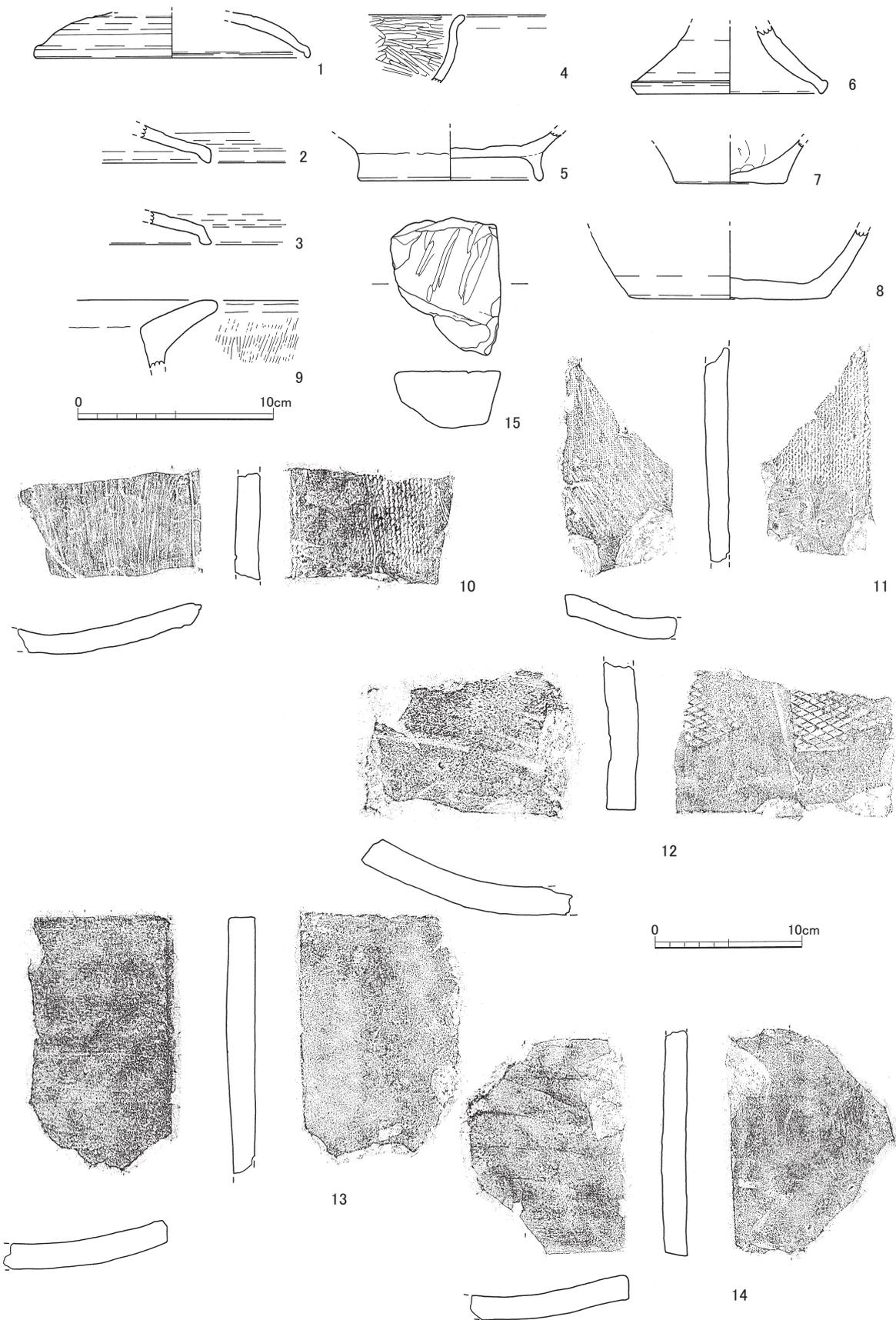


Fig.109 VI区520号遺構出土遺物実測図(1/3、1/4)

## ㉔ 521号遺構

第4面、東辺近くで検出した井戸である。Ⅲ-114号遺構の底面で検出したもので、水溜が遺存していた。

掘り方は、75cmのほぼ円形で、直径35cm、深さ30cmの曲げ物を用いた水溜を検出している。

遺物の出土はなく、時期を判断することはできない。

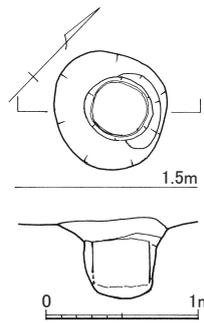


Fig.110 VI区521号遺構  
出土遺物実測図(1/50)



Ph.155 VI区521号遺構(北より)

## ㉕ その他の出土遺物

以下、主要遺構の報告中で触れることができなかった遺物の中から、看過できないもの、特殊なものを選んで紹介する(Fig.111・112、Ph.156～157)。

1～3は、古代の緑釉陶器である。1は、削り出しの円盤高台をもつ。高台の底は、施釉せずに露胎とする。内面は密にヘラ磨きする。京都産である。2・3は碗の体部から口縁部の破片である。2は、暗灰色須恵質の胎土に濃い緑色の釉をかける。東濃産。3は、横ナデ調整のみでヘラ磨きを加えない。近江産と考える。4は、土師器碗である。口縁部は、小さな玉縁に作る。高台は丸い粘土紐を貼り付けただけで、面取りはしない。体部の内外面は、密にヘラ磨きする。外面のヘラ磨きは、口縁部から体部上半部分は横方向のヘラ磨き、体部下半部分は、粗雑だが分割ヘラ磨きを行う。内面のヘラ磨きは、上半部分は大きめに横ヘラ磨きから分割ヘラ磨きで、下半部分は、大きくジグザグ状のヘラ磨きをする。白磁の玉縁碗を模した土師器碗で、221次調査では全調査区からしばしば出土する遺物だが、ほぼ完形品はこの一点のみである。

5～8は、瓦である。5は、軒平瓦で、中央に菊花を置く。中世後半から近世初頭の瓦であろう。瓦当面を作る粘土の貼り合わせ方に特徴がある。6は、古代の軒平瓦である。鴻臚館跡からもしばしば出土するタイプで、10世紀の瓦である。7は、平瓦である。上面は布目で、下面には、単線斜格子の叩き目が認められる。各格子の中には、十字文様が配されている。8は、中世後半頃の丸瓦である。釘孔が見られる。凸面の図で言うと、右上角を大きく斜めに削って面取りしている。入母屋造りの下り棟の付け根部分に使われたものであろう。線刻文字が残っており、おそらく「大乘寺」の「乗」の残画と、「寺」字であろう。大乘寺瓦としては、「大乘寺」の陽刻を持つ、型押し of 軒丸瓦、軒平瓦の出土はあったが、線刻した事例としては、おそらく初例となる。

9は、銅権である(巻頭図版5)。体部は瓜型に四分割し、頭部には突起を作り出して、銅環をとおす。大きさの割には重量があり、内部に鉛を抱かせたものと思われる。底面には崩れたような穴があり、そこから内部の鉛の量を調節したものと思われる。

Ph.157にその他の遺物を写真で示す。10は、長沙窯の青磁碗である。高台は円盤高台の中央を丸く削り込んで、玉壁高台に作る。外底部は露胎である。古代の初期貿易陶磁器に属する。鴻臚館跡での出土事例はあるが、博多では珍しい。221次調査では、2点が出土している。11は、青磁の香炉であろう。口縁部の破片で、透かしで花文を描く。白色の胎に緑色の透明感の強い釉をかける。優品である。12は、磁州窯系陶器の皿である。白化粧した生地の上に、鉄絵で花文を描く。底部の小片であ

る。13は、高麗青磁碗である。高麗青磁の出土は少なくないが、粗製品が多く、精製品は稀である。13は胎土が緻密で、釉にむらがなく、整ったつくりである。径の小さい低平な高台から、直線的に大きく開いた体部を持つ小碗である。14も高麗青磁の碗である。こちらは13とは違って粗製品の部類に入るが、胎土はさほど粗くはなく、比較的良品である。高台は高く直立し、体部は丸みを持って内湾しつつ立ち上がる。口縁部は大きく外反して開く。高台の畳付きと見込みに重ね焼きの目跡が残る。二次的に被熱したようで、釉の表面は荒れている。15は、瀬戸窯の折縁皿である。瀬戸の大窯段階から登り窯段階の製品が比較的多く出土するのも、221次調査地点の特徴である。古瀬戸段階の瀬戸製品は、むしろ他の調査地点に比べて少ない感があるが、大窯段階移行になって逆転する。図示した皿のほかにも、天目碗など、比較的多く出土している。221次調査地点が大乗寺の寺地であったことに関連するのか、検討する必要があるだろう。16は、備前焼のすり鉢である。口縁部はまだ肥厚せず、外傾するのみである。内面のすり目は、口縁部までは達せずに口縁のやや下でとどまる。221次調査地点では、この段階の備前焼すり鉢の出土が目立つようである。17は、表面的には赤く焼き締まって見えるが、軟質の陶器である。堺焼のすり鉢であろう。

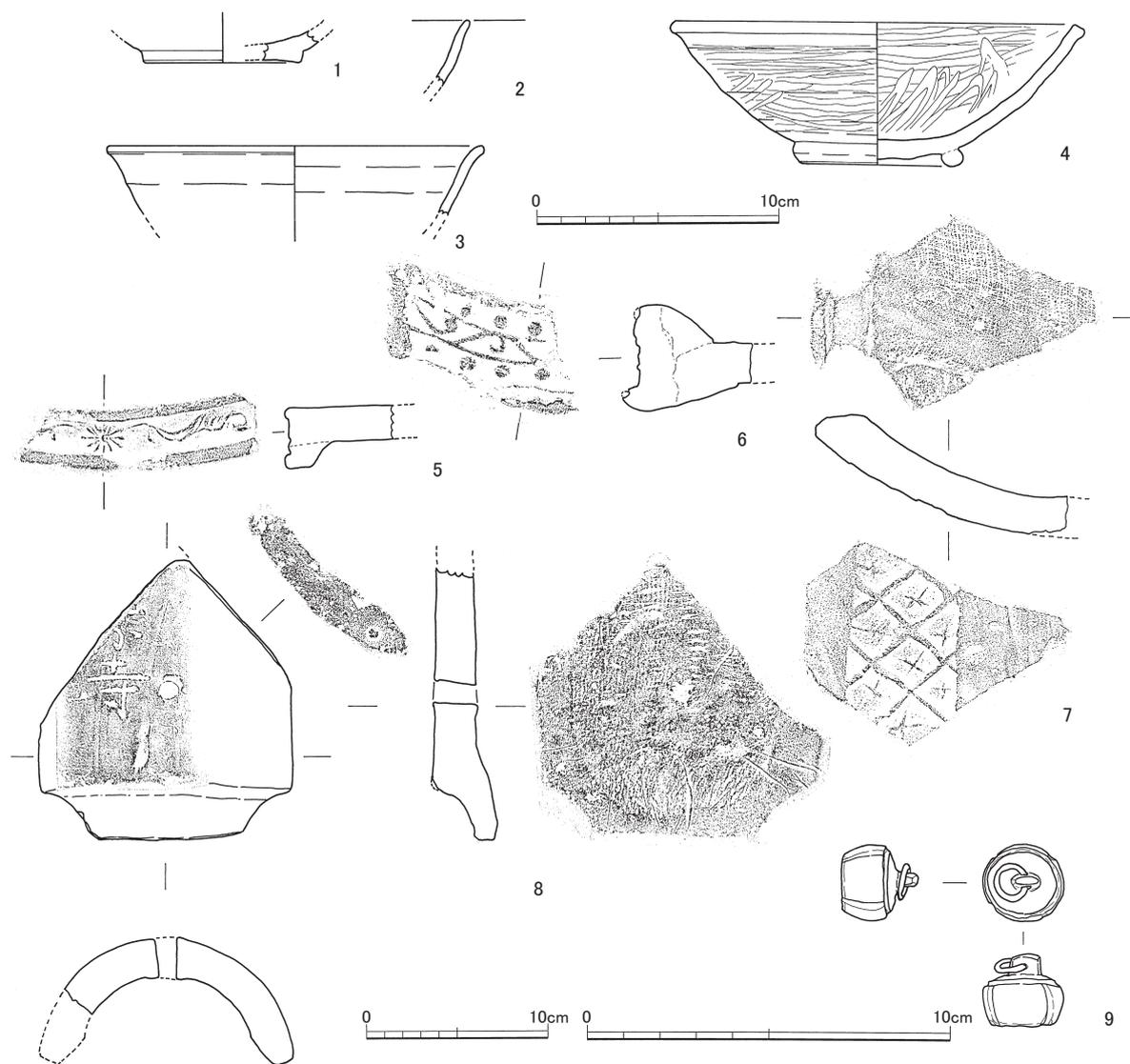
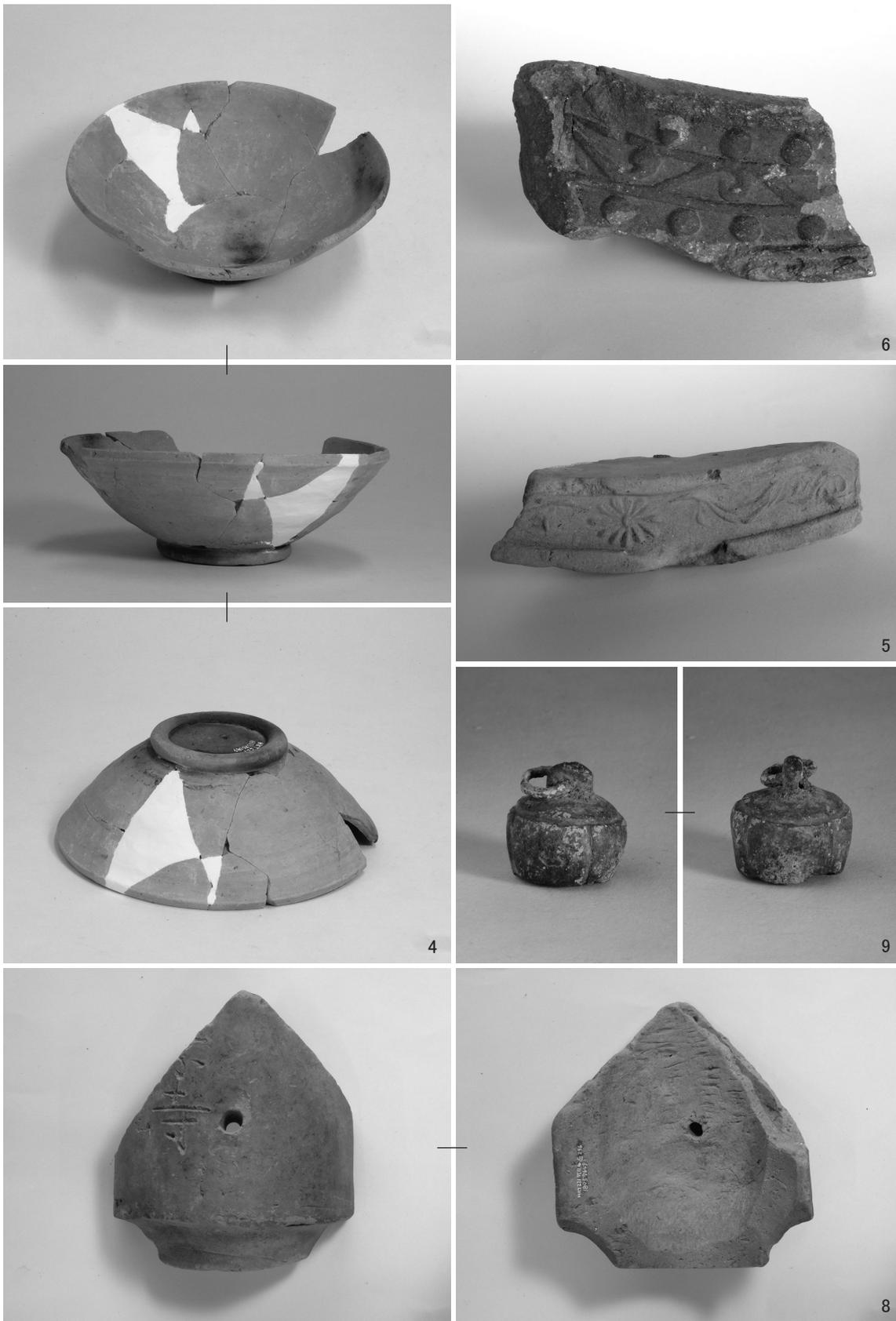
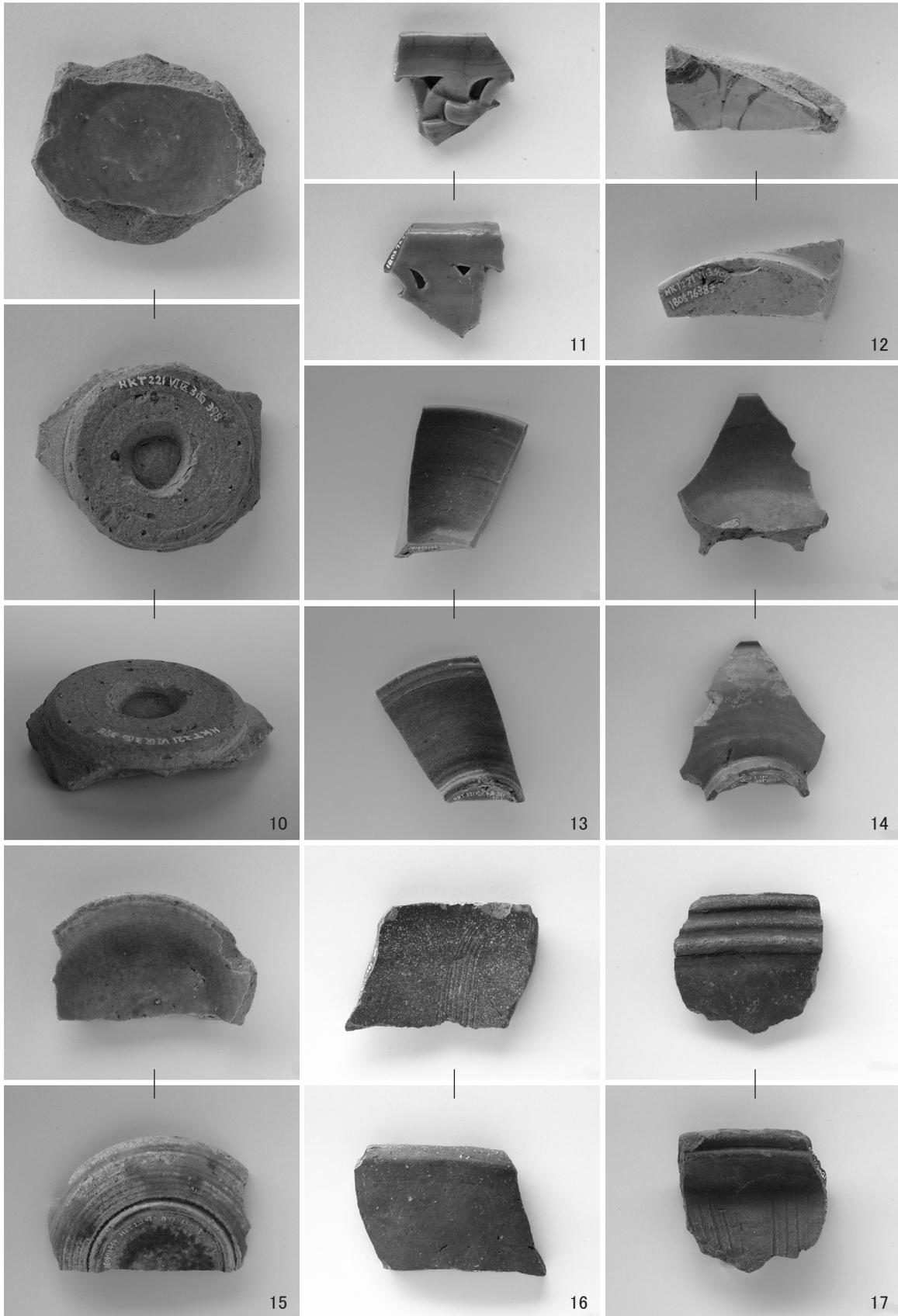


Fig.111 VI区その他の出土遺物実測図(1~4…1/3、5~8…1/4、9…1/2)



Ph.156 VI区その他の出土遺物1



Ph.157 VI区その他の出土遺物2

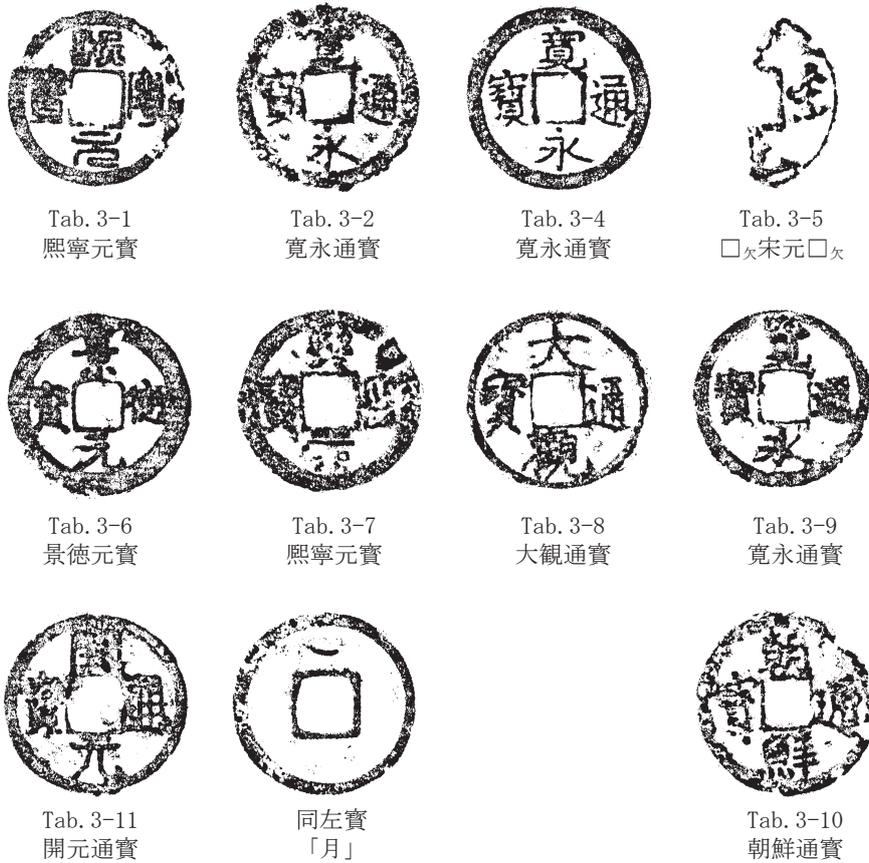


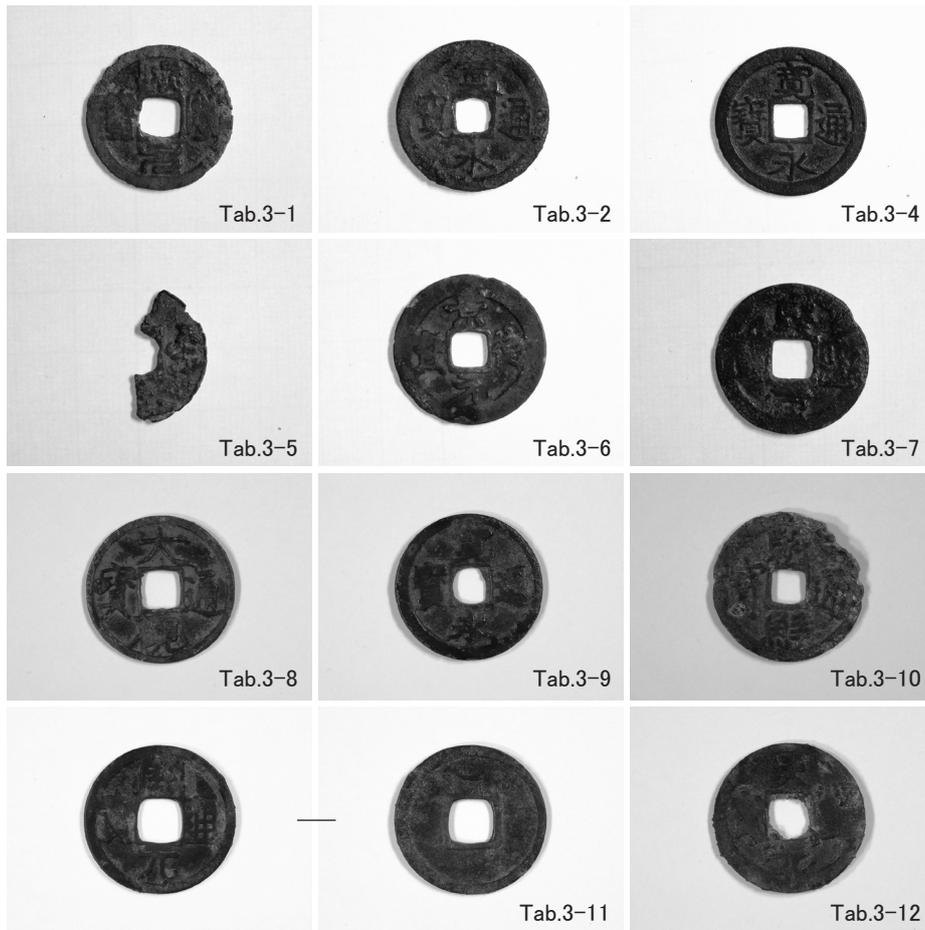
Fig.112 VI区出土銭貨拓本(1/1)

Tab.3 HKT221 出土銭貨一覧表

VI区

| 番号 | 出土遺構    | 銭貨名                             | 字体 | 備考         |
|----|---------|---------------------------------|----|------------|
| 1  | 017     | 熙寧元寶                            | 篆書 |            |
| 2  | 136     | 寛永通寶                            | 楷書 | 古寛永        |
| 3  | 159     | □永通□                            | 楷書 | 寛永通寶       |
| 4  | 296     | 寛永通寶                            | 楷書 | 古寛永        |
| 5  | 304     | □ <sup>欠</sup> 宋元□ <sup>欠</sup> | 行書 | 聖宋元寶折二銭を磨輪 |
| 6  | 393     | 景德元寶                            | 真書 |            |
| 7  | 504     | 熙寧元寶                            | 篆書 |            |
| 8  | 2面遺構検出  | 大觀通寶                            | 真書 |            |
| 9  | 採集      | 寛永通寶                            | 楷書 | 新寛永        |
| 10 | 415     | 朝鮮通寶                            | 真書 |            |
| 11 | 393 井筒内 | 開元通寶                            | 隸書 | 背上 月       |
| 12 | 393 井筒内 | 天聖元寶                            | 真書 |            |
| 13 | 393 井筒内 | 解読不能                            |    |            |
| 14 | 393 井筒内 | 解読不能                            |    |            |
| 15 | 393 井筒内 | 解読不能                            |    |            |

Tab.3、Fig.112に、VI区出土の銅銭を示す。14点の銅銭が出土した。錆のために解読できないものが3点ふくまれている。5は、銭貨名の1文字目と4文字目を欠くが、残された文字とその特徴から、「聖宋元寶」と判読できる。輪が細いこと、郭が広いことから、「聖宋元寶」折二銭の周囲を削ったもの、いわゆる磨輪銭であることがわかる。9は、「朝鮮通寶」である。朝鮮の銭貨の出土点数は、博多遺跡群全体で見ても少ないといえる。11は、「開元通寶」である。背面の上に「月」と記号が鋳出されている。12は、「天聖元寶」である。字体が少々崩れているようで、模鑄銭を疑う必要があるかもしれない。出土銭貨は、全体的に錆が乗っていて、遺存状態は良くない。



Ph.158 VI区その他の出土遺物3

### 3. 小結

VI区の調査においては、4面の遺構面を設定し、調査を行った。

第1面は、近世以降、第2面は中世末から近世初頭、第3面は中世中～後半、第4面は、古代から中世前半である。

基盤は砂丘砂層で、V区から続いた砂丘が北西方向に下降していく斜面にあたっている。

VI区においては、古代から中世の井戸が多数検出された点を特記しておく。第221次調査地点は、博多遺跡群の他の調査地点と比べて、調査面積が広い割には井戸の検出が少なかった印象がある。それは、おそらく調査対象地の半分強が、旧河川の堆積上を埋め立てたという地形的な条件によるものであろう。さらに、鎌倉時代後期以来、大乘寺の寺地となることで、都市民の活発な生活域から外れてしまったこともおそらく無関係ではない。そのような中で、VI区に中世の井戸が集中するかのよう  
に検出できたのは、この場の特性を示していると考えたい。一方で、これらの井戸が全く重複していないことも特徴的である。博多の基盤は海辺の砂丘であり、井戸を掘削しても飲用に適した水が得られるとは限らない。それでも、伏流水の水道はあって、現在でも良質な水を出す井戸を利用している民家は見受けられる。しかし、大部分の民家は、上水道が普及するまで、井戸水は洗濯などに使い、飲用の水は箱崎から水売りが来て買っていたという。中世の井戸は、良質な水脈を選んで掘られているようで、重複して掘られていることが通常である。本調査地点のように井戸が全く重複していないことの説明は思いつかず、おそらくは偶然の産物だと考えるが、興味深い状況である。

## 第六章 VII区の遺構と遺物

### 1. VII区の概要

#### ① 総説

VII区は、最初に石積遺構が出土したII区の東側に設定した調査区である。2021年6月10日に表土掘削に着手した。その後、調査の重点がVIII区、IX区、X区に移ったこともあって、VII区1面の調査に取り掛かったのは、10月8日であった。

表土直下には、全面にわたって大規模な攪乱が入っていた。また、隣接するII区の調査結果から、近世の遺構面が深く、表土下2.5m近くになっていきなり中世前半の遺構が姿を現すという状況が知られていた。そのため、立ち会いで土壌の様子を確認しながら、重機で一気に標高1.8m付近まで掘り下げをおこなった。

VII区においては、2面の調査を行い、11月17日埋め戻して終了した。

#### ② 第1面

バックホーによる、表土除去後の面を第1面とした。標高は、1.5～1.7mを測る。

土壌、井戸、溝などが出土した。井戸は近代以降のものがほとんどであるが、12世紀後半の048号遺構の掘方が部分的に検出されている。017号遺構、019号遺構は12世紀前半の廃棄土坑である。



Ph.159 VII区第1面(南東より)

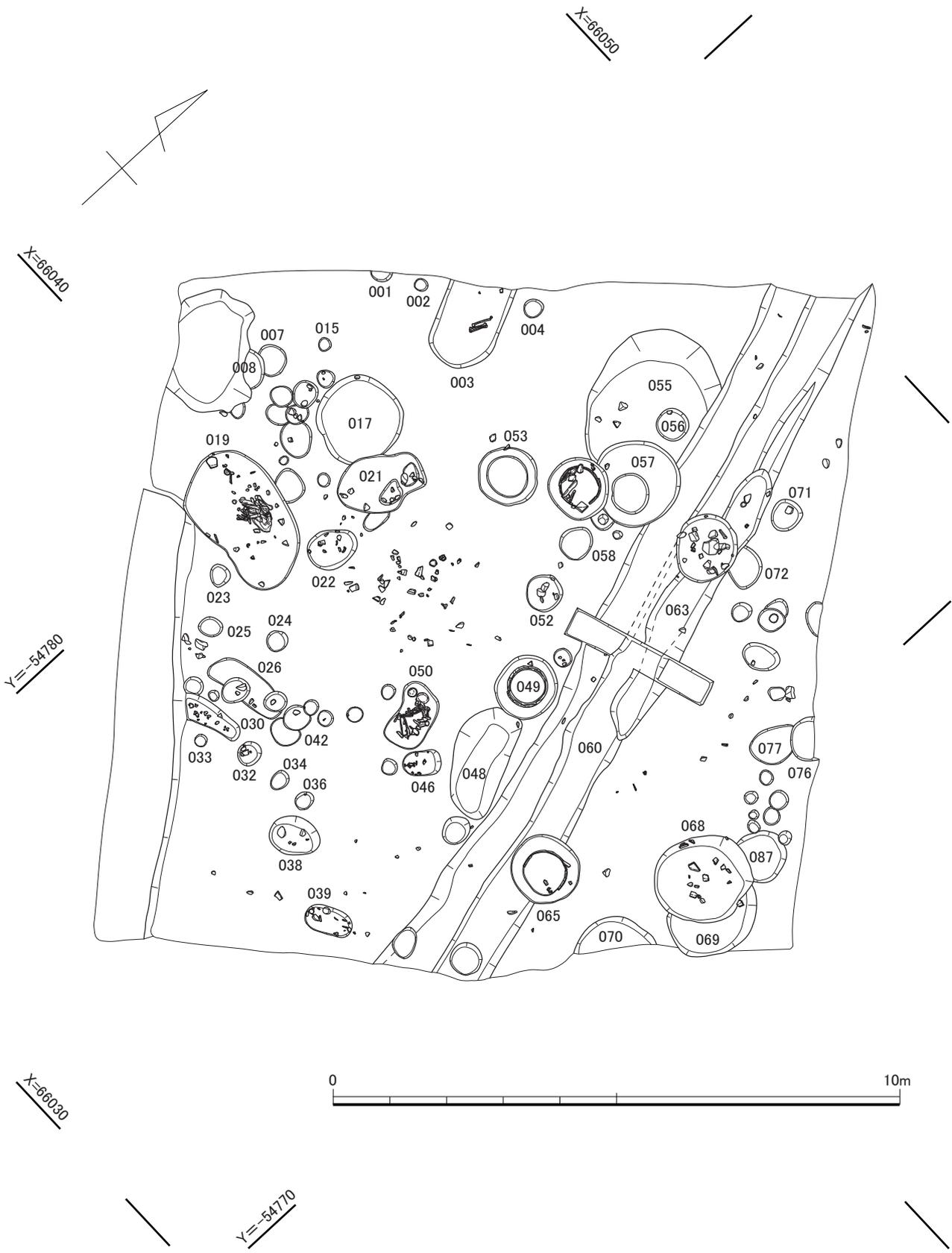


Fig.113 VII区第1面遺構全体図(1/100)

003号遺構は、土坑として検出したが、床面から人骨の一部が出土し、第2面調査時に拡張して精査したところ木棺墓になった。050号遺構は、老年男性の全身骨格が遺存した12世紀後半の土壇墓である。060号遺構は、調査区を南北に縦断する溝であるが、16世紀後半に属する。

第1面は、中世初頭から近世に及ぶ検出面である。

### ③ 第2面

第1面の20～30cmほど下で設定した調査面である。標高1.25～1.45mである。

柱穴、土坑、井戸、溝、土葬墓などを検出・調査した。003号遺構は、第1面で検出したが、本来は土坑である003号遺構と、それに切られた木棺墓とに分かれる。木棺墓の精査は、第2面で行った。木棺墓には人骨が遺存しており、鏡片を副葬していた。9世紀の埋葬である。

第1面で掘方の一部が検出された048号遺構は、第2面調査において井戸として検出し、精査した。井側の結い桶が良好に遺存していたため、重機による立ち割り調査を行い、冊板を取り上げた。

124号遺構は、第1面060号遺構に東接する溝状遺構で、調査区北壁の土層観察では、第1面で検出しなくてはならなかった遺構である。060号遺構と同規模で、主軸方位もほぼ一緒である。時期的には、060号遺構に先行する溝で、060号遺構は、124号遺構の掘り直しと考えられる。

調査区の中央部分では、大型廃棄土坑である110号遺構（第1面）周辺に古代以降の土坑が重複して検出された。Fig. 114の遺構全体図では読み取りにくいですが、171号遺構は、162・163号遺構の床面から検出した。遺物の年代観を加えて前後関係を整理すると、最も先行するのが171号遺構（8世紀）→163号遺構（9世紀）→162号遺構（11世紀後半）→154号遺構（年代未詳）→110号遺構（11世紀後半）となる。

第2面は古代から12世紀後半中世初頭にかけての遺構検出面と考えることができよう。



Ph.160 VII区第2面(東より)

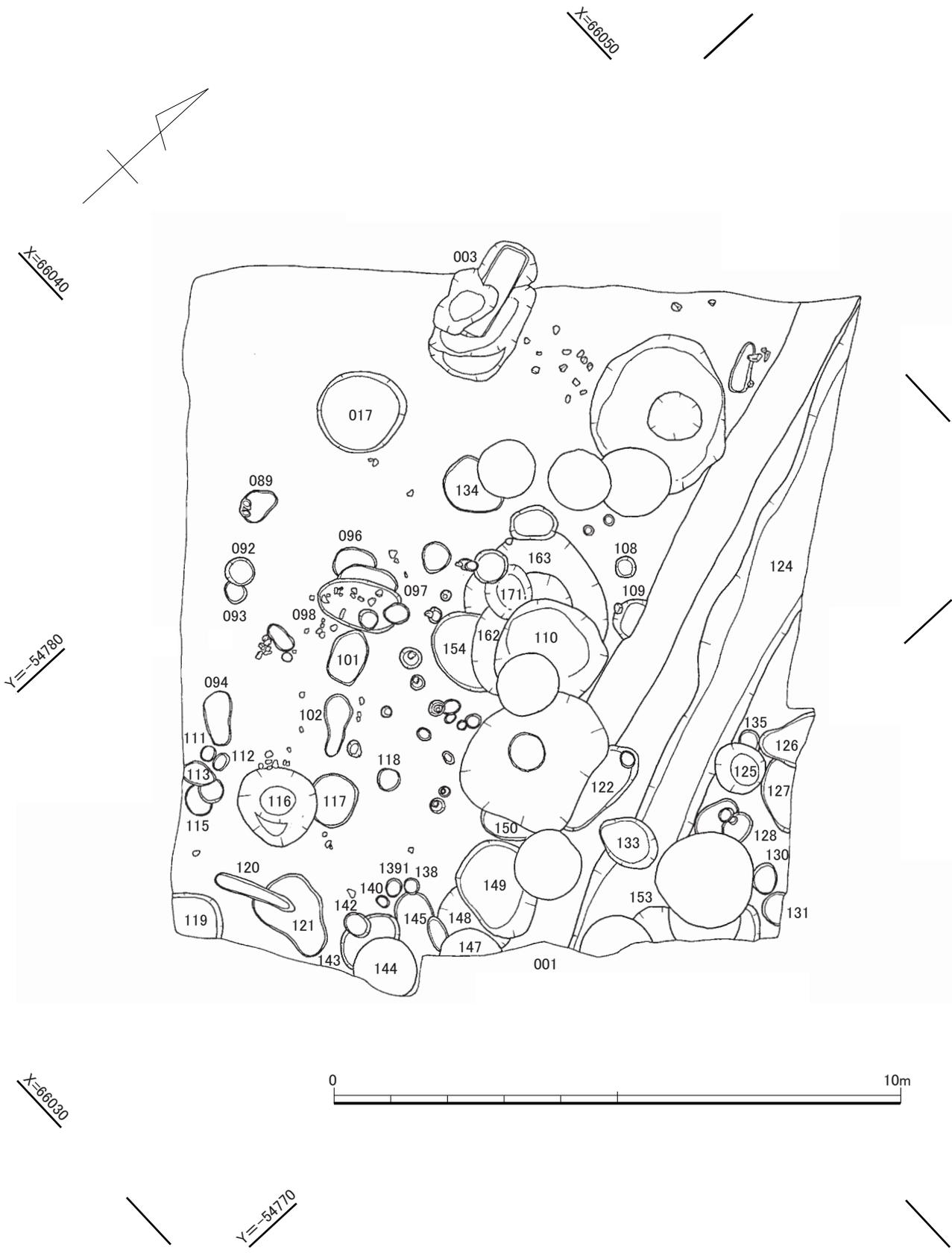


Fig.114 VII区第2面遺構全体図(1/100)

## 2. VII区の主要な遺構と出土遺物

VII区では、337基の遺構を検出、調査した。本書の限られた紙数ではすべての遺構・遺物について報告するのは不可能なので、以下、主要な遺構と出土遺物について報告する。

### ① 003号遺構

調査区の北壁際から検出した木棺墓である。第1面調査時には、楕円形の土坑として検出した。土坑の底から四肢骨の一部が顔をのぞかせており、人骨の可能性があったために、第2面調査時に骨を追って掘り広げる形で精査した。これに当たって、北壁法面を部分的に削り込んで掘削し、遺構の全体確認を行った。

003号遺構は、正確には4基の土坑の切り合いである。第1面においては、Fig.116のA・B・Cを検出した。木棺墓はそれらに切られて遺存したものである（実測図では、人骨がCの上に乗っている部分がある。これは、人骨取り上げ後、Cの調査時に頻発した雨のためその上端が崩れたため、Cが本来の形状以上に大きくなってしまった結果である）。本項では、木棺墓とその出土遺物に限って、003号遺構として報告する。

003号遺構は、長辺約1.8m、短辺0.55mの木棺を、長方形の墓壇に据えたものである。人骨は、木棺内にやや散



Ph.161 VII区003号遺構(南東より)

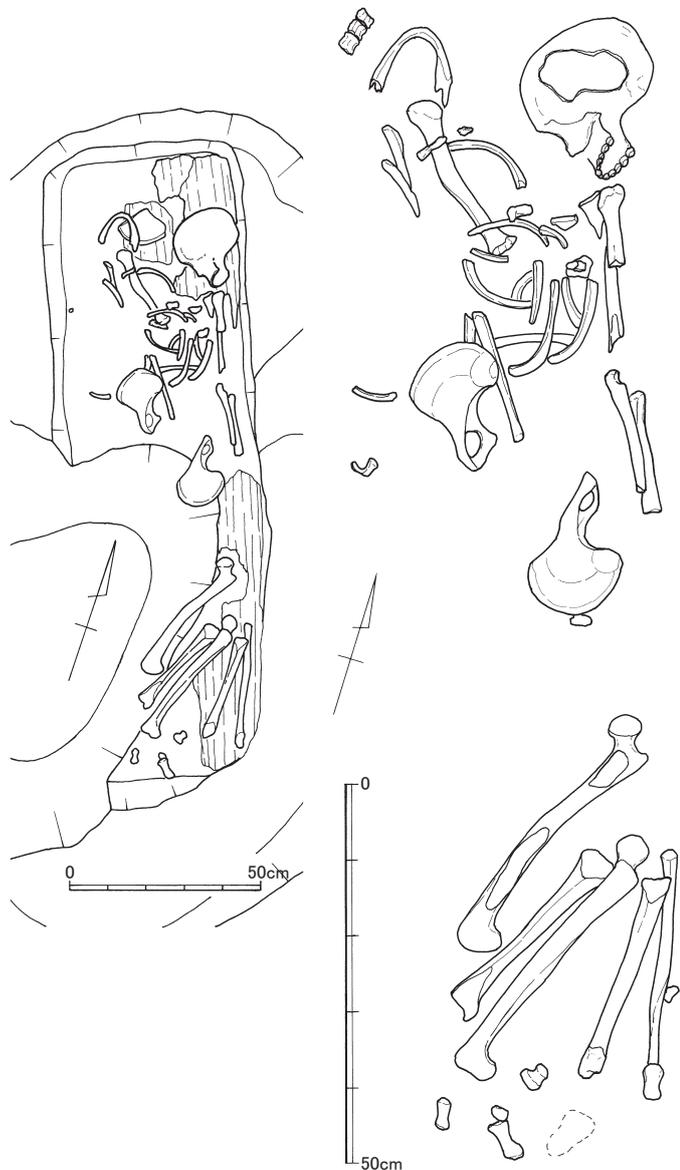
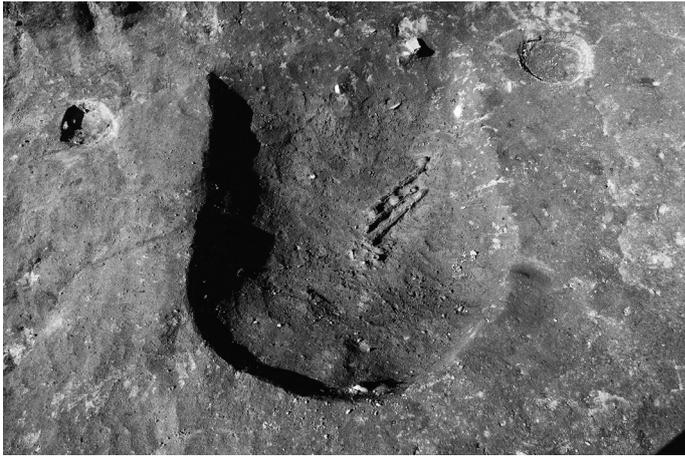


Fig.115 VII区003号遺構実測図1(1/10)



Ph.162 VII区003号遺構検出状況(南東より)



Ph.163 VII区003号遺構完掘状況(南東より)

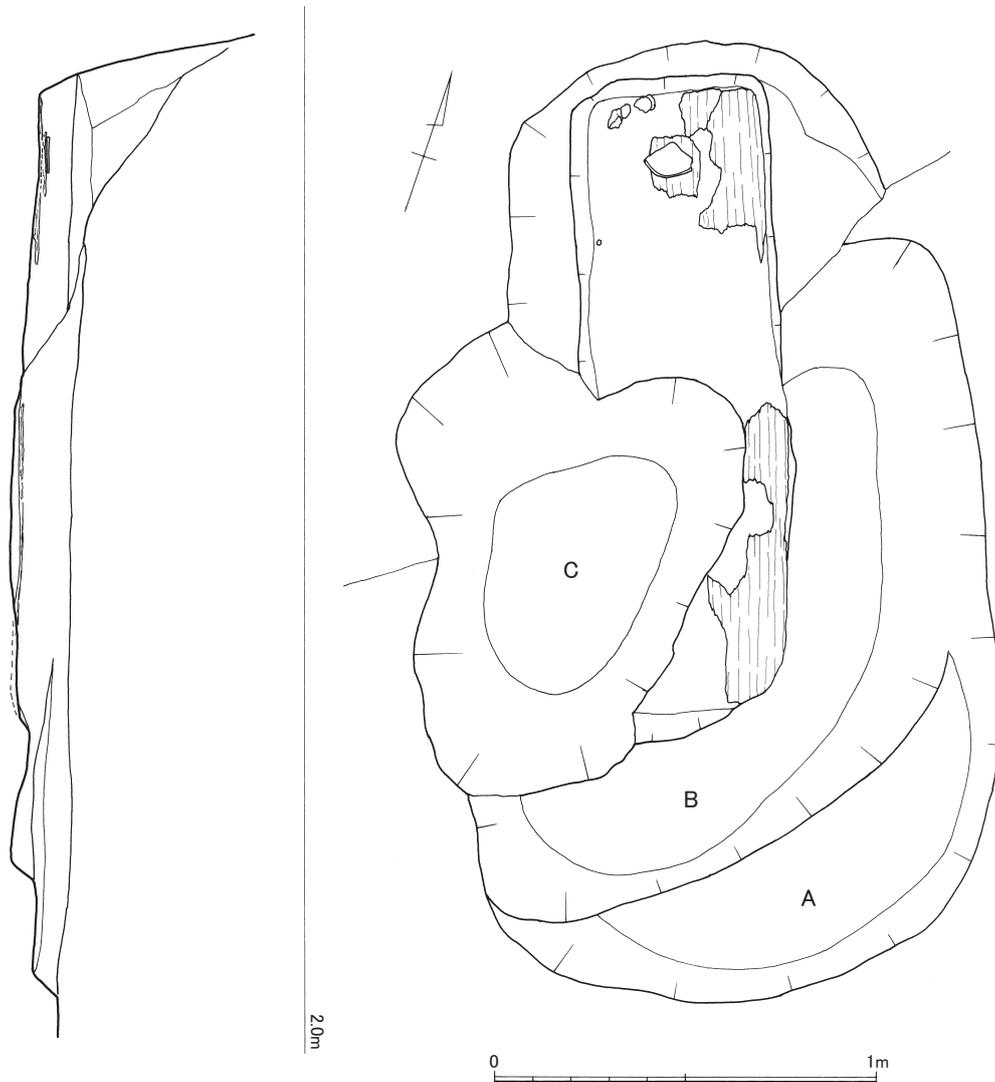
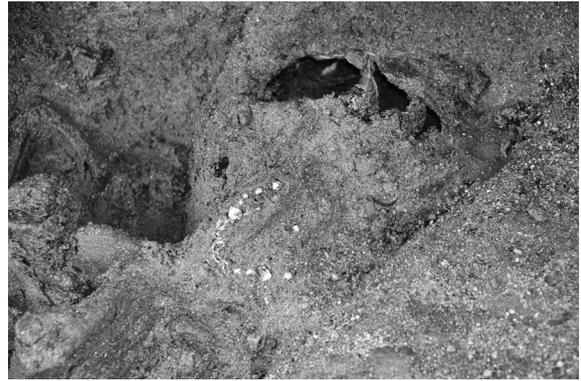


Fig.116 VII区003号遺構実測図2(1/20)



Ph.164 VII区003号遺構人骨遺存狀況-上半身



Ph.165 VII区003号遺構人骨遺存狀況-頭部



Ph.166 VII区003号遺構人骨遺存狀況-胸部



Ph.167 VII区003号遺構人骨遺存狀況-腰部



Ph.168 VII区003号遺構人骨遺存狀況-下肢



Ph.169 VII区003号遺構木棺遺存狀況-上半身部分



Ph.170 VII区003号遺構鏡片出土狀況



Ph.171 VII区003号遺構鐵釘出土狀況



Ph.172 VII区003号遺構出土鏡片

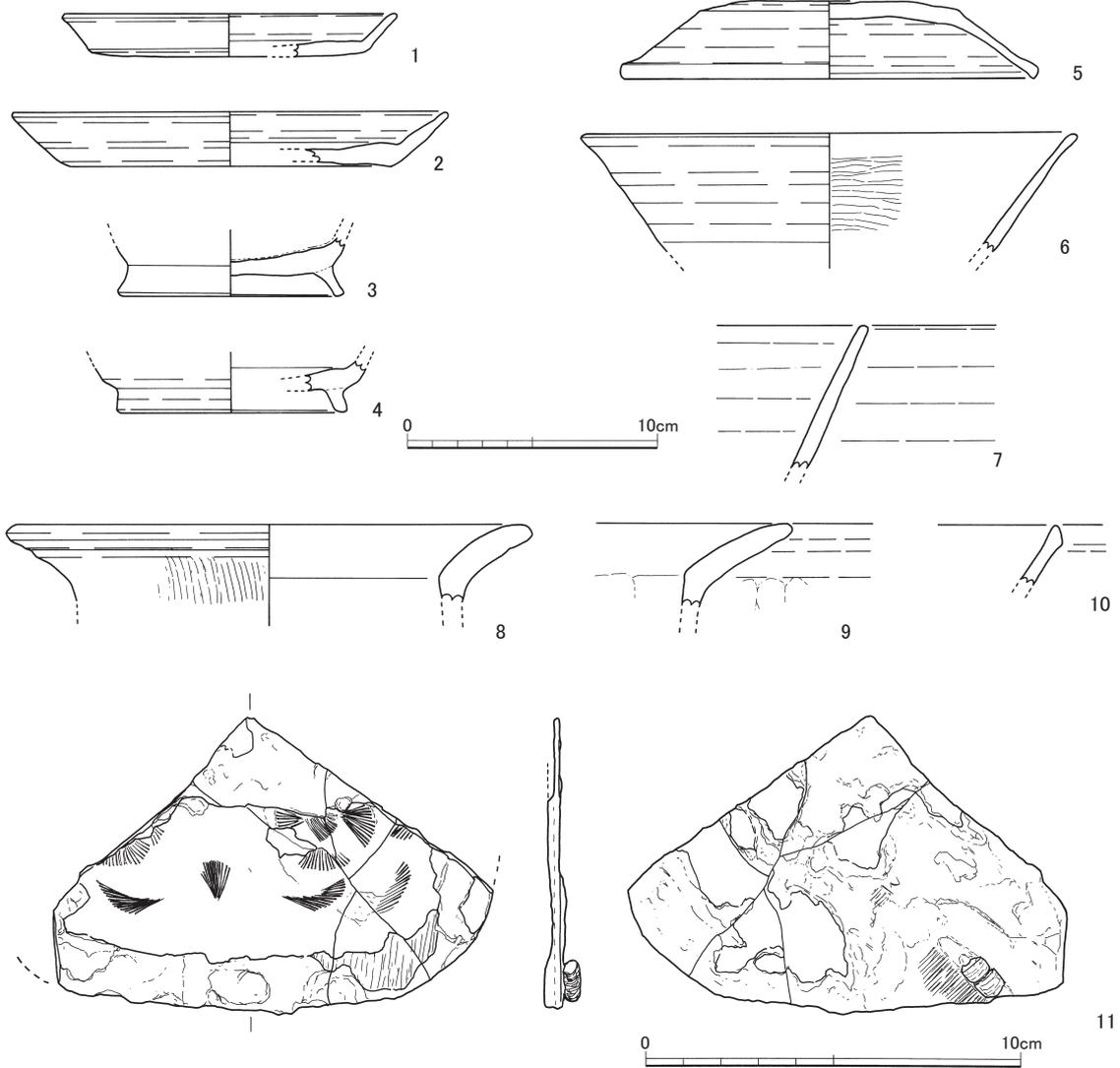


Fig.117 VII区003号遺構出土遺物実測図(1/3、1/2)

らばる形で出土した。おそらく遺体の腐朽が進んだ状態で木棺はまだ内部の空間を保っており、その時点で何らかの人為的な影響を受けたものであろう。棺内には銅鏡片が副葬品としておかれていた。

木棺の床材は、人骨の下部にわずかに木質として認められた以外は、銅鏡の下では銅イオンのためか比較的残っていた。また、木棺の西辺、遺存部分の中ほどから鉄釘が立った状態で出土した。

頭位あたりの棺底から鏡面を上に向けた鏡片が出土した。一辺13cmほどの隅丸の方形鏡である。鏡背には、櫛の背の一部と歯の痕跡が残っていた。木製の解き櫛が、鏡片と重ねて副葬されていたことを示す。鏡背には、刻線で扇状の文様がちりばめられている。中国鏡であろう (Fig.117-11)。

その他、木棺墓の調査で出土した遺物を示す。1~5は、土師器である。1・2の皿は、底部をへら切りする。6は、黒色土器A類の椀である。外面は横ナデ、内面は横方向のへら磨きする。7は須恵器の高台坏である。8・9は、土師器の甕である。10は、白磁碗の小片である。輸入陶磁器としては古手の様相を示すが、他の遺物との比較から見ると混入の可能性が高い。

鏡片の下に残っていた棺材の木片を、放射性炭素年代測定AMS法で測定した結果では、8.1%範囲が782~791年、60.1%範囲で821~881年という結果が出た。出土遺物の年代観からも9世紀の埋葬遺構であるとして大過ないであろう。

なお、出土人骨については、附論で詳述している (265~266頁)。

## ② 017号遺構

第1面の北辺近くより検出した土坑である。直径1.4mの円形で、検出面からの深さは1.2mをはかる。土坑側壁はほぼ直立している。湧水が激しく、河川堆積砂層に掘られていた土壌なので、壁の崩落が頻発し、正確な底面の形状は確認できなかった。

埋土は、黒~黒灰色の炭化物を多く含む泥土である。多量の木質遺物が含まれていた。

Fig.119~122に出土遺物の一部を示す。1~14は、土師器である。1~7は皿で、5は底部を糸切り、他はへら切りする。8~10は丸底坏、11~14は椀である。8はへら切り、9・10は糸切りする。13は口縁下を沈線風にくぼませ、玉縁に似せる。14の高台内には、窯印が見られる。6・7・11の内面には、漆の付着がみられる。漆パレットとして用いられたものと思われる。15~20は、瓦器椀である。いずれも回転台成形による筑前型瓦器である。21・

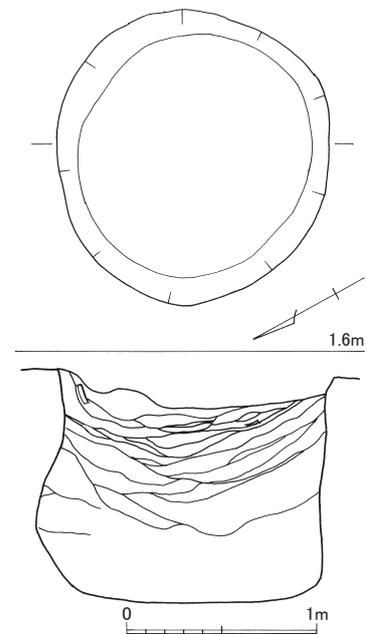
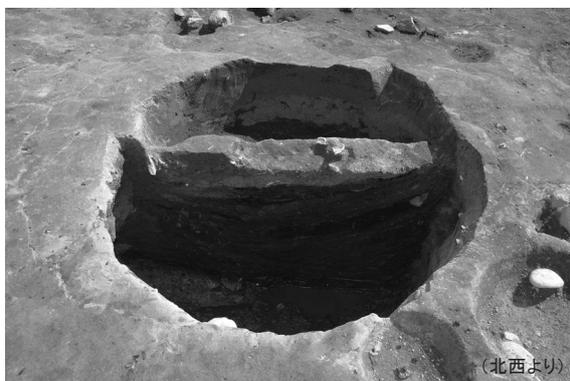


Fig.118 VII区017号遺構実測図(1/40)



(北西より)



(南東より)

Ph.173 VII区017号遺構

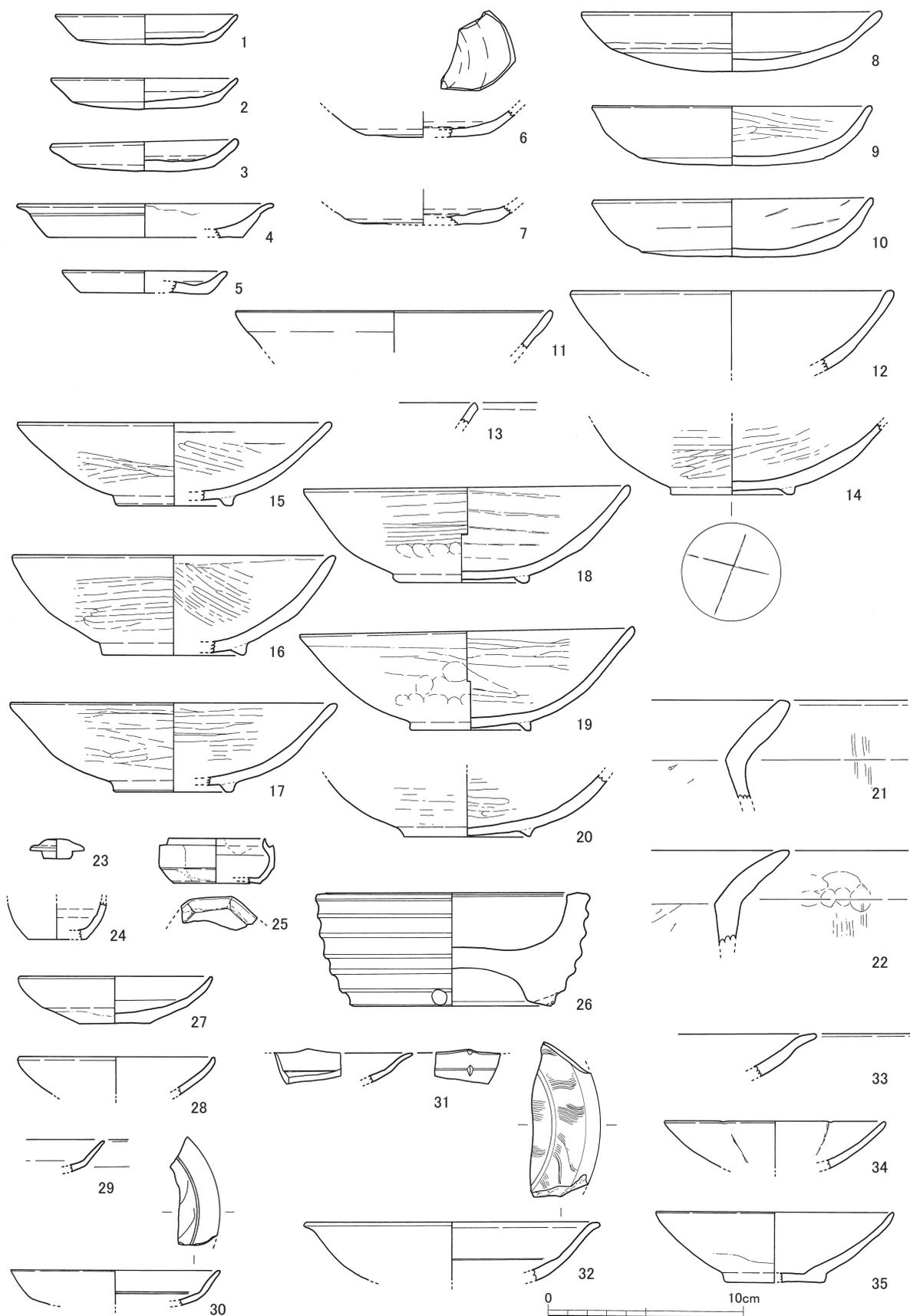


Fig.119 VII区017号遺構出土遺物実測図1(1/3)

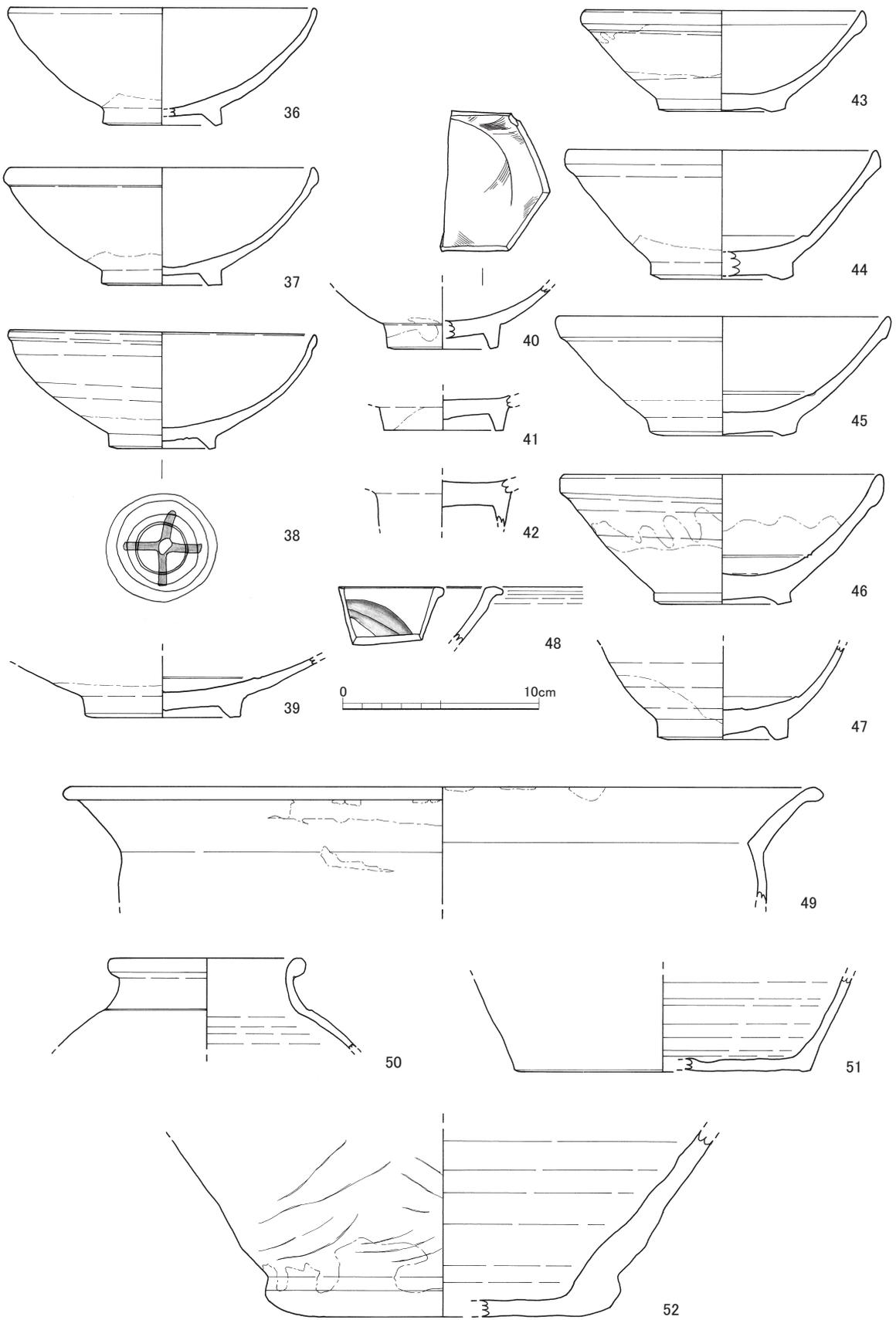
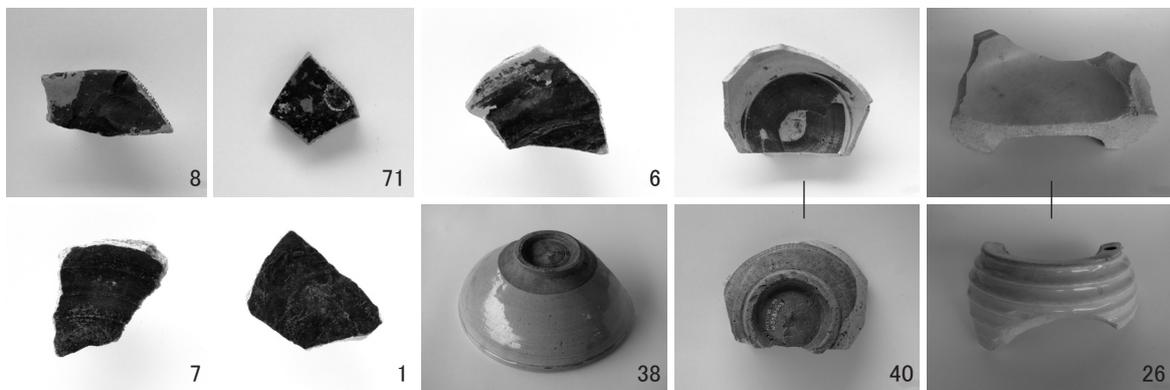


Fig.120 VII区017号遺構出土遺物実測図2(1/3)

22は、土師器の甕である。23～47は白磁である。23は小壺の蓋、24は小壺の身である。25は、青白磁の合子蓋である。26は、香炉であろう。厚手で重厚、脚部の一ヶ所に穿孔がある。27～35は皿、36～47は碗である。38の高台内には、「十」の墨書がある。43は、いわゆるIV類の玉縁碗であるが、見込みに圈線はない。47は、体部が立つ深碗で、見込みは、大きく釉を剥いで輪剥ぎとする。48は、白磁鉄絵の大皿である。49～52は、陶器である。49は、黄釉鉄絵盤の口縁部である。50は壺の口縁部で、緑褐色の釉を施す。51は、高麗系無釉陶器の壺底部である。53は、平瓦である。54は瓦磚である。55・56は、滑石製の石鍋である。外面には、煤が付着している。57～70は、木製品である。57は、剣先形を呈する。基部には、U字型の浅い割りこみがあり、柄を装着したものと思われる。58は、ヘラである。基部を欠損する。59は、枷の棧であろうか。厚みのある板材で、片側の面と一方の側面がゆるく弧を描くように面が削られているので、枷の棧ではない可能性もある。60は木釘を打ち込んだ板材である。両側縁、両小口は生きている。61は下駄である。削り出しの二本歯で、長さ15cm弱、左右の緒孔の間隔は7cmほどで、子供用の下駄であろう。62は、紙燭である。長さ27cmの粗く削った棒材で、一端が焦げて炭化している。63は、鏃型木製品である。一方の逆刺の先端をわずかに欠くが、ほぼ完形で、全長10.7cm、先端から区までが5.6cm、茎部5.1cm、刃部は長辺で4.5cmをはかる。刃部は鋭利で内湾して尖る。逆刺は、後方に大きく突き出す。しいて言えば、平根式の範疇であろうが、通常の平根式とは、鋭くとがる先端、後方に突き出した逆刺など、大きく異なる（後述、259頁）。成形は丁寧で、頸部や茎部も細かい削りで丸みを出している。忠実に鉄鏃を模したもので、製作見本であり、いわゆる「試し」であろう。64は、薄板を削ったもので、完形品である。形代であろう。65は、櫛である。遺存した部分で、背から歯までの幅約3.5cm、背の厚さ0.8cmをはかる。66は、組み物の棧であろう。柄の中央に細い木釘が残っている。67は、断面四角形、頭部は方頭状に削り出す。用途不明。68～70には、墨書がなされており、木簡である。68の表面には、「蘇民将来子孫」の文字が見える。災厄を免れるための、蘇民将来符である（後述、257頁）。頭部は両側から切り込みを入れて、圭頭に作る。下端は折損しており、文字もそこで切れている。表面は、頭部に四か所、上下左右に墨書があるが判読できない。切込みの下から文字は始まり、「蘇民将来子孫」と書く。その下、折損部分にも墨痕はあり、「之者」「之宅」「之門」などと続いたものであろう。なお、蘇民将来の「蘇」は、草冠の下に左に「禾」を。右に「魚」を書く。裏面は、二行書きされる。まず、頭部のすぐ下に数個の丸印とそこから四五行の垂下したような墨書がある。ややおいて、右行が始まる。左行は右行の下半分に認められる。釈文は検討中である。遺存長9.1cm、幅1.6cm。69は、表面に大きく墨書されている。頭側は、削りを入れて折り取り、台形に成形する。墨書は、片面にのみ記されている。墨書は右辺と上辺で途切れており、大きな墨書板の左下角を転用したものである。左行の



Ph.174 VII区017号遺構出土遺物1

二文字が全体の書き止めにあたり、「上之」と読める。右行は大きくは三文字だが一字目は上を欠損、二字目は一見「上」に見えるが左側が削り取れていて不明、三文目は文字が重なっているようで判読できない。なお、左片の下部に小さな穿孔がある。70は、幅1.9cm程度の薄い板材である。下端が二つに割れているが、この部位に文字らしい墨痕が認められる。判読不能である。この他、箸ほかの木片が多量に出土している。

出土遺物の年代観では、12世紀前半の土坑と考えられる。なお、炭化木片を、放射性炭素AMS法で測定したところ、暦年代範囲として894～927年（28.0%）、947～1022年（67.4%）の結果が出た。

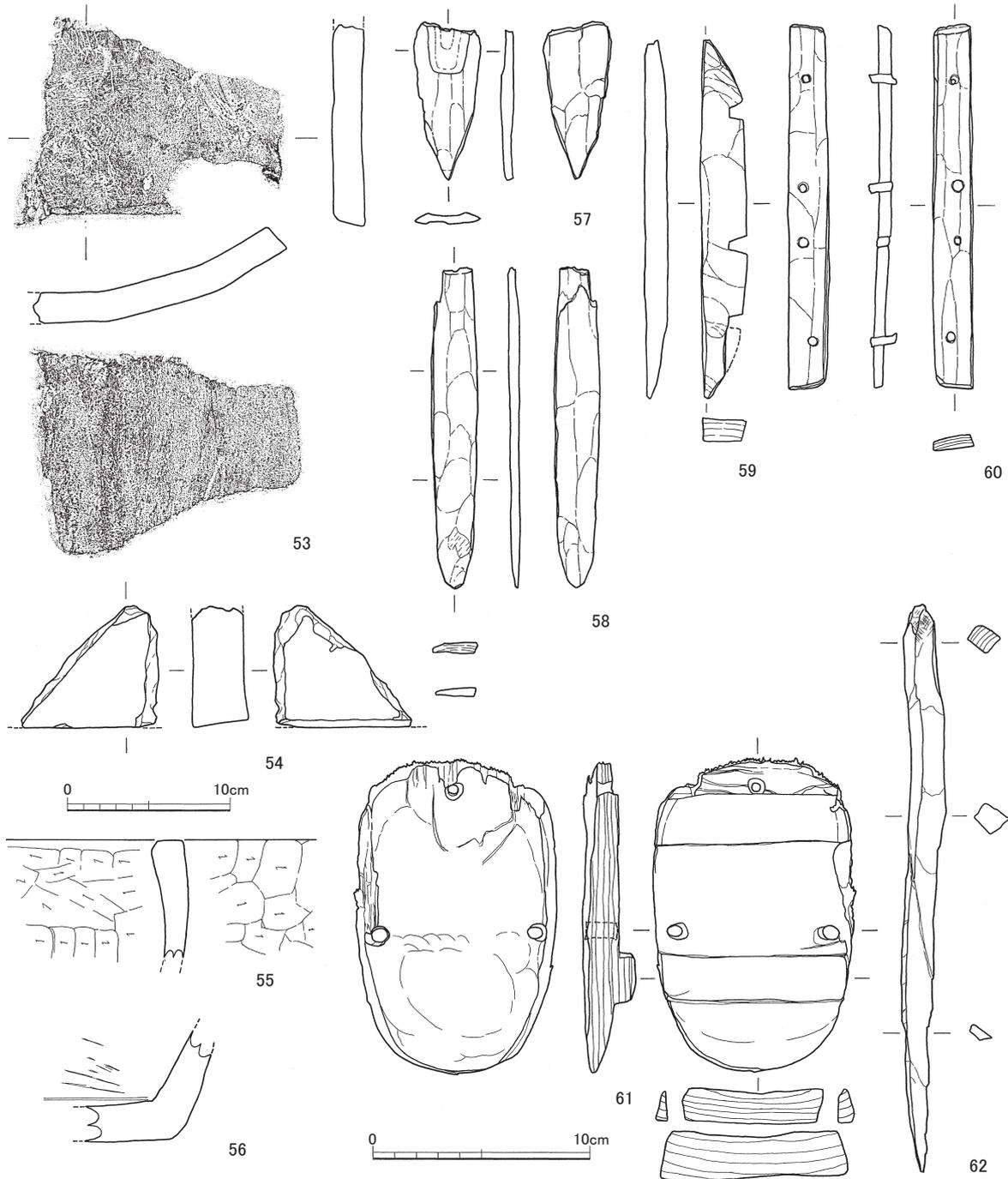


Fig.121 VII区017号遺構出土遺物実測図3(1/3、53・54…1/4)

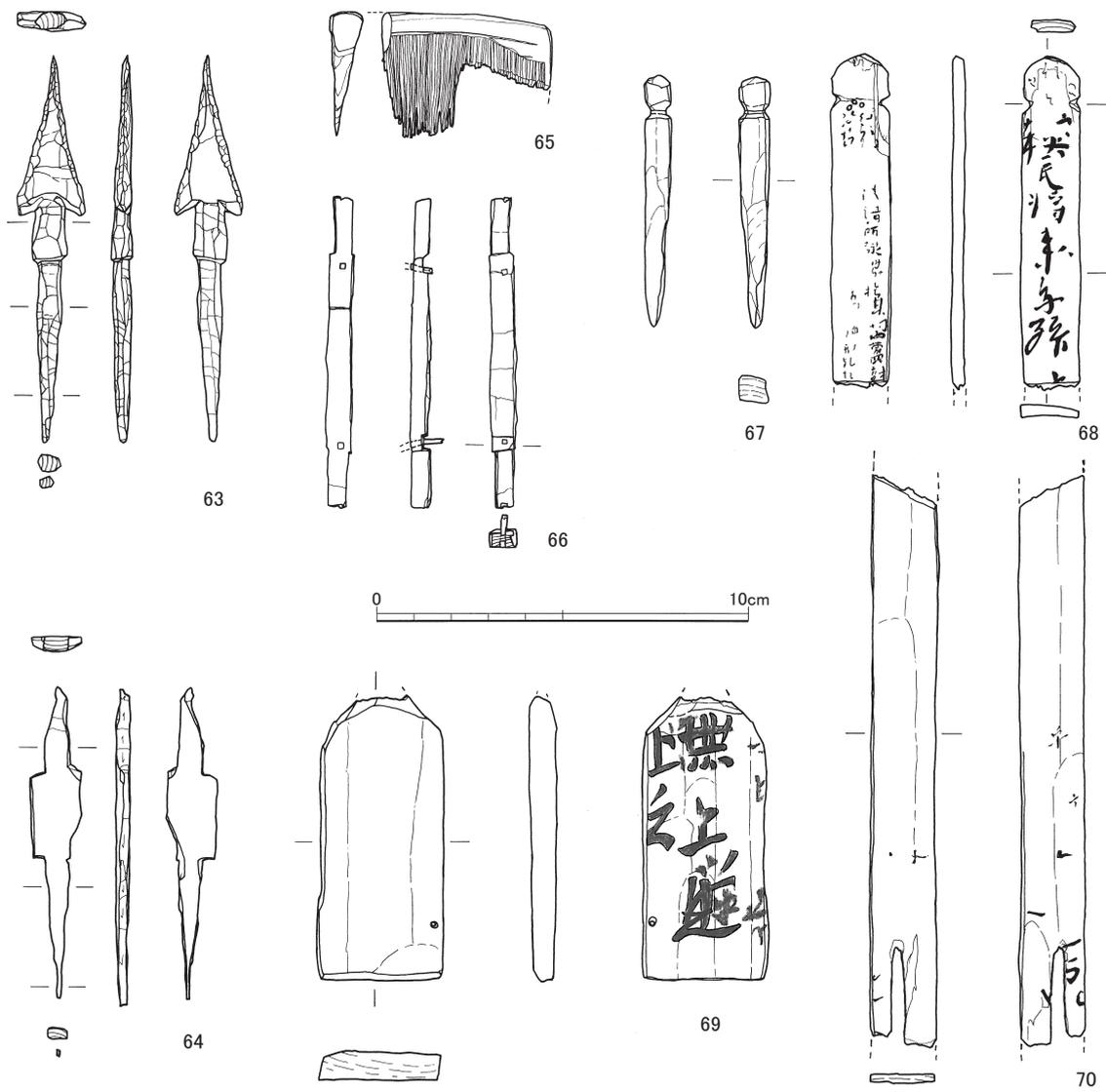
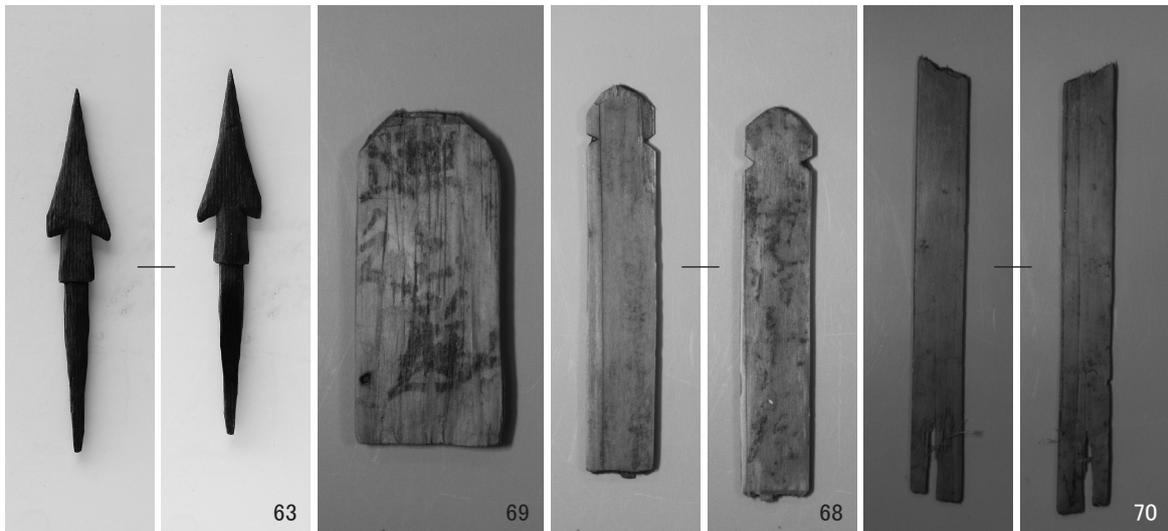


Fig.122 VII区017号遺構出土遺物実測図4(1/2)



### ③ 019号遺構

第1面の西辺近くから検出した円形の土坑である。直径3m前後の略円形を呈し、検出面からの深さ6cm程度の浅い掘り込みである。土壌の中央付近からまとまって牛の骨が出土した。一部、関節状態を思わせるが、全体としてはバラバラで、しかし四肢骨はおおむね方向をそろえているようで、解体され、骨のみになってからひとまとめに廃棄されたものと考えられる。

出土遺物の一部を、Fig.124に示す。1～7は、土師器である。1は皿で、回転糸切りする。2・3は、丸底坏である。体部外面は横ナデ、内面は口縁部付近を横ナデ、体部はコテ当てして平滑に整える。4は、黒色土器A類碗である。5～7は土師器碗で、いずれも高台は高く、外方に踏ん張る。8・9は楠葉型瓦器の皿と碗である。8の体部には、粘土板を引き合わせて貼り合わせた痕跡が認められる。口縁部外面は横ナデ調整、体部には指頭圧痕が並ぶ。内面は、密にヘラ磨きする。10は、楠葉型黒色土器B類碗である。内外面とも密にヘラ磨きする。小片のために判然としないが、外面のヘラ磨きは分割ヘラ磨きのようなものである。11～13は、白磁碗である。12は、体部に縦にヘラで刻みを入れてくぼませ、輪花に作る。13の釉は細かく発泡しており、二次的に被熱したことがわかる。火災にあったものであろう。14は、無釉陶器の捏ね鉢である。15は、土師器の甕の口縁である。内外面ともに強い横ナデ調整が認められる。

出土遺物から、11世紀後半の、食物残渣を捨てた廃棄土坑と考えられる。なお、出土した木炭で放射性炭素AMS法による測定を行なったところ、991～1033年(95.4%暦年代範囲)という結果が出ている。

遺物の年代観とおおむね一致しているといえよう。



Ph.176 VII区019号遺構(南西より)

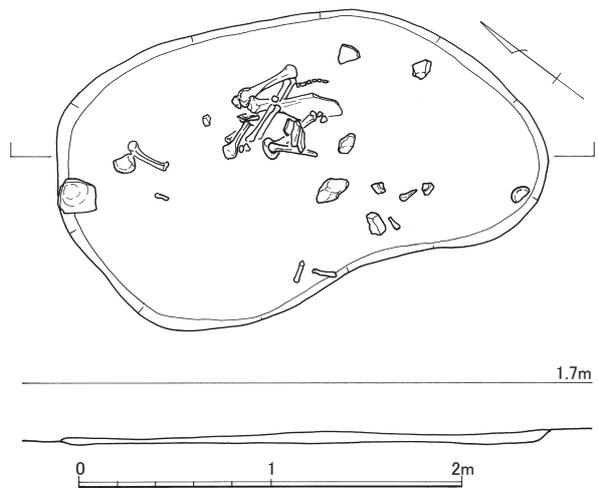


Fig.123 VII区019号遺構実測図(1/40)



(北より)



(南東より)

Ph.177 VII区019号遺構獣骨出土状況

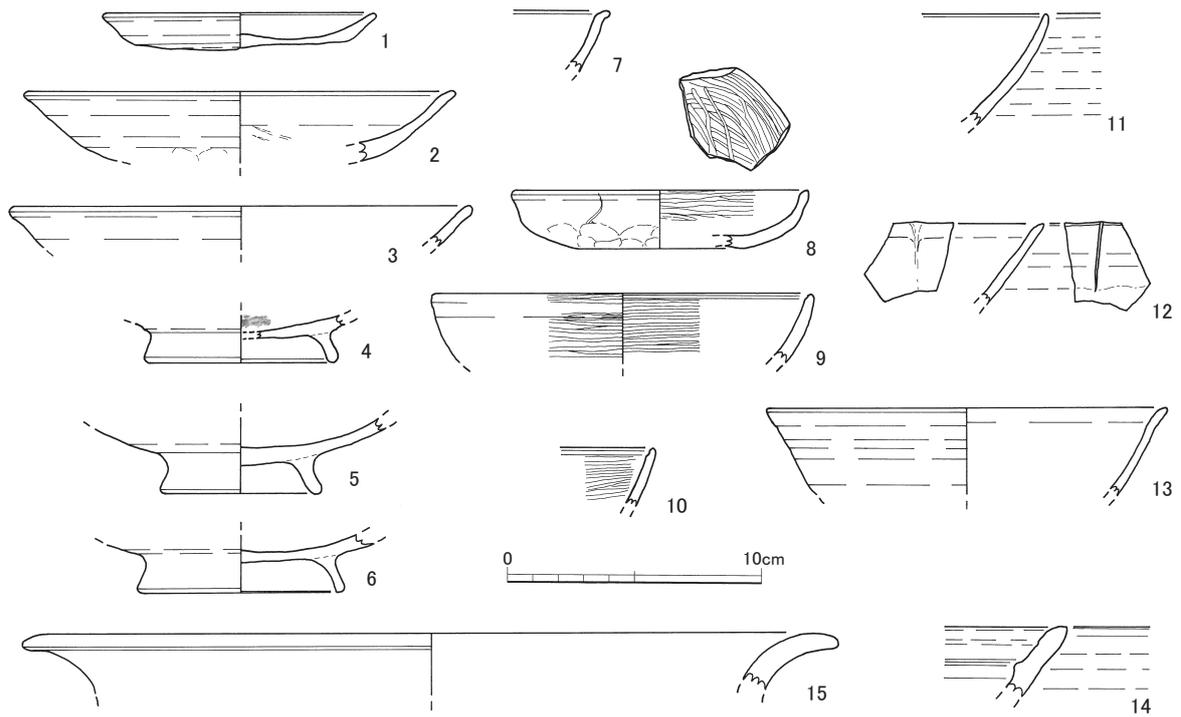


Fig.124 VII区019号遺構出土遺物実測図(1/3)

④ 048号遺構

第1面で検出した井戸である。一辺約2.8mの略円形の掘りかたの中央に、木桶を伏せて据え、井側とする。木質の遺存が良く、冊板の取り上げが可能であった。

出土遺物をFig.126・127に示す。1～15は、土師器である。1～5は皿で、回転糸切りする。1～3はへら切り、4・5は回転糸切りする。6～10は、坏である。底部は回転糸切りする。11～15は、碗である。16は楠葉型瓦器碗である。外面のへら磨きは、口縁部下に数条見られるのみで、内面のへら磨きも条線の間が大きく開いている。胎土は白色できめ細かく、器壁は薄い。17～37は、



Ph.178 VII区048号遺構(東より)

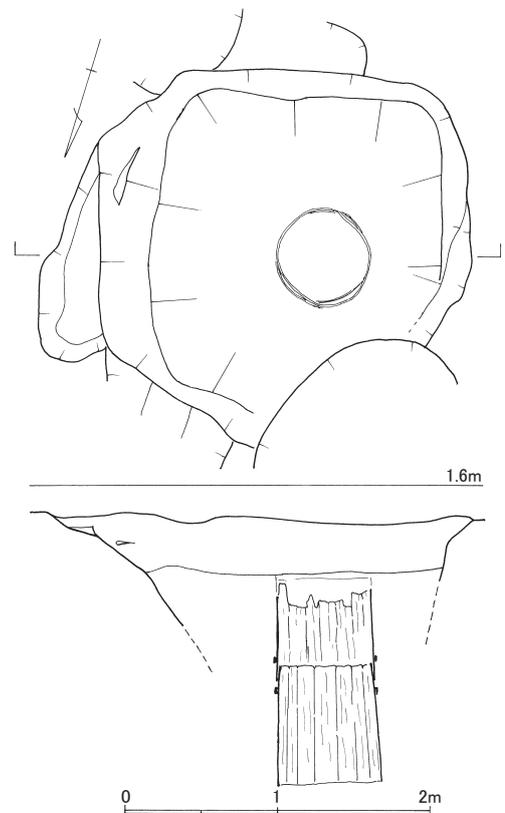


Fig.125 VII区048号遺構実測図(1/50)



Ph.179 VII区048号遺構井側桶、箍遺存状況

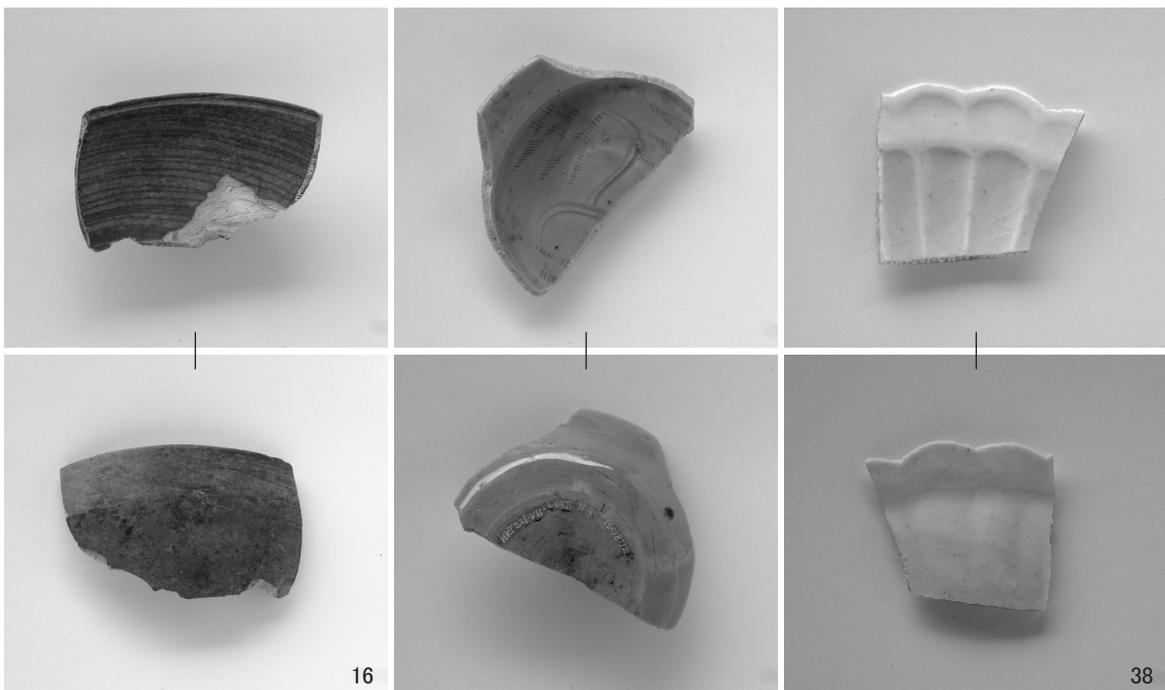


Ph.180 VII区048号遺構井側桶遺存状況

白磁である。38・39は青白磁の皿である。38は、体部から口縁まで輪花に作る。40～42は、青磁である。40・4は同安窯系青磁の皿で、40の底部には墨書が見られる。一部を欠失しているが、「上」であろう。42は、龍泉窯系青磁の小碗である。43～46は、中国陶器である。45は、無釉陶器捏ね鉢の口縁である。47は、東播系須恵器の捏ね鉢である。口縁部の外面は、焼成時の炭素吸着によって黒変する。48～51は、土師質土器である。48・49は鍋で、外面は薄く煤けている。50・51は、甕の口縁である。

52～55には、木製品を示した。52は板草履の芯材の破片である。53～55は、箸である。箸は多数出土しているが、おおむね53・54の長さ（20cm前後）が多く、55のように長いもの（25cm程度）が若干混じる。Ph. 182に、最下段の井側に使われていた結び桶の冊板を示す。冊板は、長さ70cm、幅10cm、厚さ2cmで、内外面は手斧、小口面は槍鉋で削って面を取ったものと思われる。桶には竹を編んだ箍が廻っていたが、現場で崩れてしまい取り上げられなかった。

出土遺物から、12世紀後半の井戸と考えられる。



Ph.181 VII区048号遺構出土遺物

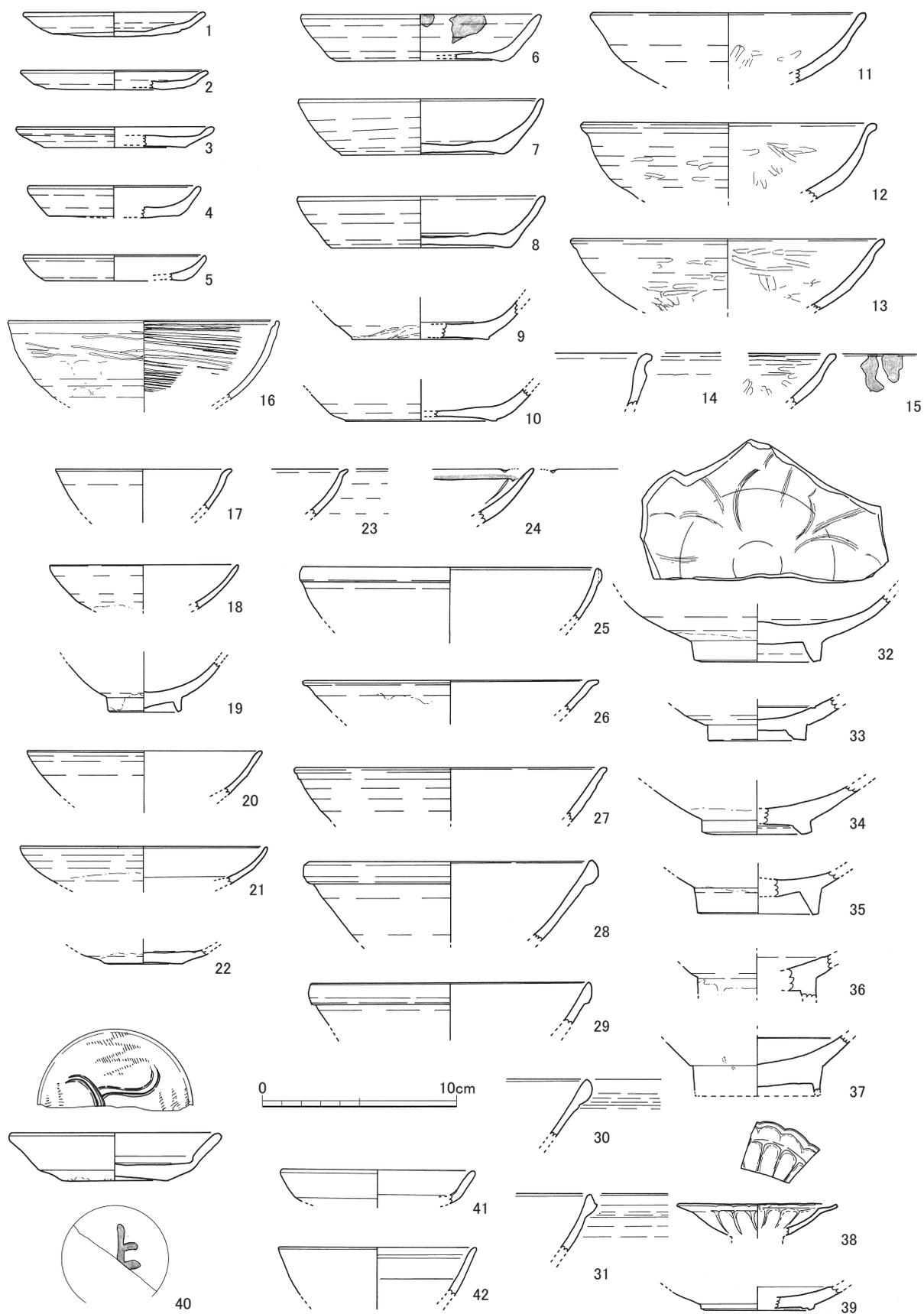


Fig.126 VII区048号遺構出土遺物実測図1(1/3)

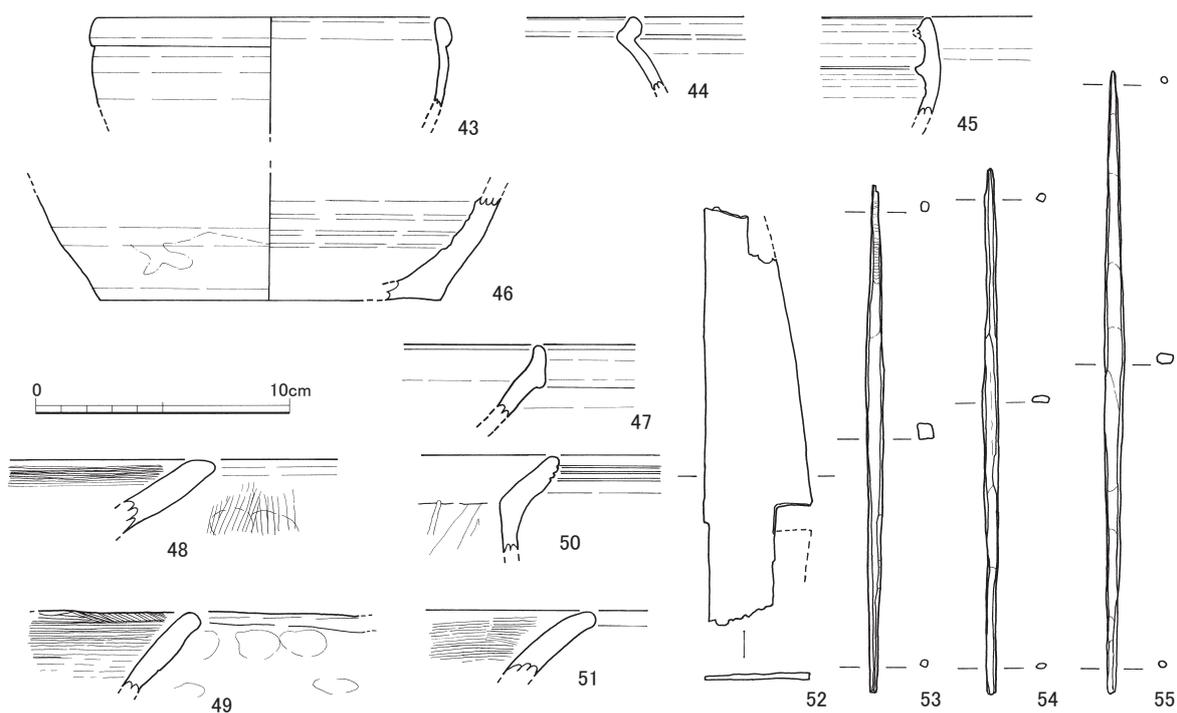


Fig.127 VII区048号遺構出土遺物実測図2(1/3)



冊板



冊板



冊板表面のケズリ



冊板小口のケズリ

Ph.182 VII区048号遺構井側桶板材

⑤ 050号遺構

第1面でⅦ区のほぼ中央から検出した土壇墓である。

長辺120cm、短辺70cmの掘方に、老年男性の人骨が北頭位、右側臥屈葬で葬られていた。土坑の深さは10～15cmほどしか遺存しておらず、表土除去後、ギリギリの深さで頭蓋骨と青磁碗を検出することができた。

木質の遺存は見られず、棺釘に当たる鉄釘も全く出土しなかったことから、木棺を伴わず、土坑

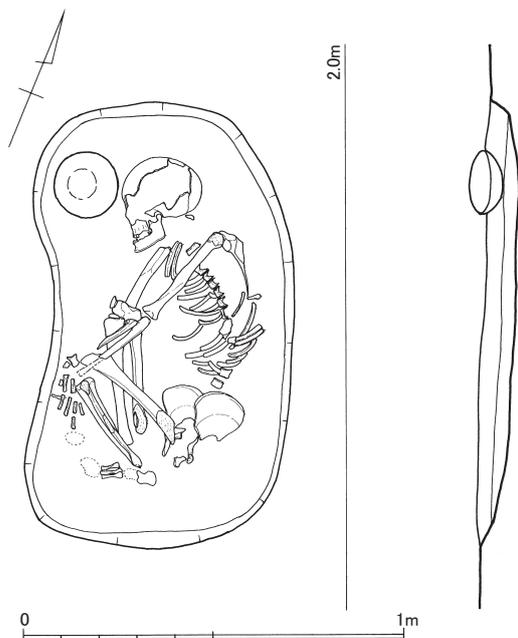


Fig.128 Ⅶ区050号遺構実測図(1/20)

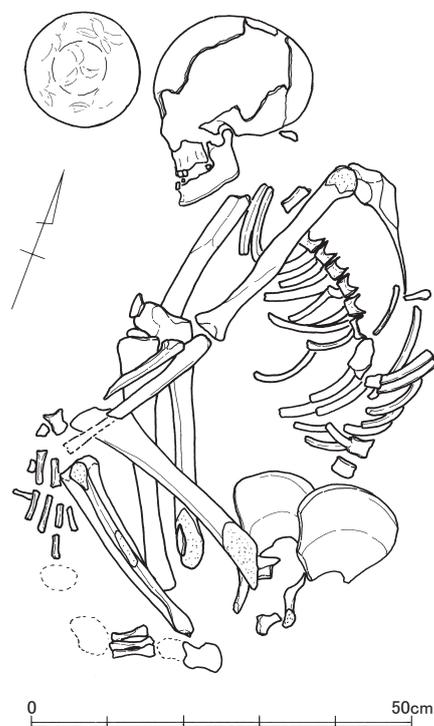


Fig.129 Ⅶ区050号遺構人骨出土状況実測図(1/10)



Ph.183 Ⅶ区050号遺構墓壇(南東より)



Ph.184 Ⅶ区050号遺構(南東より)

に直葬されたものである。頭蓋骨の西、ほぼ額に接して青磁碗が副葬されていた。この他に副葬品はない。

人骨は、腰を深く折り、背を丸めて、足を大きく曲げ、左右の手はいっぱいに伸ばして、両膝を抱えるように手先を組んでいた。人骨の位置関係に乱れはなく、全身の骨格が遺存していた。頭部の右やや上方には、龍泉窯系青磁碗1点が副葬されていた。

出土遺物は、土師器・「て」の字状口縁土師器皿・黒色土器・陶器・土錘などであるが、副葬品は図示した青磁碗1点のみである。

Fig. 130に青磁碗を示す。青磁碗は、龍泉窯系青磁碗で、内面に画花文を描く。完形品ではあるが、口縁部の相対する2ヶ所を、小さく打ち欠いている。

12世紀後半の埋葬遺構である。(人骨に関しては符論参照、266～267頁)



Ph.185 VII区050号遺構青磁碗出土状況



Ph.186 VII区050号遺構頭蓋骨遺存状況



Ph.187 VII区050号遺構上半身遺存状況



Ph.188 VII区050号遺構下半身遺存状況



Ph.189 VII区050号遺構下肢遺存状況



Ph.190 VII区050号遺構骨盤遺存状況

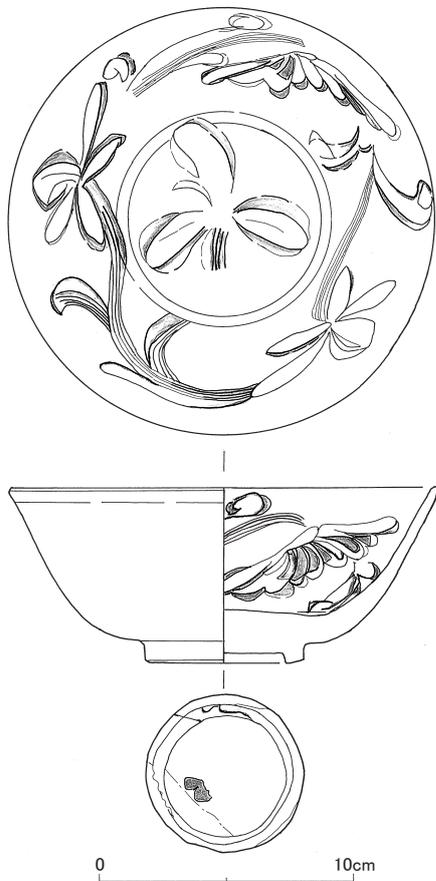


Fig.130 VII区050号遺構出土遺物実測図(1/3)



Ph.191 VII区050号遺構出土青磁碗

⑥ 055号遺構

第1面の北辺寄りから検出した土坑である。長径2.7m、短径2.4mの楕円形を呈し、検出面からの深さ1.0mをはかる。湧水が激しく、床面の正確な検出はできなかった。土坑壁面は、その中ほどあたりから、数か所に縦に稜をつけて掘削されている。稜間の距離はまちまちで、規則性はない。よって、多角形状の平面で掘削することを意図したものではないことは明らかである。

出土遺物の一部をFig.131に示す。1・2は、瀬戸窯の陶器である。1は卸皿で、破片の底部側には、卸目の一部が残っている。黄灰色の灰釉が薄くかかる。2は瓶子の頸際の破片である。濃緑灰色の釉がかかっている。3は、白磁の皿である。わずかに剝り込んだ平底で、体部外面には鎬蓮弁文を削り出す。外底部には墨書が残る。花押であろう。このほか、土師器（底部糸切り）、口禿の白磁皿、青磁などが出土した。14世紀前半頃の土坑である。



Ph.192 VII区055号遺構(北西より)

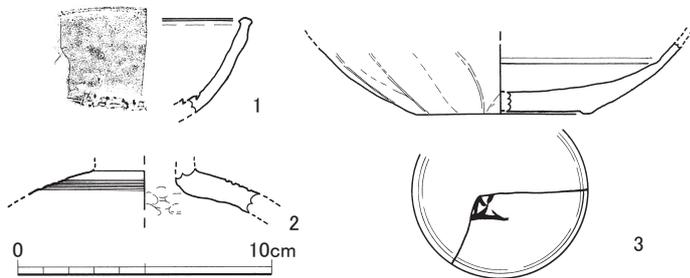
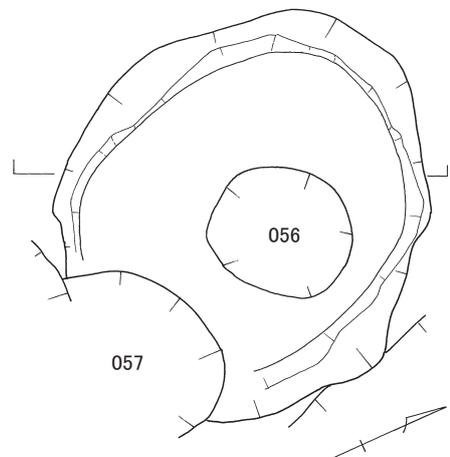


Fig.131 VII区055号遺構出土遺物実測図(1/3)

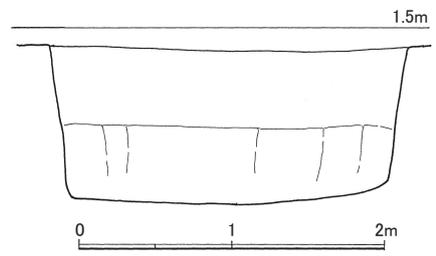
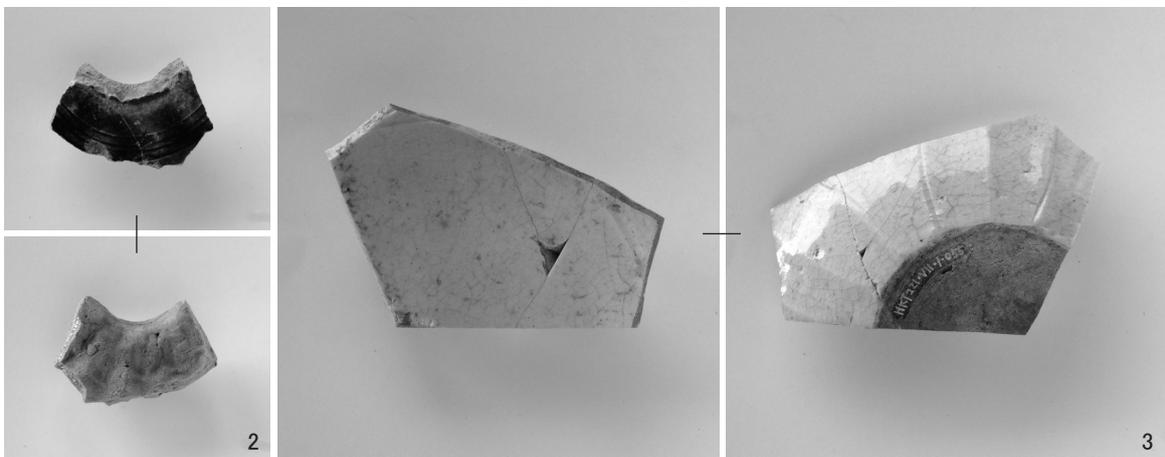


Fig.132 VII区055号遺構実測図(1/50)



Ph.193 VII区055号遺構出土遺物

## ⑦ 060号遺構

第1面において、Ⅶ区を南から北に縦断して出土した溝状遺構である。

幅約1.7mで、ちょうど中ほどから東側は、二段掘り状に深くなる。断面観察によれば切り合いではなく、単独の溝である。深さは、一段浅い西側で30cm、東側で45cmを測る。

主軸方位は、真北から20度西に傾く。

出土遺物の一部を、Fig.133・134に示す。1～3は、古代の施釉陶器である。1・2は皿で、1は緑釉陶器、2は灰釉陶器である。2の底部は、平高台となる。3は、緑釉陶器の水注底部である。外面は全面施釉で、内面は露胎となる。内面は横ナデ調整、外面は丁寧なヘラ磨きである。須恵質の硬胎に、黄味を帯びた薄緑色の釉がかかる。尾張猿投窯の製品であろう。3～14は、土師器である。3～9は皿、10～14は坏である。底部は回転糸切りする。15～18は、土師質土器の鉢である。内面は横方向の刷毛目調整、外面には指頭圧痕が並ぶ。19～23は、瓦質土器である。19・20は、内面に摺り目を刻むすり鉢である。19の口縁は「く」字型に内側に屈折する。20の口縁は片口に作る。21もすり鉢の可能性はあるが、遺存部位には摺り目は認められない。23は、湯釜の口縁部～頸部であろう。24は、備前焼のすり鉢口縁部である。25～29は、青花である。27は、近世に下る可能性があり、混入品と見るべきだろう。27を除いて、中国、明代の青花碗である。30～35は、白磁である。31は皿の底部で、他は碗である。31は、全面施釉した後に幅の狭い高台畳付きを削って露胎にするもので、16世紀の特徴を示す。35の碗底部は、畳付きの中ほどから内側を露胎とするものである。施釉方法としては、類例の少ないタイプである。36・37は青磁である。36は龍泉窯系青磁の香炉、37は景德鎮の青磁皿で、高台内側は白磁となる。38～40は、朝鮮王朝の陶器である。38は、皿の底部で、見込みと高台畳付きに重ね焼きの目跡が残る。40は、舟徳利の底部であろう。

41・42は、墨書陶磁器である。41は、白磁碗で、「王」と記されている。「王」の上に墨痕が残るが、文字かどうか判断はつかなかった。42は白磁の高台皿の底部で、花押が墨書されている。43は、肥前系陶器大甕の口縁部片である。混入品であろう。45～49は、瓦である。44～47は丸瓦、48・49は平瓦である。丸瓦においては内面の布目が残るが、平瓦ではナデ調整で、布目は見られない。この他、青磁稜花皿、漳州窯系青花、朝鮮王朝白磁などが出土している。

おおむね16世紀後半代の溝として大過ないと考える。



Ph.194 Ⅶ区060号遺構

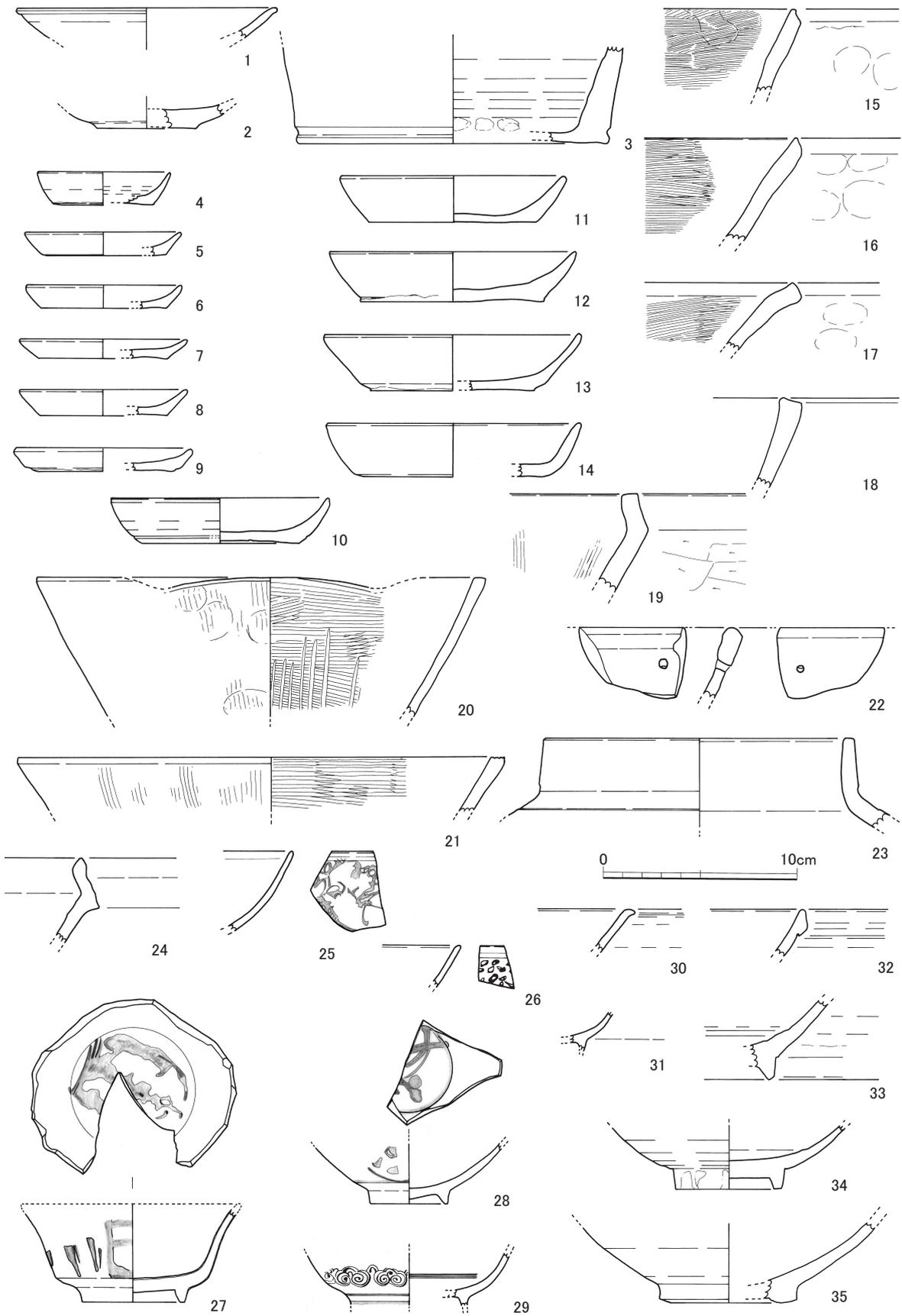


Fig.133 VII区060号遺構出土遺物実測図1(1/3)

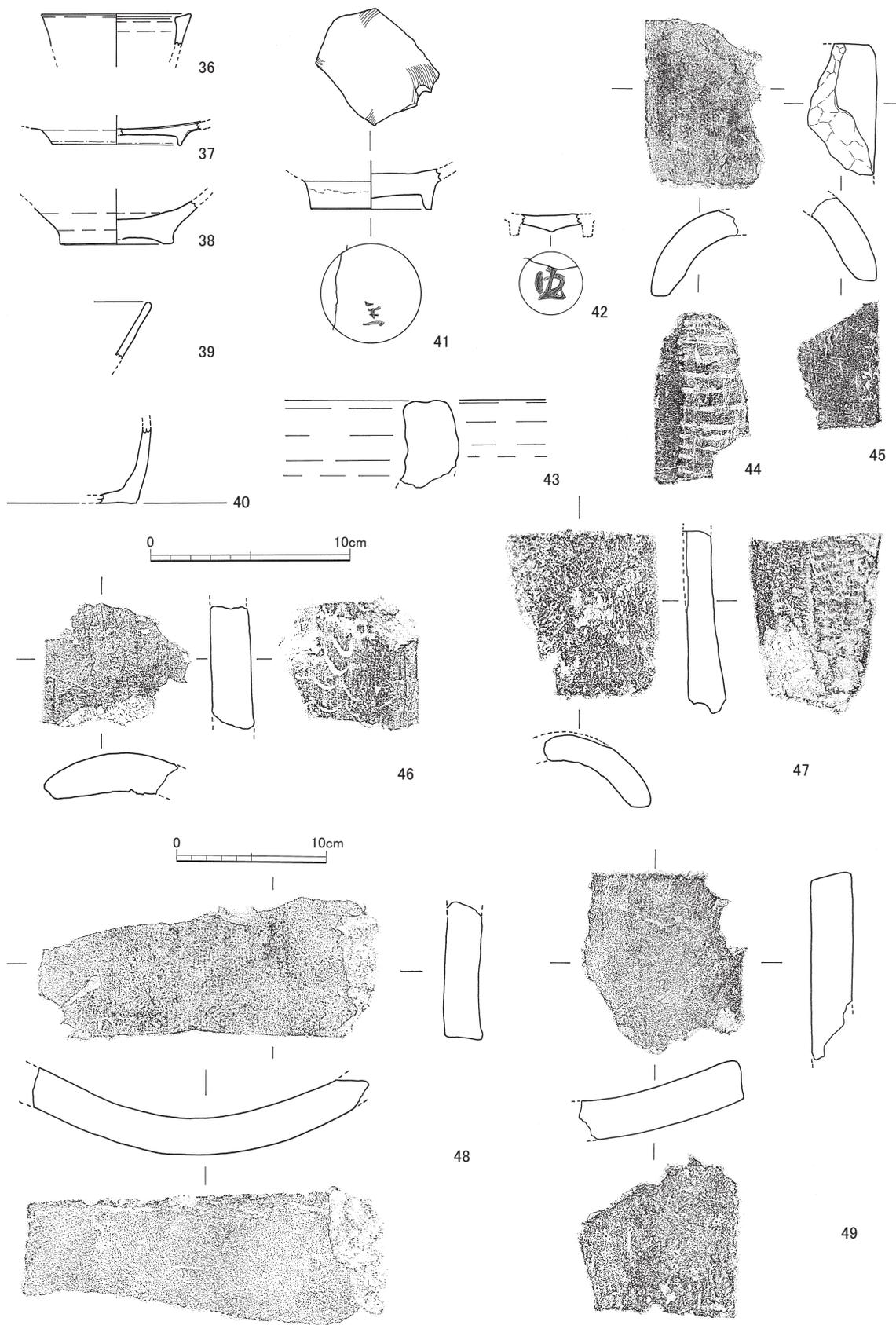
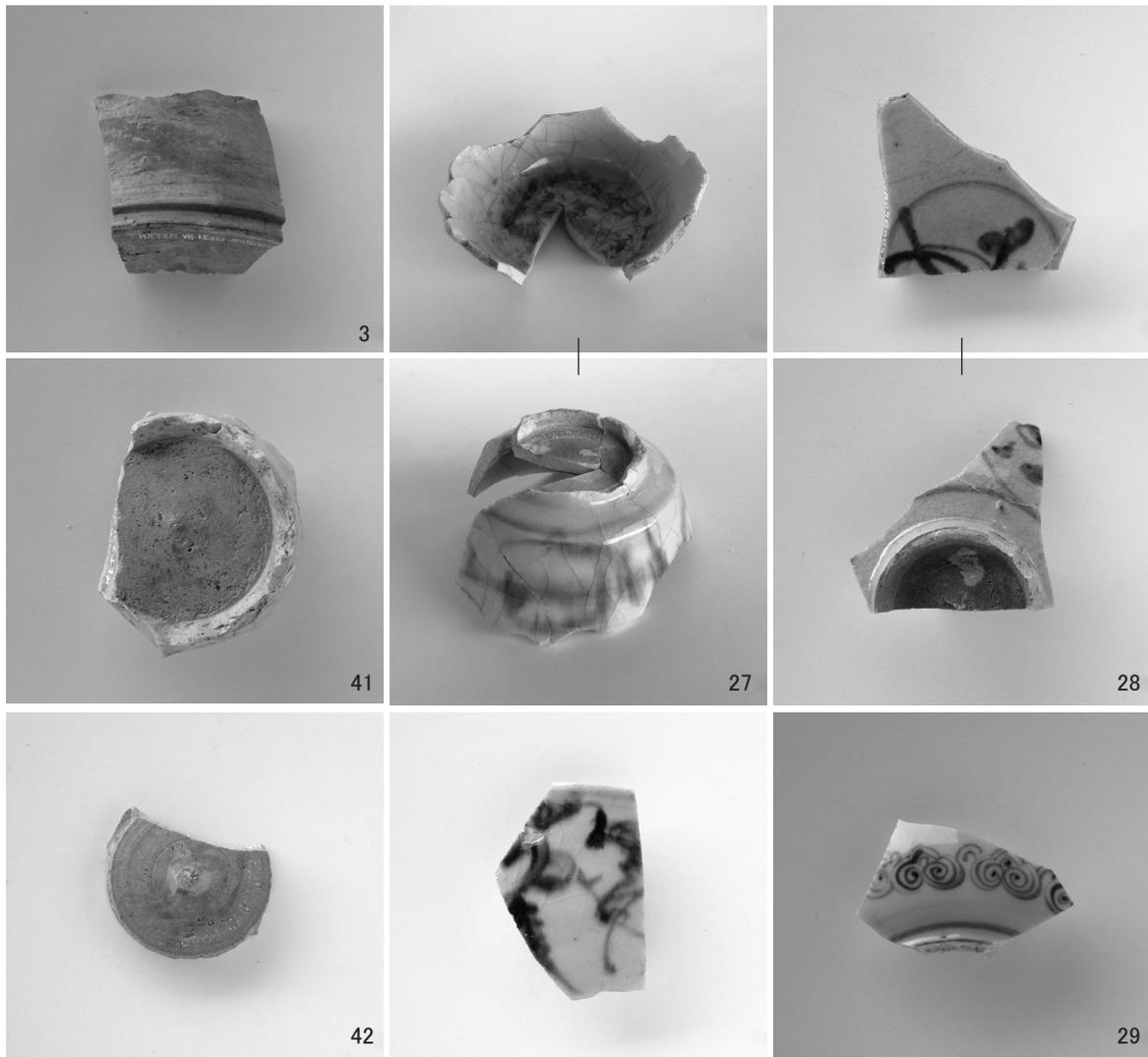


Fig.134 VII区060号遺構出土遺物実測図2(1/3、1/4)



Ph.195 VII区060号遺構出土遺物

⑧ 101号遺構

第2面中ほどで検出した土坑である。長軸100cm、短軸70cmほどの長楕円形の土坑内に、石と土器類の散布が見られた。

出土遺物をFig.136に示す。1は、土師器の皿である。口縁部の小片で、口縁端部を小さく屈曲させている。体部のつくりは手捏ねで、回転台を使用していない。京都系土師器の「て」の字状口縁皿である。2は、黒色土器A類碗の口縁部である。内面は密に横へら磨きを行う。へら磨きの条線は明瞭である。また、口縁部直下に沈線が巡る。楠葉型黒色土器と考えられる。3・4は、黒色土器B類の碗である。体部中ほどに屈曲を持ち、口縁部は外反する。高台は高く、外方に踏ん張る。体部外面は横ナゲ調整、内面は、不定方向の幅広のへら磨きが密に施される。在地系の黒色土器である。6は平瓦である。斜め格子の叩き目が見られる。

10世紀代の廃棄土坑である。

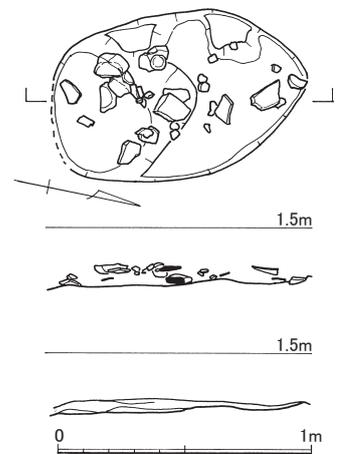
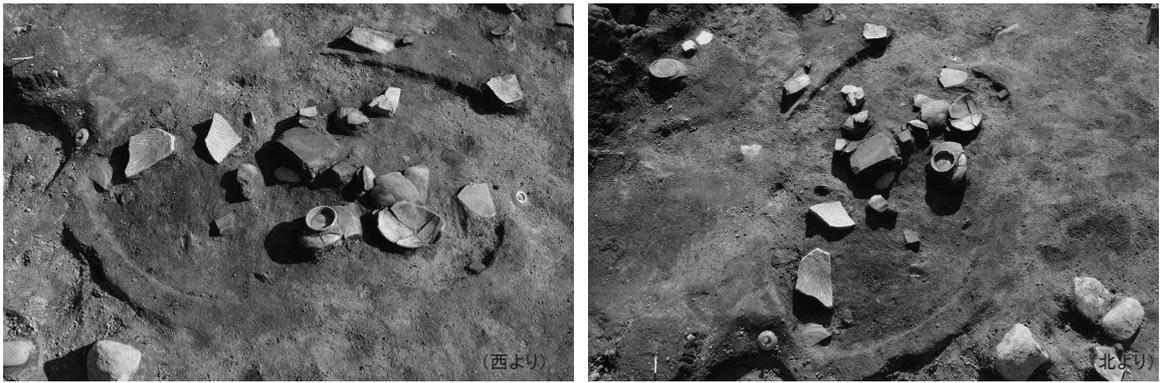


Fig.135 VII区101号遺構実測図 (1/30)



Ph.196 VII区101号遺構

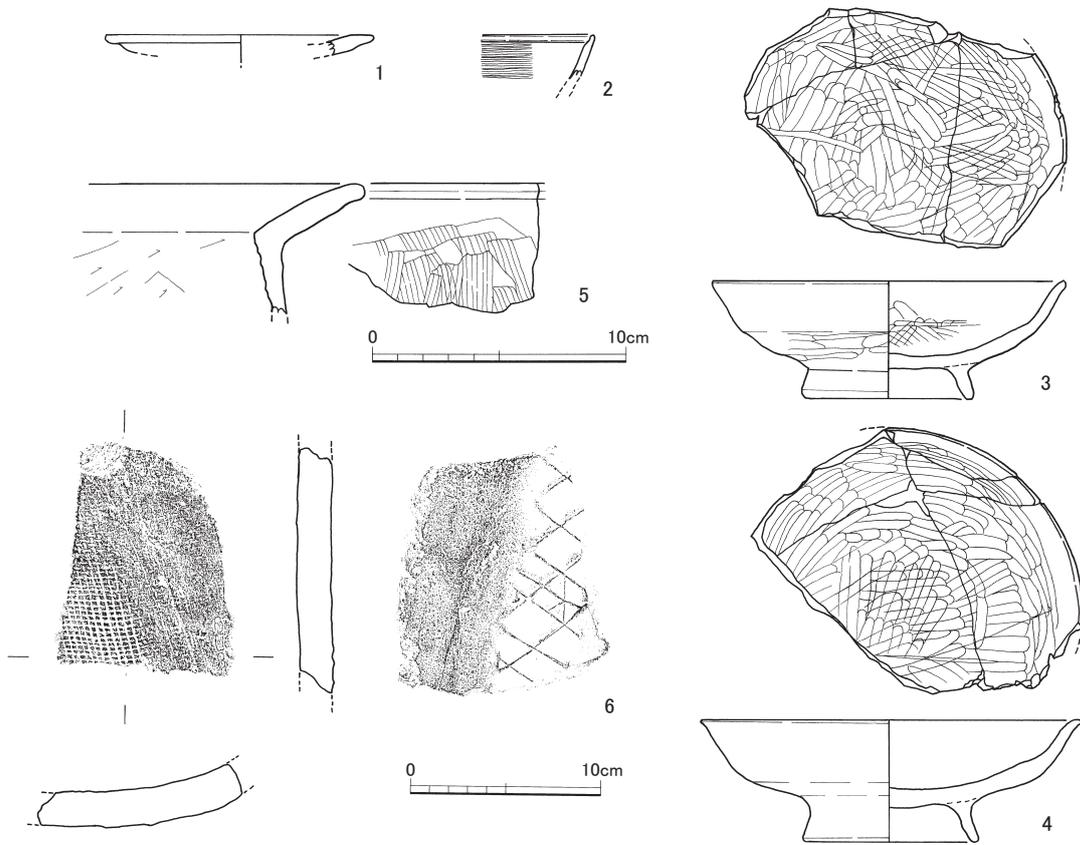
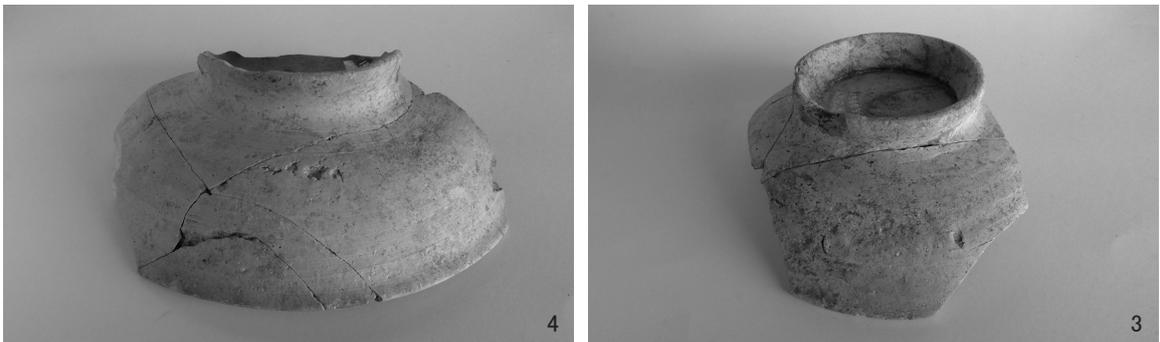


Fig.136 VII区101号遺構出土遺物実測図(1/3、6…1/4)



Ph.197 VII区101号遺構出土遺物

⑨ 110号遺構

第3面中ほどで検出した土坑である。長軸115cm、短軸105cmの卵型の平面を呈し、検出面からの深さは90cm前後を測る。土壌の壁は、底面からほぼ中間にいたるあたりまで、縦方向に稜が走って角が付いており、不整多角形を呈している。ただし、意図的に稜を付けたという訳ではなく、掘り下げた結果として稜がついたというのが正しかろう。

湧水が激しく、正確な底面の実測はできなかった。

出土遺物をFig.138・139にしめす。Fig.139-1～19は、土師器である。1～4は皿である。底部はヘラ切りする。5・6は坏である。底部はヘラ切りで、6は丸底に作る。7・8は古手の土師器で、7は古代の高台坏の体部であろう。内外面を密に横ヘラ磨きする。8も古代の皿である。9～13は碗である。11は、黒色土器A類で、内面を黒色処理する。12は、脚が高く、坏部の器壁が厚いことから、椀というよりも脚付きの器台を想定した方がよいかかもしれない。13は、腰が張った深碗型を呈する。高台がつかない可能性もある。外面の口縁部直

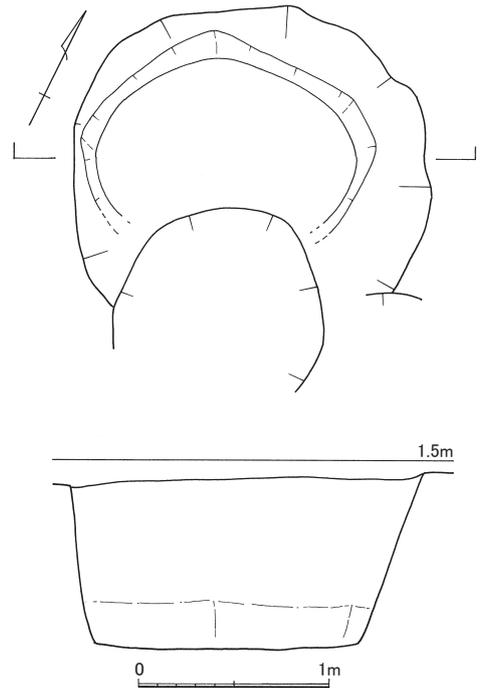
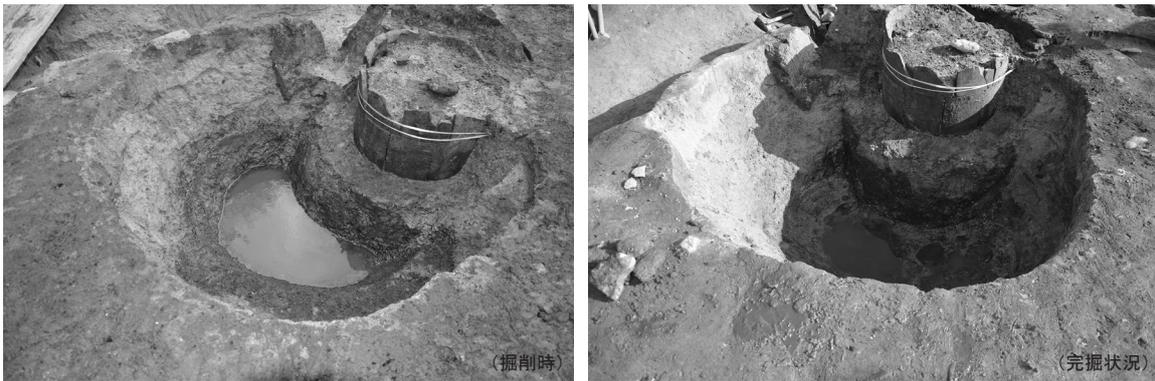


Fig.137 VII区110号遺構実測図(1/84)



Ph.198 VII区110号遺構(北西より)

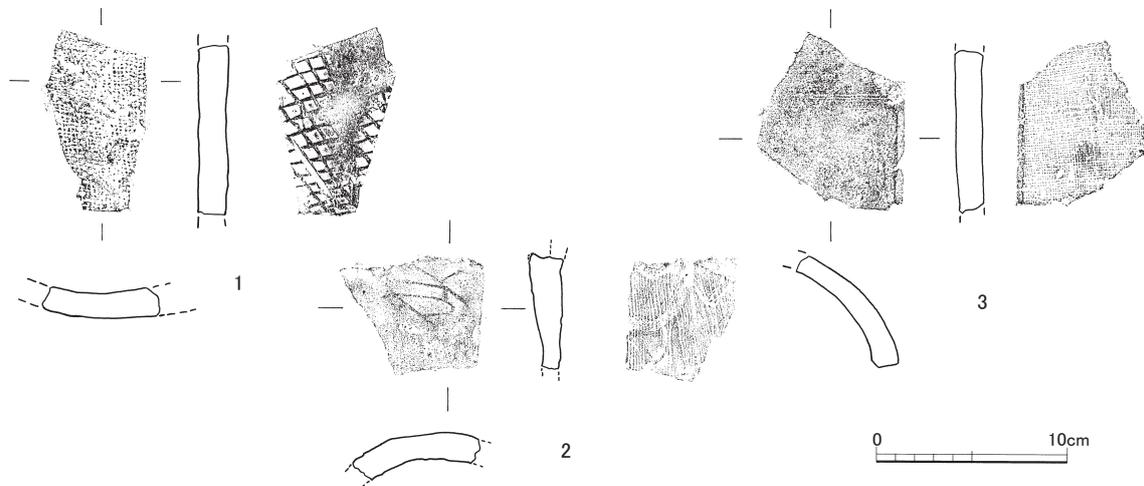


Fig.138 VII区110号遺構出土遺物実測図1(1/4)

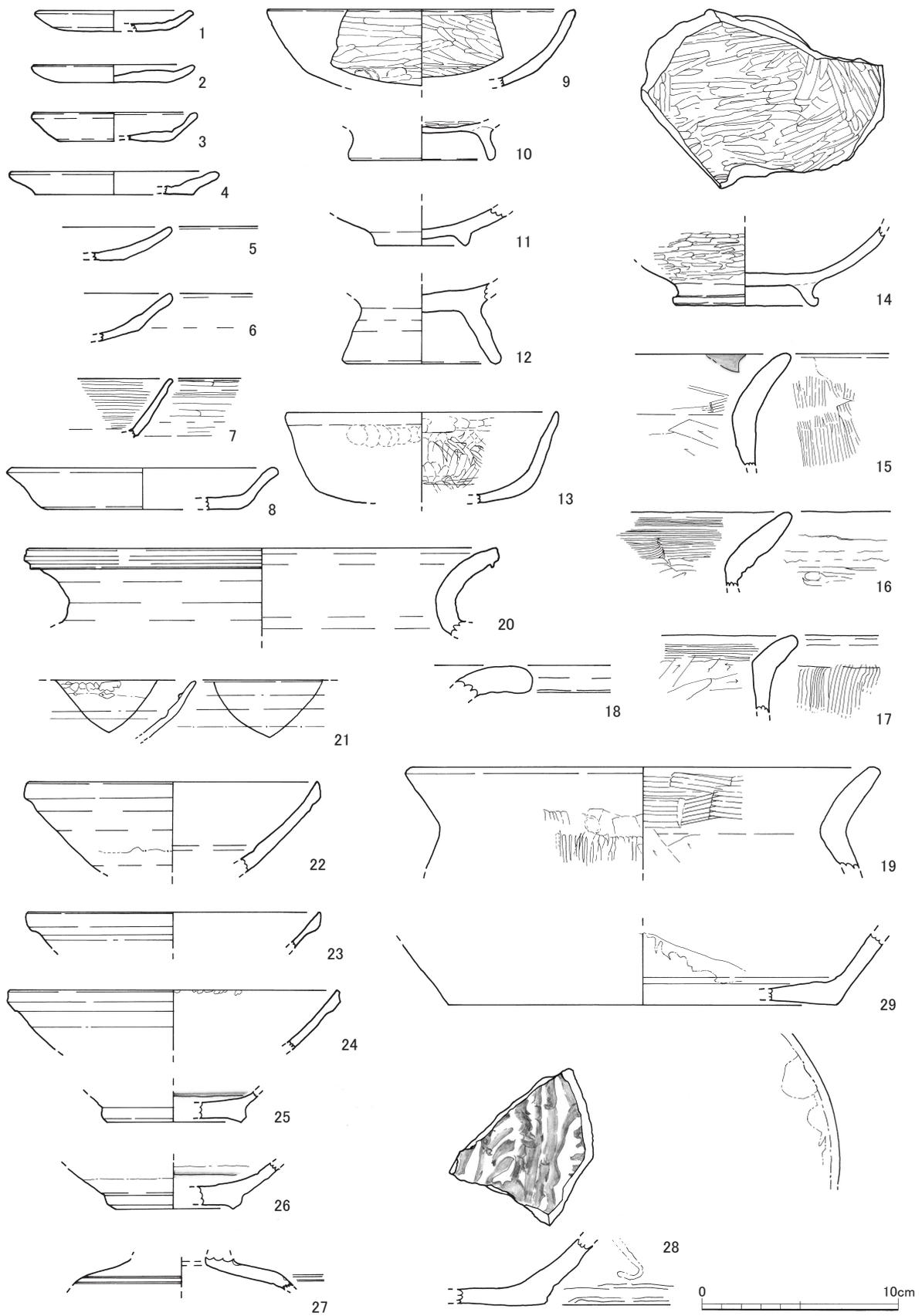


Fig.139 VII区110号遺構出土遺物実測図2(1/3)

下には、横方向に指頭圧痕が並んでいて、口縁部下にくぼみを作っている。体部内面はコテ当てで滑らかな曲面を作り、その上にヘラ磨きを加えている。全体に古様で、7・8同様に古代の土器片が混入したものであろう。14は、黒色土器B類碗である。内外面には、不定方向のヘラ磨きを密に施す。高台は推定される口径に比して小さいが、外方に踏ん張るように「ハ」字形に開き、端部はやや上方に返る。15～19は、甕である。口縁部内面は横ハケ、体部外面は縦ハケ、体部内面は削り調整を行う。20は、須恵器甕の口縁である。内外面とも、横ナデ調整する。21～27は、白磁である。21は皿、22～26は碗、27は壺である。22～26は、玉縁口縁の碗であろう。22の見込みは、茶溜り状に大きくくぼむ。23・24は、口径に比べて器壁が薄く、いわゆるIV類碗には属さないものと思われる。28・29は陶器である。28は磁竈窯の黄釉鉄絵盤である。破片のため、意匠は不明。29は、褐釉陶器の甕底部であろう。体部の軸は底部まで回る。Fig. 138-1～3は、瓦である。1は、平瓦、2・3は、丸瓦の破片である。1は、目が細かい単線の斜格子叩きが見られる。2は、目が粗い単線の不整形の斜格子である。3は、叩き目をなで消している。小口は、ヘラ削りで丁寧な面取りされる。いずれも、古代瓦に属する。

出土遺物から見て、11世紀後半の土坑であろう。

#### ⑩ 116号遺構

第2面中ほどの南西隅よりで検出した土坑である。径125～130cmの不整円形で、南東側は二段掘りを呈する。一段目と二段目では、平面的には切り合いを疑わせるが、埋土として切り合いを示す状況はなく、単独の土坑と結論付けた。床面の深さは、70cm程度を測る。

Fig.142-1～8は、土師器である。1～3は皿で、底部はヘラ切りする。5は坏である。平底から丸みをもって内湾する体部を作る。体部はヘラ磨きする。5～7は碗である。高台は高く、「ハ」字型に開く。5は丸みを持って内湾する深碗型の体部から、口縁部は鋭く外反する。8は回転台成形で、小型の蓋としたが、「て」の字状口縁の畿内系土師器皿を模倣した皿の可能性もある。

9～12は、須恵器である。9～11は、坏蓋である。端部は小さく折り返す。11の端部はやや曖昧に、下に向かって肥厚気味に作る。12は、高台坏である。これらの須恵器は、土師器に比して古めの様相を示している。13は、土師器の甕の口縁部である。14は白磁で、大皿の口縁部であろうか。小片だが、口唇部をくぼませており、輪花に作っていたことが推測できる。器壁は、肉厚な感がある。

10～11世紀前半にかけての廃棄土坑と考える。



Ph.199 VII区116号遺構(南西より)

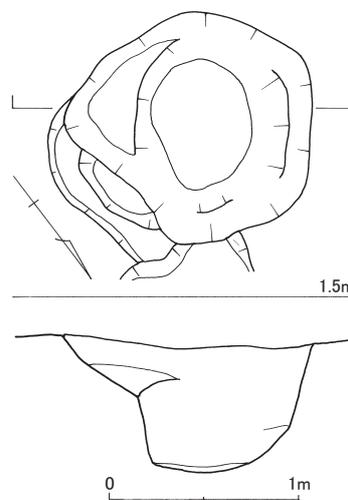


Fig.140 VII区116号遺構出土遺物実測図(1/40)

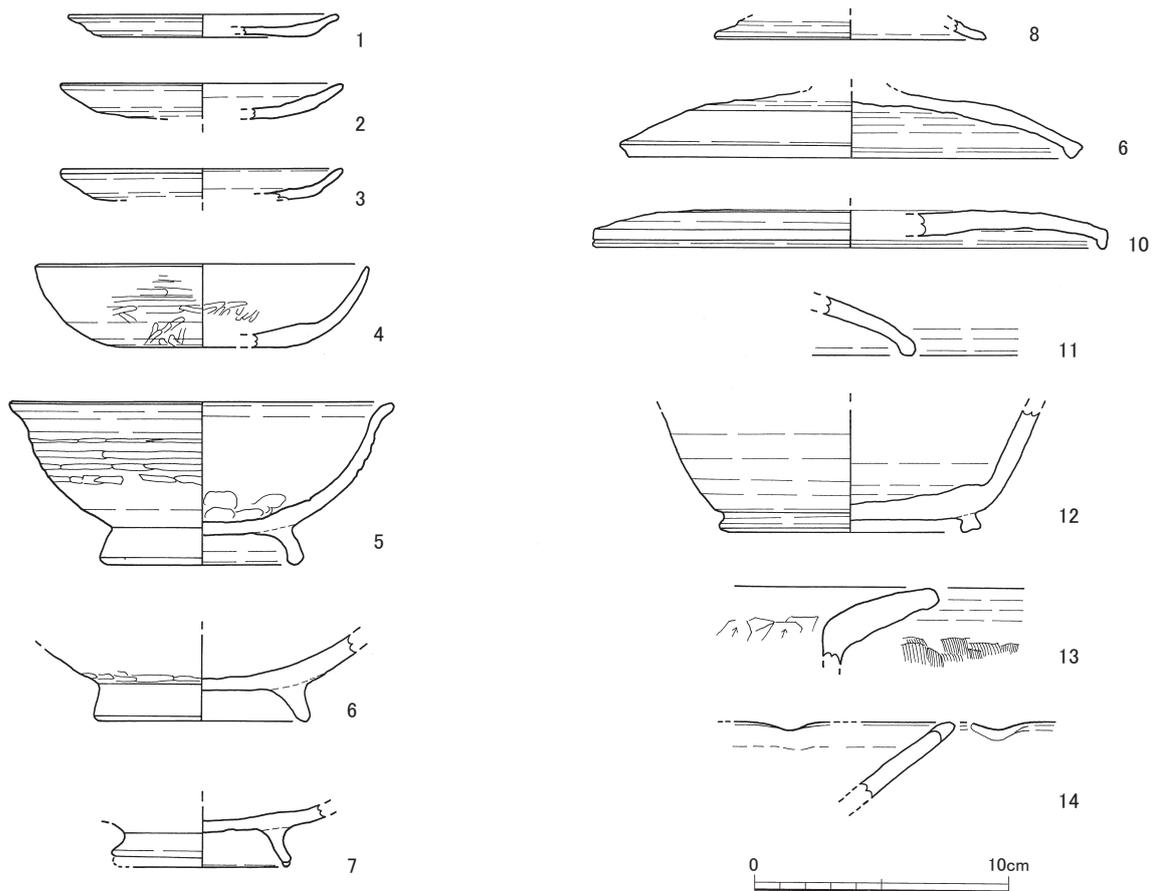


Fig.141 VII区116号遺構出土遺物実測図(1/3)



Ph.200 VII区116号遺構出土遺物

⑪ 124号遺構

第2面で検出した溝状遺構である。第1面060号遺構（溝）の東に、これと並行して検出した。

幅1.2m、深さ25cm前後を測る。

土師器、瓦器、青磁、白磁、陶器、瓦などが出土している。青磁碗や瓦質土器鉢の形状から、15世紀後半代の溝と考えられる。

年代観的には、第1面で検出すべき遺構であったといえよう。



Ph.201 VII区124号遺構(南東より)

⑫ 125号遺構

第2面の東辺付近より検出した土坑である。径90~100cmの略円形を呈し、検出面からの深さは90cmを測る。

断面はやや胴が張った樽型を呈する。側壁の下半においては、掘方に稜が見られ、多角形状となる。

出土遺物をFig. 143に示す。1~7は、土師器である。1~3は皿で、1・2の底部はヘラ切り、3は回転糸切りする。4~6は坏、7は碗であろう。底部はヘラ切りする。7の内面は横ナデ調整であるが、他はコテ当てして平滑に整える。8~15は、白磁である。9は平底皿で、他は碗である。11は、口縁部を小さな玉縁を作る。体部は丸みを持って内湾する。いわゆるⅡ類碗である。12~15は、玉縁碗の口縁部と底部片である。13は見込近くで大きくくぼんでおり、茶溜り風の見込を作っていたことがわかる。14・15の見込には、圈線も段差も作られていな

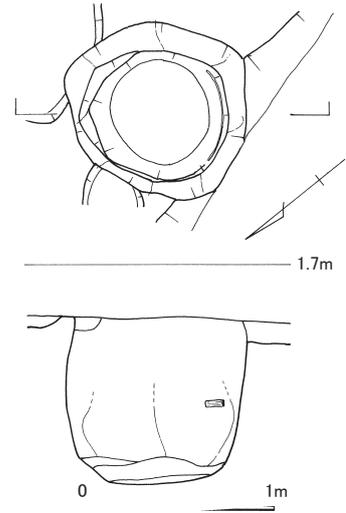
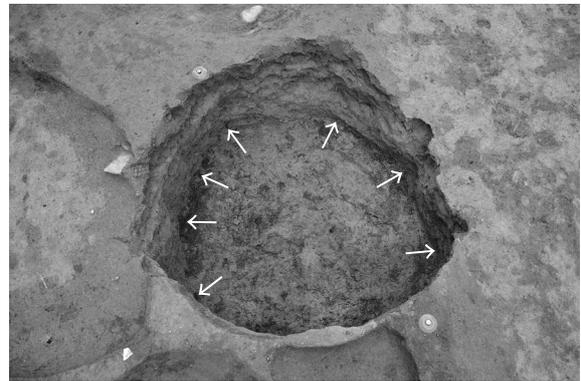


Fig.142 VII区125号遺構実測図(1/40)



Ph.202 VII区125号遺構(南西より)



Ph.203 VII区125号遺構掘方壁面(北東より)

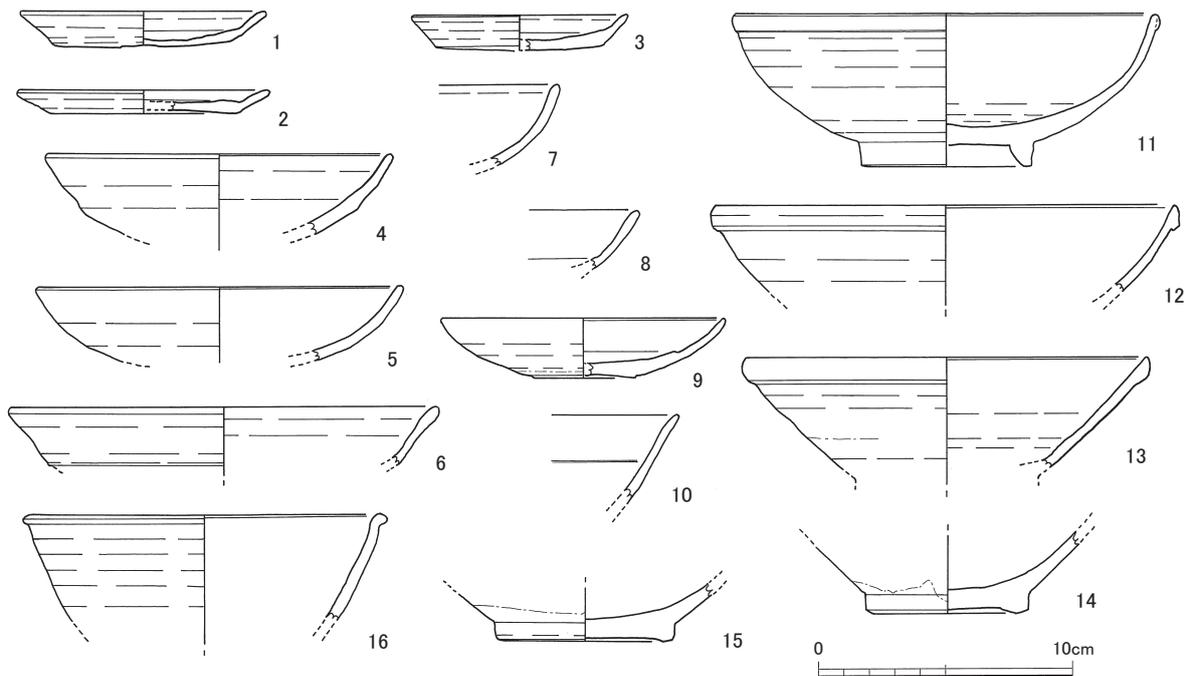


Fig.143 VII区125号遺構出土遺物実測図(1/3)

い。16は、高麗青磁の碗である。灰緑色の釉がかかるが、二次的に被熱して、表面は変色し発泡している。このほか、高麗系無釉陶器や獣骨が出土している。湧水が見られたが、木製品の出土はほとんどなかった。

12世紀前半の廃棄土坑である。

⑬ 162号・163号・171号遺構

第2面のほぼ中央で検出した土坑群である。上述した110号遺構の北西縁辺で複雑に切り合って検出した。162号遺構は、163号遺構を切り、171号遺構は、162号遺構と163号遺構の床面で検出した。

すなわち、古い順に171号遺構、163号遺構、162号遺構と新しくなる。それぞれの規模は、遺存状態が悪いため不明である。

162号から出土した遺物をFig.144に、163号遺構・171号遺構出土遺物をFig.145に示す。Fig.144-1・4・5は、黒色土器B類である。1は器形的には土師器皿に通じるが、内外面をヘラ磨きし黒色処理されている。4は、小碗である。1の皿の底部を押し出して丸底とし、高台を貼り付けたという体である。内外とも密にヘラ磨きする。5は底部であり、高台周辺は横ナデ調整、内底部はへ

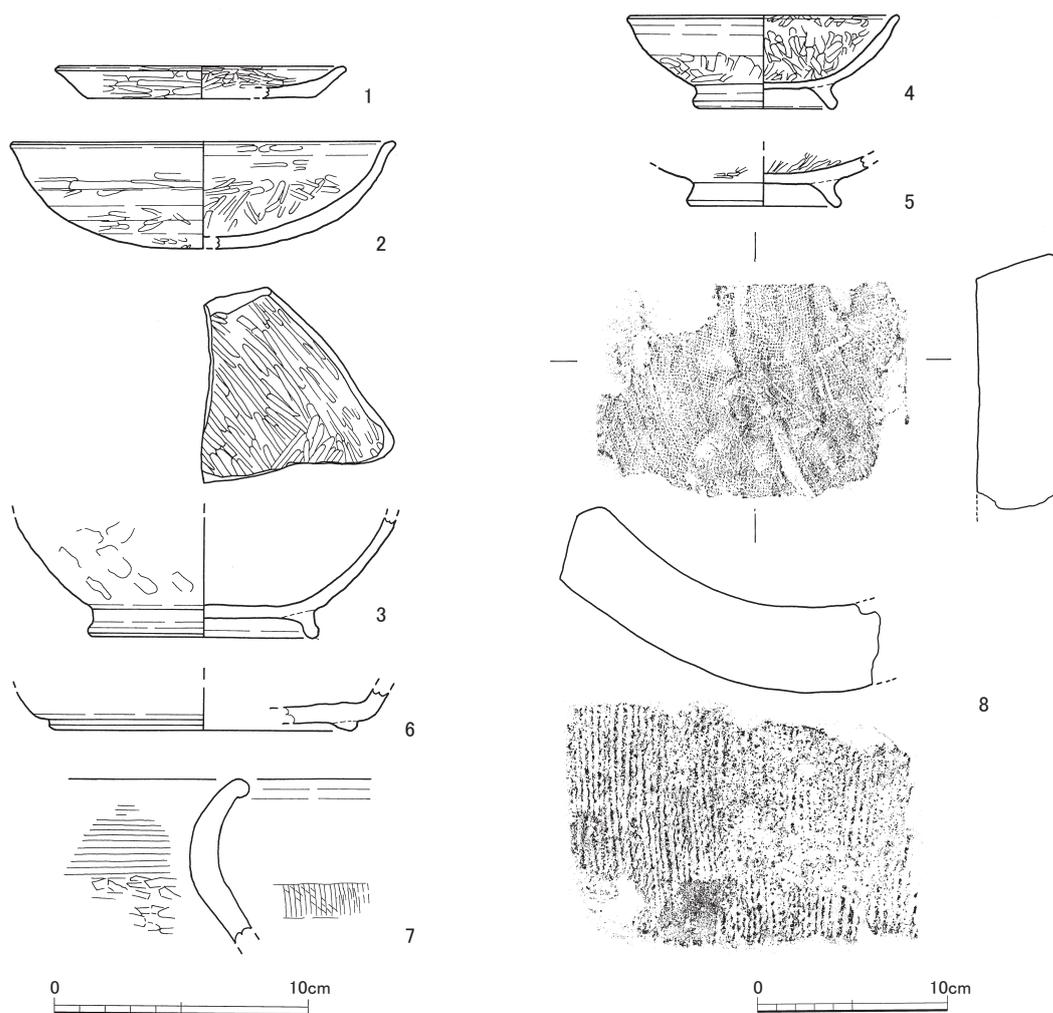


Fig.144 VII区162・163号遺構出土遺物実測図(1/3、8・1/4)

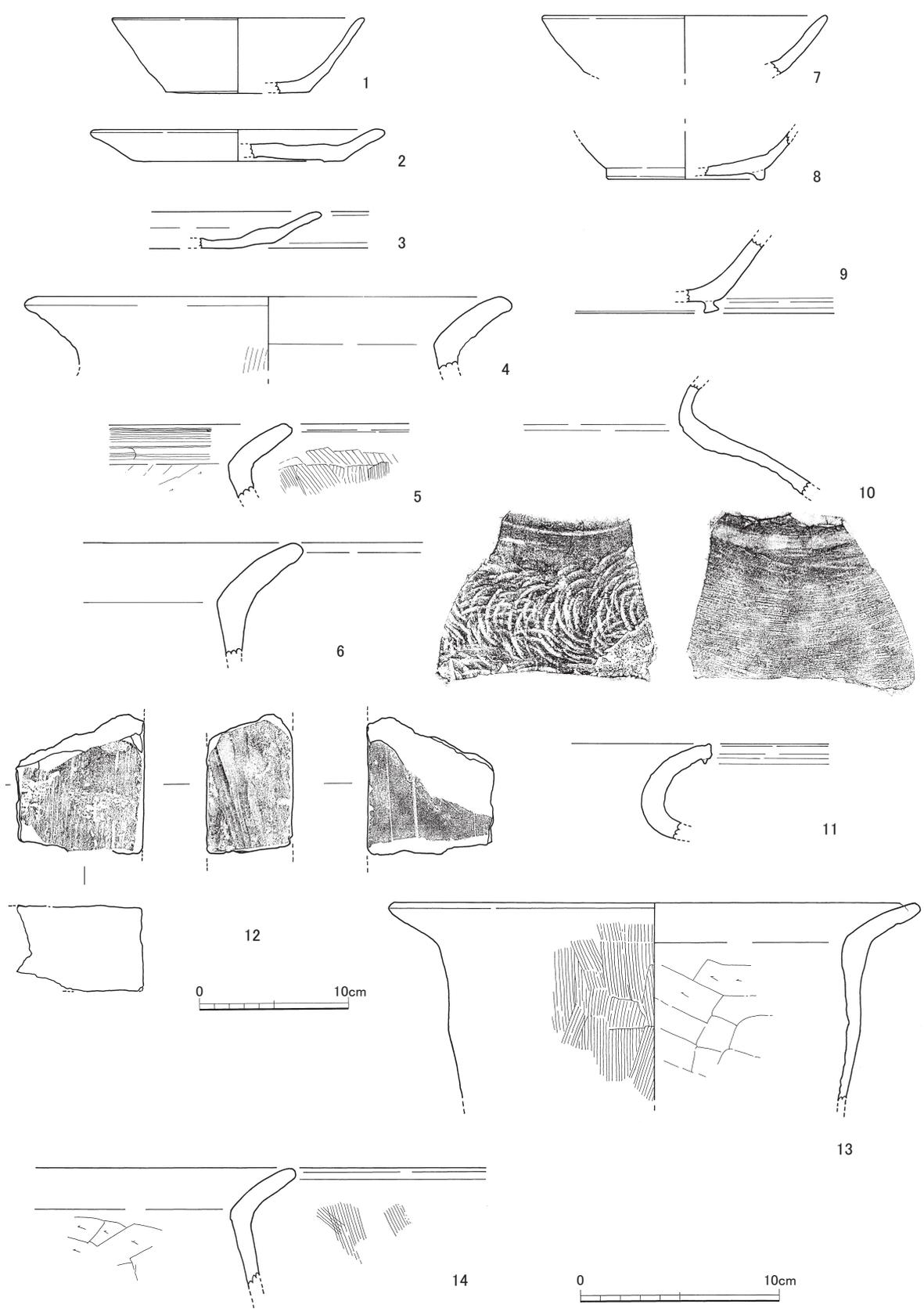


Fig.145 VII区171号遺構出土遺物実測図(1/3、12…1/4)

ラ磨きする。3は、黒色土器A類碗である。体部外面には掌紋と指頭痕が見られる。外面にはヘラ磨きはなされない。内面は密にヘラ磨きする。2は、丸底坏である。内面はコテ当てした上からヘラ磨きする。7は、土師器の壺である。口縁部は内外とも横方向の刷毛目、体部内面はケズリ、外面は縦にハケメ調整する。8は、平瓦である。上面には全面に粘土板の切り離し痕跡と布目、下面には縄目の叩き目が見られる。側面と小口面は大きくヘラケズリされる。胎土は砂礫を多く含んで粗く、土師質に焼成される。厚さ4cmと分厚くて重い。同様な平瓦は、怡土城に類例がある。

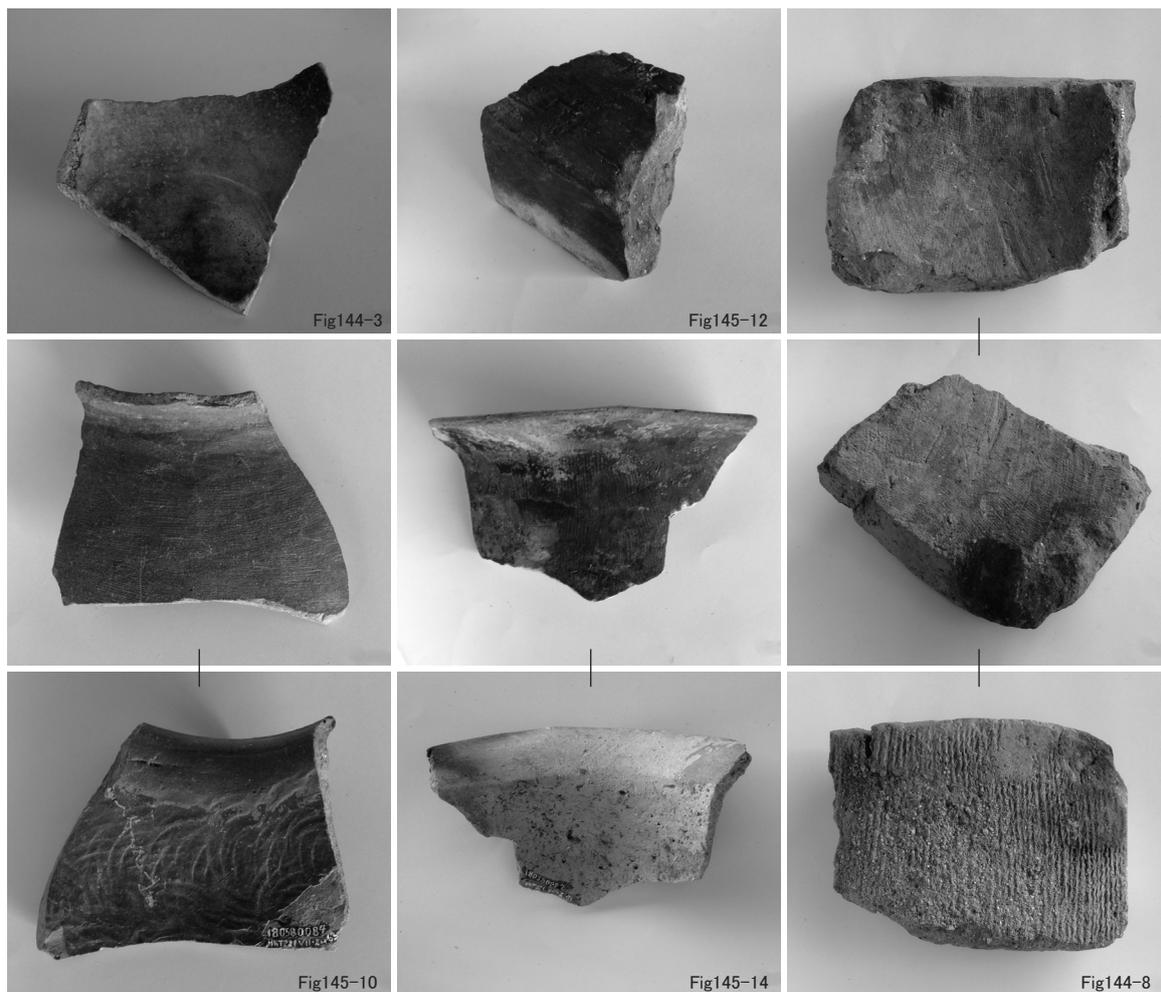
162号遺構は、11世紀後半代の土坑であろう。

Fig.145-1~6は、土師器である。1は平底の坏で、2・3は皿である。胎土は肌理細かく、薄い赤茶色を呈する。4~6は、甕の口縁である。7~11は、須恵器である。7~9は坏である。10・11は壺である。10は、頸部から型部にかけての破片である。外面は細かい櫛目のついた叩き板、内面は同心円文の当て具による叩き締めを行う。12は、瓦磚である。

163号遺構は9世紀に位置付けられる。

Fig.145-13・14は、171号遺構出土遺物である。いずれも土師器の甕である。体部内面は左上がりのケズリがなされている。外面は縦方向の刷毛目調整である。口縁の内外面は、横ナデ調整する。このほか須恵器・土師器・瓦磚・獣骨が出土している。

8世紀代に位置づけるのが妥当であろう。



Ph.204 VII区162・163・171号遺構出土遺物

⑭ その他の出土遺物

以下、主要遺構の報告中で触れることができなかった遺物の中から、看過できないもの、特殊なものを選んで紹介する (Fig.146, Ph.205~206)。

1は、土師器の皿である。手捏ね成形で、口縁部を屈曲させており、京都系土師器のいわゆる「て」の字状口縁皿である。前述した溝遺構である124号遺構から出土した。2~6は、古代の緑釉陶器である。2は削り出しの平高台をもつ。3の外底部には、回転糸切り痕が顕著に残る。内底部はへら磨きする。4の見込には三ツ又トチンの痕跡が認められる。へら磨きはなされない。周防型と考える。5は壺の底部であろう。土師質の軟胎で、周防型であろう。6は、水注の底部と考える。外面はへら磨きして底部まで全体に施釉している。猿投産緑釉陶器であろう。7は、白磁碗である。大型で深さのある玉縁碗で、比較的薄手の体部は、内湾気味に立ち上がる。見込には圏線は見られない。8は、越州窯系青磁碗である。小片だが、非常に肌理が細かく整った胎土にオリーブ色を帯びた透明釉をかけた、I類の精製品である。9は、老司式軒平瓦の瓦当である。221次調査においては、老司式の瓦は、この1点しか出土していない。10は、古代の平瓦である。単線の斜め格子に中に所々意匠が加わる。11~14は、越州窯系青磁である。11は、外底部を露胎とする、いわゆるII類碗であるが、胎土・釉調ともに良好である。12~14は、III類で、内面に花文を描く。221次調査では、このタイプ

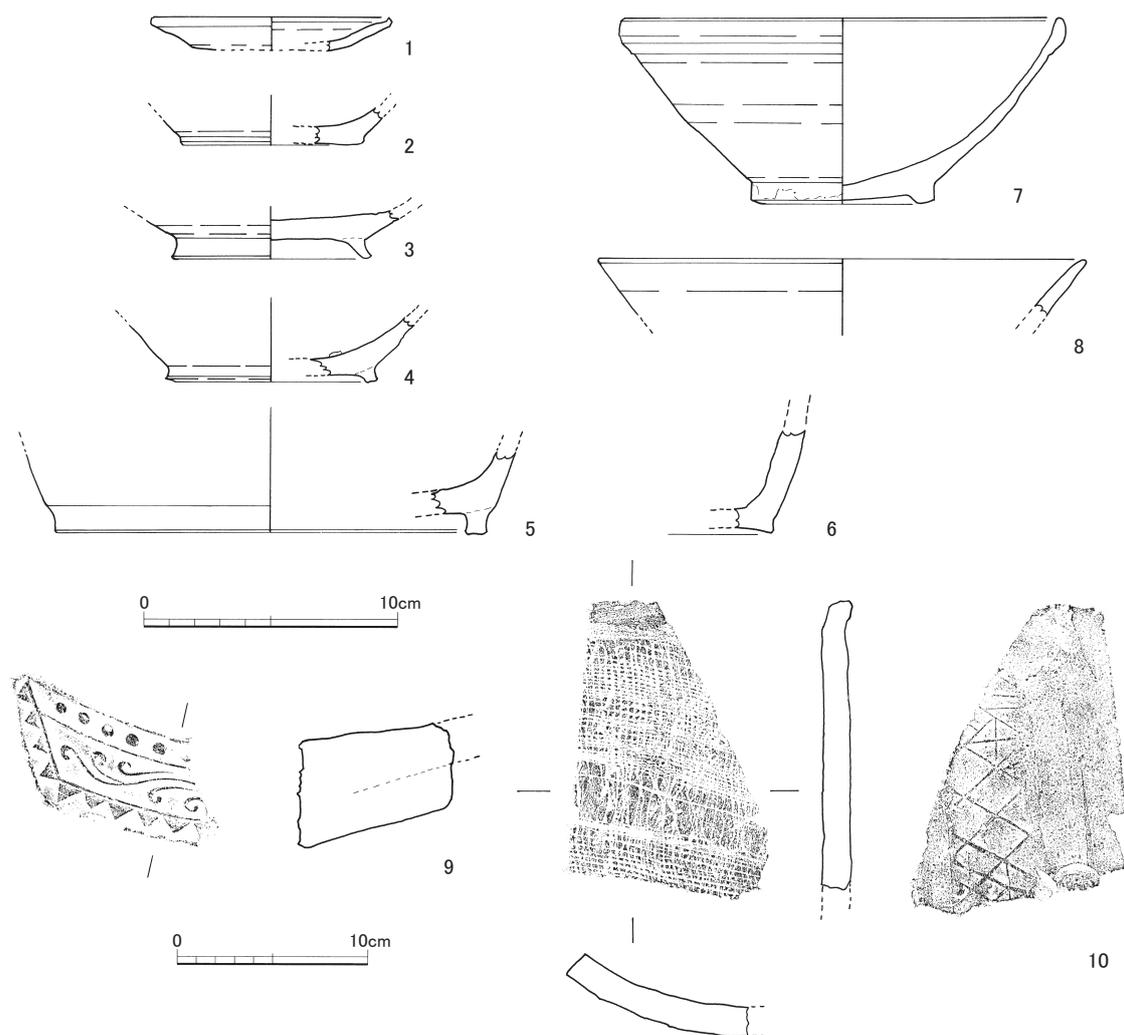
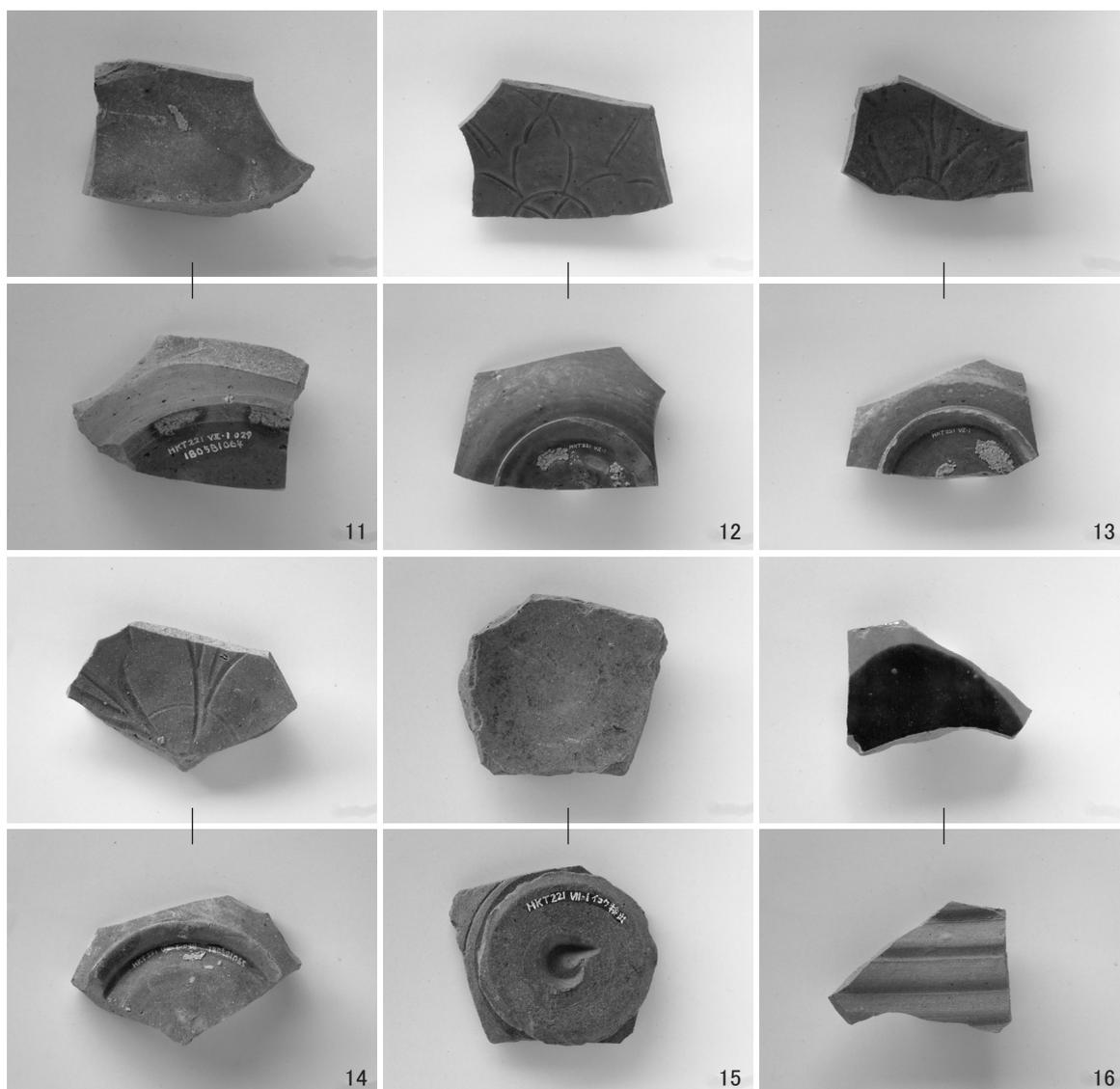


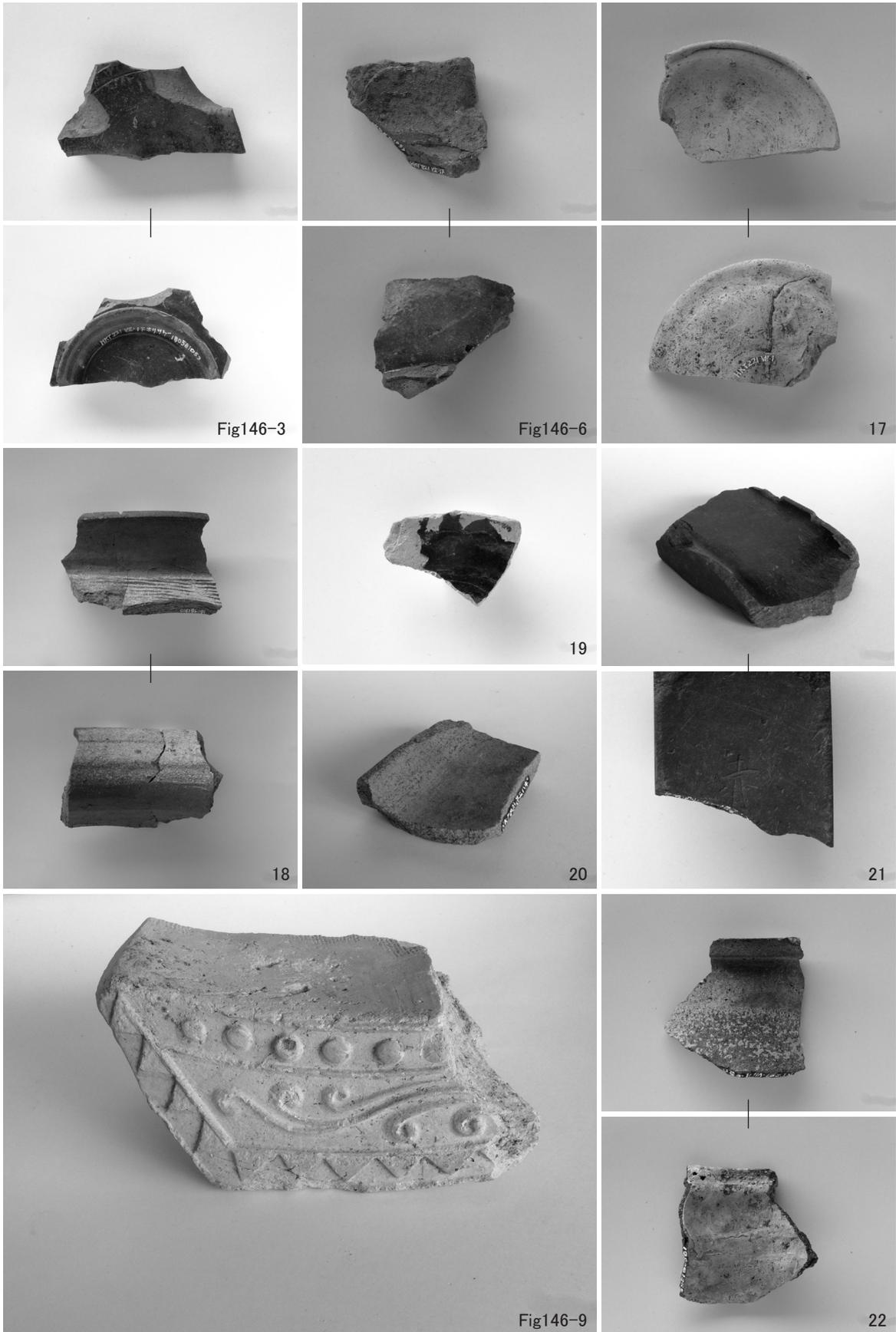
Fig.146 VII区その他の出土遺物実測図(1/3・1/4)

のⅢ類碗が多数出土している。15・16は、長沙窯の青磁である。15は、円盤高台の中央部を丸くえぐって、玉壁高台に作る。15は、水注の胴部で褐彩を施した部分である。17は、前述した1と同じく、京都系土師器の「て」の字状口縁皿である。手捏ね成形で、粘土板を引き合わせて接合した痕跡が、弧状に見られる。18は、須恵器の甕で、香川県の十瓶山北麓窯の製品である。19は、土師器皿で、内面に漆が付着している。漆パレットとして用いられたものであろう。017号遺構からも同様の破片が出土しており、本品も017号遺構に由来するものと考えられる。20は、石硯の背面である。硯面側は剥落している。長側縁に沿って脚を削り出している。宋代の挿手硯に類例があり、本品も宋代の中国硯の可能性を考える。21は、赤間石の硯である。背面には、浅く割りこんだ中に「赤」の線刻文字が見られる。「赤間」の表記であり、赤間硯が産地名を刻むのは近世以降であり、21も近世に下る遺物であろう。22は、無釉陶器水注の口縁部である。内面にはガラスが付着している。中世初頭の博多では、中国陶器の水注をガラスるつぼに転用したガラス器の生産が行われており、22もガラス器生産に係る遺物（るつぼ）である。

Tab.4、Ph.207、Fig.147に、Ⅶ区出土の銅銭を示す。3点の銅銭が出土したにとどまる。



Ph.205 Ⅶ区その他の出土遺物1



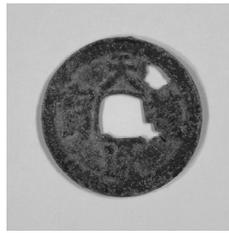
Ph.206 VII区その他の出土遺物2



Tab. 4-1  
天禧通寶



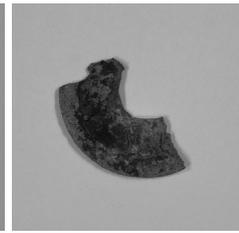
Tab. 4-2  
祥符通寶



Tab.4-1



Tab.4-2



Tab.4-3

Ph.207 VII区出土銭貨

Fig.147 VII区出土銭貨拓本(1/1)

Tab.4 HKT221 出土銭貨一覧表

| VII区 |      |        |    |    |
|------|------|--------|----|----|
| 番号   | 出土遺構 | 銭貨名    | 字体 | 備考 |
| 1    | 060  | 天禧通寶   | 真書 |    |
| 2    | 062  | 祥符通寶   | 真書 |    |
| 3    | 採集   | □欠□欠通寶 |    |    |

### 3. 小結

VII区の調査においては、2面の遺構面を設定した調査を行った。第1面は、中世以降、第2面は古代から中世前半である。

VII区は、砂丘上にあらず、河川堆積層を基盤としていた。これまで、砂丘頂部の安定した地質部分から土地利用が始まり、低地部分に関しては鎌倉時代後半の大規模な埋め立て以前には利用されていないと考えられてきた。しかし、VII区の出土遺構・遺物を見ると、第221次調査地点においては、VII区が最も古代の遺物が多いことになり、古代の博多における土地活用に関しては見直しを迫られる結果となった。

調査区ごとの細かい集計に基づく出土遺物の様相の検討は、次年度の報告書の総括において試みたいが、たとえば、古代の特徴的な遺物として越州窯系青磁や国産の緑釉陶器、焼き塩壺などを挙げるならば、実はVII区が最も豊富に出土しているのである。VII区003号遺構のような古代にさかのぼる埋葬遺構は、他の調査区では全く見つかってはいない。これらのことを考えると、自然地形による不安定な地盤の状況は、単にマイナス要素であっただけで、それがすなわち土地利用の制約とはなりえなかったことを示している。

中世初頭になると、円筒形で深い廃棄土壌が濃い密度で掘られている。その割には、廃棄物をもたらすような日常性を感じさせる生活遺構は、VII区では皆無である。

位置関係から見れば、これらの廃棄土坑の背後には、石積遺構を想定せざるを得ない。さらに017号遺構に見られたような「試し」木製品や土師器転用漆パレットの出土は、VII区からそう遠くないところに職人の工房があったことを暗示している。食物残渣である牛骨を捨てた019号遺構も併せて、「場」の性格に切り込む必要があるだろう。

また、017号遺構から出土された「蘇民将来」符は重要である。「蘇民将来」符が厄払いの護符として用いられる背景に牛頭天王信仰を見れば、それは祇園祭りを連想させるし、境界の祭祀を予感させる。これについては「第十一章おわりに」で検討する(257～258頁)。

## 第七章 X区の遺構と遺物

### 1. X区の概要

#### ① 総説

X区は、調査地点の南東角に設定した調査区である。令和2年度まで博多伝統工芸館があって、営業を続けていたため、調査の最終年度にいたってこれを解体、調査することになったものである。

伝統工芸館の解体撤去は令和3年5月17日に始まり、完了検査が終了し、埋蔵文化財課に引き渡されたのは7月20日であった。

V区の調査成果によって、X区が221次調査地点においては、砂丘の最高所に当たることが予想された。その分、攪乱が多く破壊されていることを危惧したが、予想外に遺構は残っていた。

重機による表土剥ぎは8月3・4日、うち続く雨がひと段落して第1面の遺構検出に着手したのは、8月30日であった。発掘調査は時期的に盛夏に当たったため、砂地での遺構検出は困難を極めた。遺構検出のために遺構面を削っても、作業している横から乾燥して白んでしまい、また砂は容易に崩壊した。写真撮影に当たっても日差しが強すぎて、容易に影を除けず、散水しても効果は一時的なものにとどまった。そのため、遺構の誤認は避けられず、特に大型の遺構の切り合い関係を把握するのは困難であった。また、調査工程上、X区と同時進行で、VII区、IX区の調査を行ったため、発掘調査作業員を集中できず、調査作業が間延びして、遺構が荒れる事態も避けえなかった。

X区の発掘調査は、決して満足がいくものとは言えなかったが、令和4年1月17日をもって終了した。



Ph.208 X区第1面(南西より)

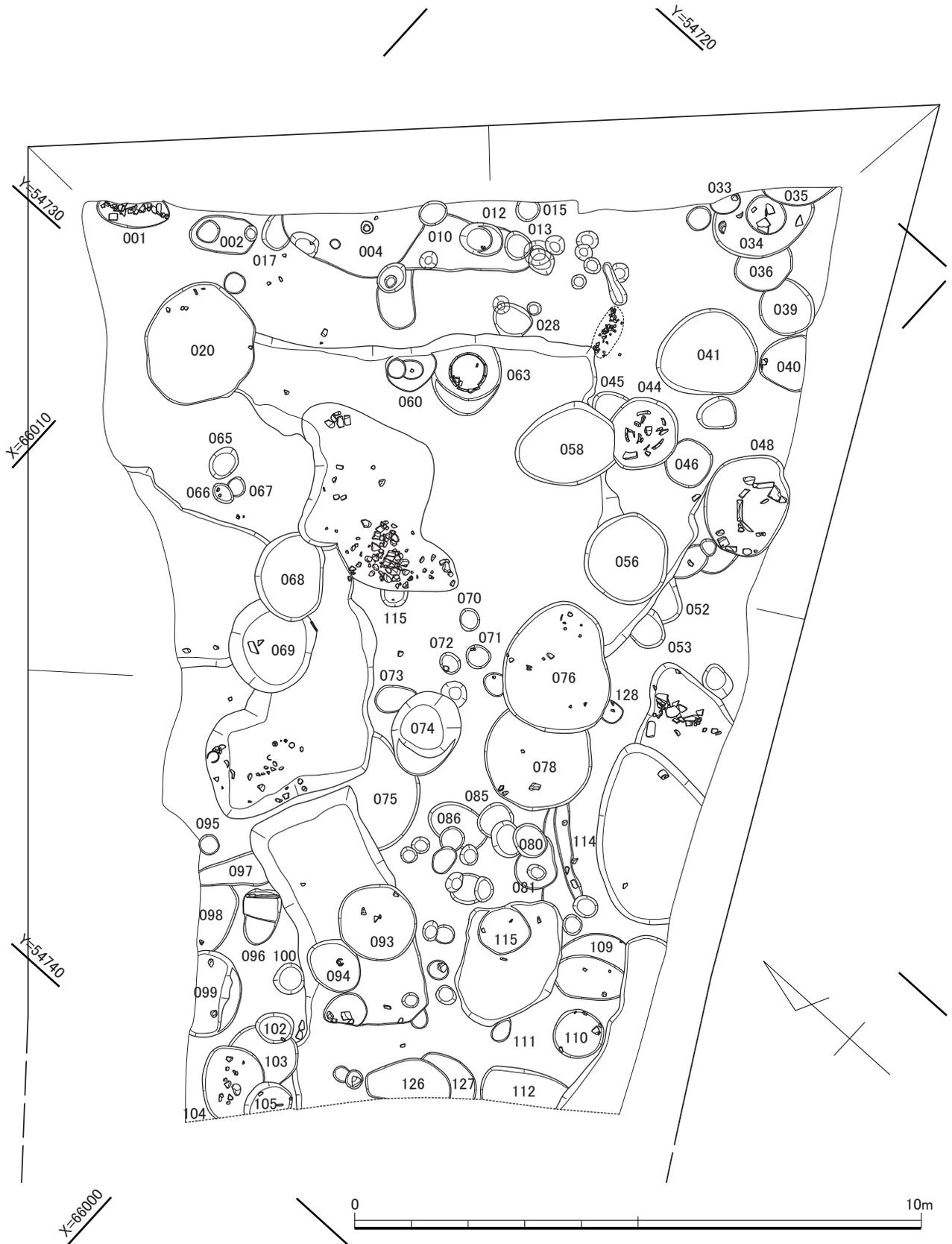


Fig.148 X区第1面遺構全体図(1/100)

## ② 第1面

表土から0.9～1.2m前後掘り下げた、標高3.0～3.8mで設定した遺構検出面である。

221次調査地点においては最も砂丘面が高い地点であり、第1面ですでに砂丘表面の砂層が顔を出した。また、攪乱による掘り込みも、事前の予想ほどではなかったにせよ、決して少ないわけではなく、X区の中央部分は皿状に掘り下げられていた。よって、第1面では、中央部分は近現代の遺構の確認にとどめ、周囲の一段高く残った部分について精査した。

第1面では、柱穴、土坑、井戸などの遺構を検出・調査した。井戸はすべて近世以降のものである。柱穴、土坑については、第1面ですでに中世前半にさかのぼる遺構もあった。

第1面は、近現代の表土層直下の面ではあったが、基盤となる砂丘砂層が近かったために、中世前半以降の遺構検出面となっている。

## ③ 第2面

X区全体にわたって、砂丘砂層を出して完掘することを狙って設定した遺構検出面である。第1面で砂丘砂が見えていた南東付近では掘り下げはほとんどなく、整地層が残っていた北側から西側にかけては、砂丘地形の傾斜に沿って10～30cmほど掘り下げて遺構検出を行った。標高2.7～3.4mをはかる。

第2面においては、柱穴、土坑、井戸、溝を検出・調査した。X区東辺近くで検出した161号遺構は、土師器の一括廃棄遺構として注目される。ここからは、土師器と一緒に畿内産の楠葉型瓦器碗が多数出土した。310号遺構(=370号遺構)は、X区を北東から南西に貫く溝であるが、前述したように乾燥のために遺構の切り合い関係の検出が困難で、大型溝の連続関係の把握は、遺構検出段階ではほとんど不可能であった。そのため、部分ごとに遺構番号が付く結果となり、煩雑さを増してしまった。

第2面では、中世前期から後期にわたって遺構を調査した。



Ph.209 X区第2面(西より)

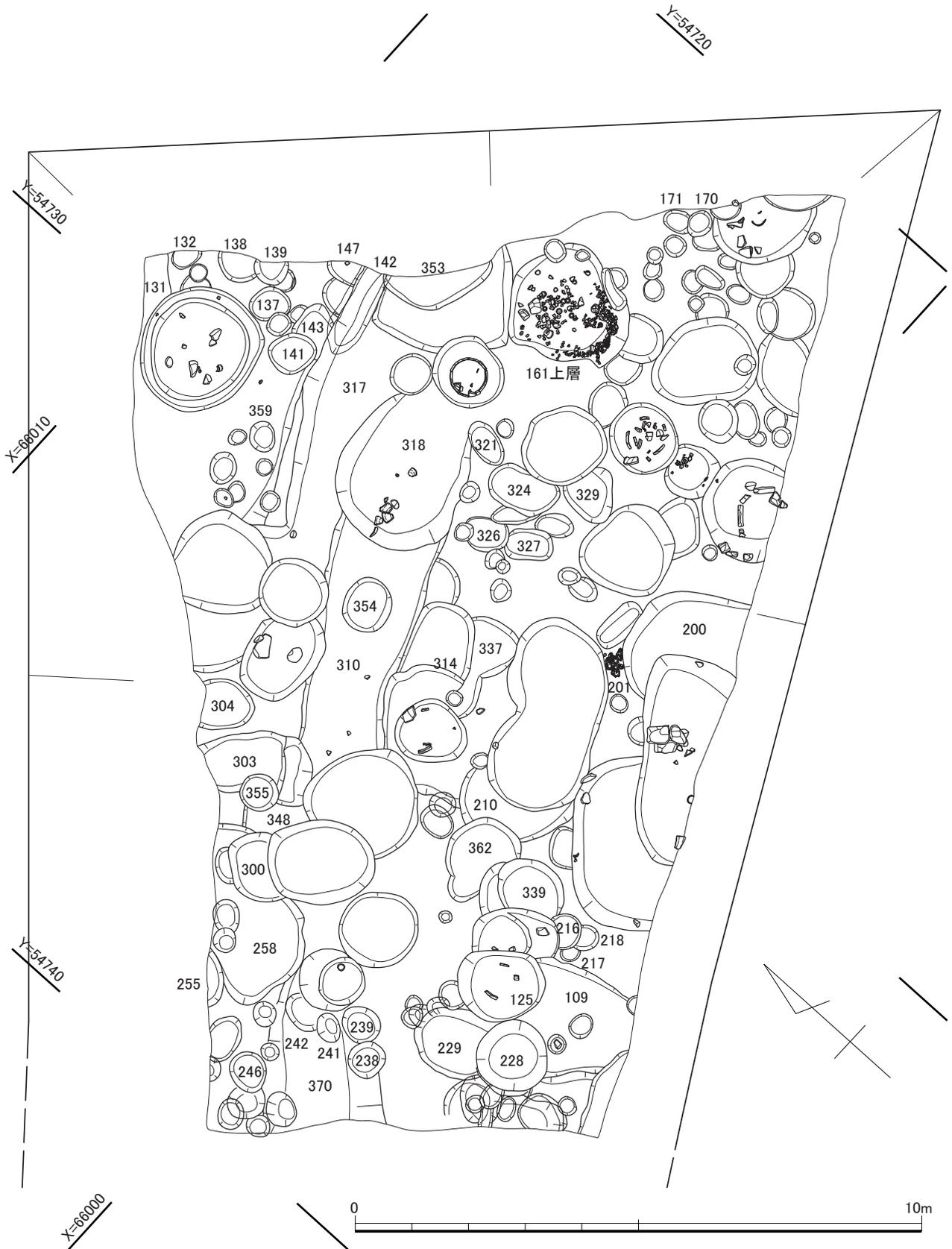


Fig.149 X区第2面遺構全体図(1/100)

#### ④ 第3面

X区の完掘を狙った第2面においても、さらなる遺構の重複から、検出しきれない遺構が残った。そのため、砂丘面を、掘り下げ気味に大きく削って遺構検出面を設定した。これについては自然砂丘上面を下げているため、本来であれば第2面の下層遺構となるが、実測図的にも、遺構分布としてもかなり煩雑になるので、あえて第3面として設定したものである。

柱穴、土坑、井戸、溝を検出した。溝は、第2面において切れ切れに調査していたものであるが、第3面において連続関係の下に掘り上げている（310号遺構）。また、310号遺構に切られて土壇墓が1基、出土した（377号遺構）。溝の壁に一部が遺存したもので、頭蓋骨の一部が残っていただけで副葬品はなく、時期は不明である。

第2面で検出、精査した161号遺構は12世紀前半の土器溜りであったが、第3面ではその直下から井戸が出現した（161号下層遺構）。時期的には161号遺構と同時期の井戸である。おそらく、161号下層遺構である井戸を廃絶した際に、掘方から大きく掘りこんで井側を抜き取ったようで、その掘り抜き坑を埋め立てる過程で、埋まり切っていないくぼみにカワラケの一括廃棄を行ったものが、第2面の161号遺構であろう。

310号遺構に切られて、古代の井戸も出土している。385号遺構は、方形の掘方に方形板組の井側、曲げ物の水溜を持つ井戸で、8世紀後半の井戸である。さらに、この385号遺構に切られる形で、386号遺構（井戸）が出土した。方形板組の井側を持つ井戸だが、板組の上に鴻臚館式の平瓦を立て並べていた。8世紀前半の井戸であり、X区の遺構としては、最もさかのぼるものである。

遺物としては、弥生時代中期の土器片が出土しており、古式土師器の出土も見られた。また、鴻臚館式平瓦を用いた386号井戸の存在は、古代の公的施設の存在の暗示している。

第3面においては、古代から中世初頭の遺構を検出・調査した。



Ph.210 X区第3面(北西より)

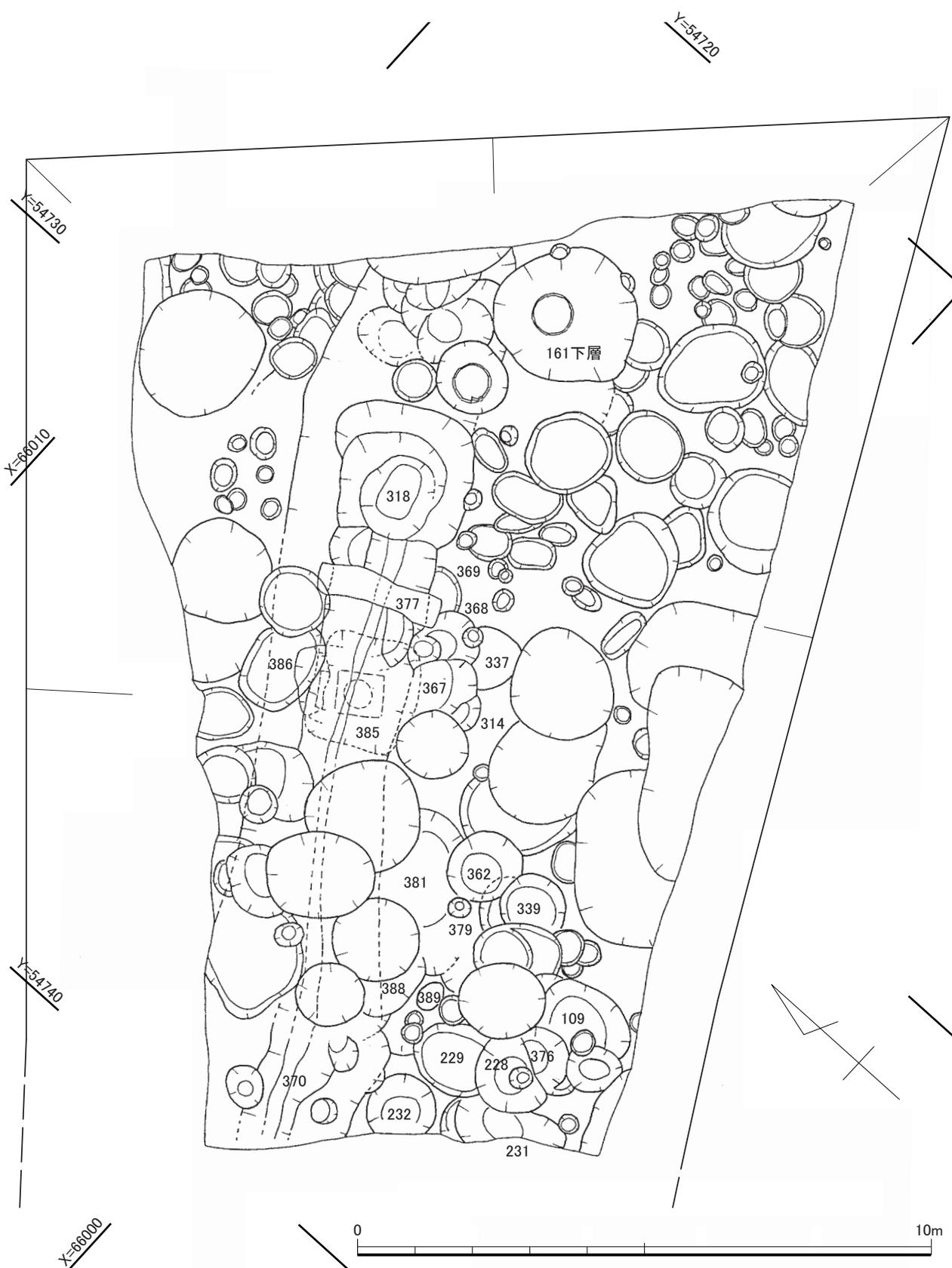


Fig.150 X区第3面遺構全体図(1/100)

## 2. X区の主要な遺構と出土遺物

X区では、387基の遺構を検出、調査した。本書の限られた紙数ではすべての遺構・遺物について報告するのは不可能なので、以下、主要な遺構と出土遺物について報告する。

### ① 041号遺構

第1面で検出した土坑である。長径1.9m、短径1.7mの楕円形を呈し、深さは30cmほどをはかる。

出土遺物を、Fig.151に示す。1～13は土師器である。1～4・10は皿である。底部は回転糸切りする。1～3の器高が低く浅いタイプがほとんどで、これに4のような器高の高い坏型の皿が混じる。5～9は坏である。底部は回転糸切りする。法量的、器形的に斉一性が高い。11・12は、碗である。内面はヘラ磨きする。13は、鉢もしくは壺の口縁部であろう。器壁は全体に摩耗気味で、調整痕ははっきりしないが、口縁部は横ナデ、体部外面には縦方向のハケ目がうっすらと認められる。14は、高麗系無釉陶器である。壺の口縁部で、鋭く折り返して二重口縁を作る。内外面ともに横ナデ調整である。暗赤褐色の極めて緻密な胎土で、焼成は堅緻で表面は黒光りしている。15・16は、白磁碗である。15は、口縁を三角に肥厚させて玉縁を作る。16は、細く直立した高台を持つ。高台の径は広く、高い。外面の施釉は、高台畳付きを回りこんで、高台内側の直立した面にまで及んでいる。17は、同安窯系青磁碗である。18は土製品で、管状の土錘である。

12世紀後半の廃棄土坑である。

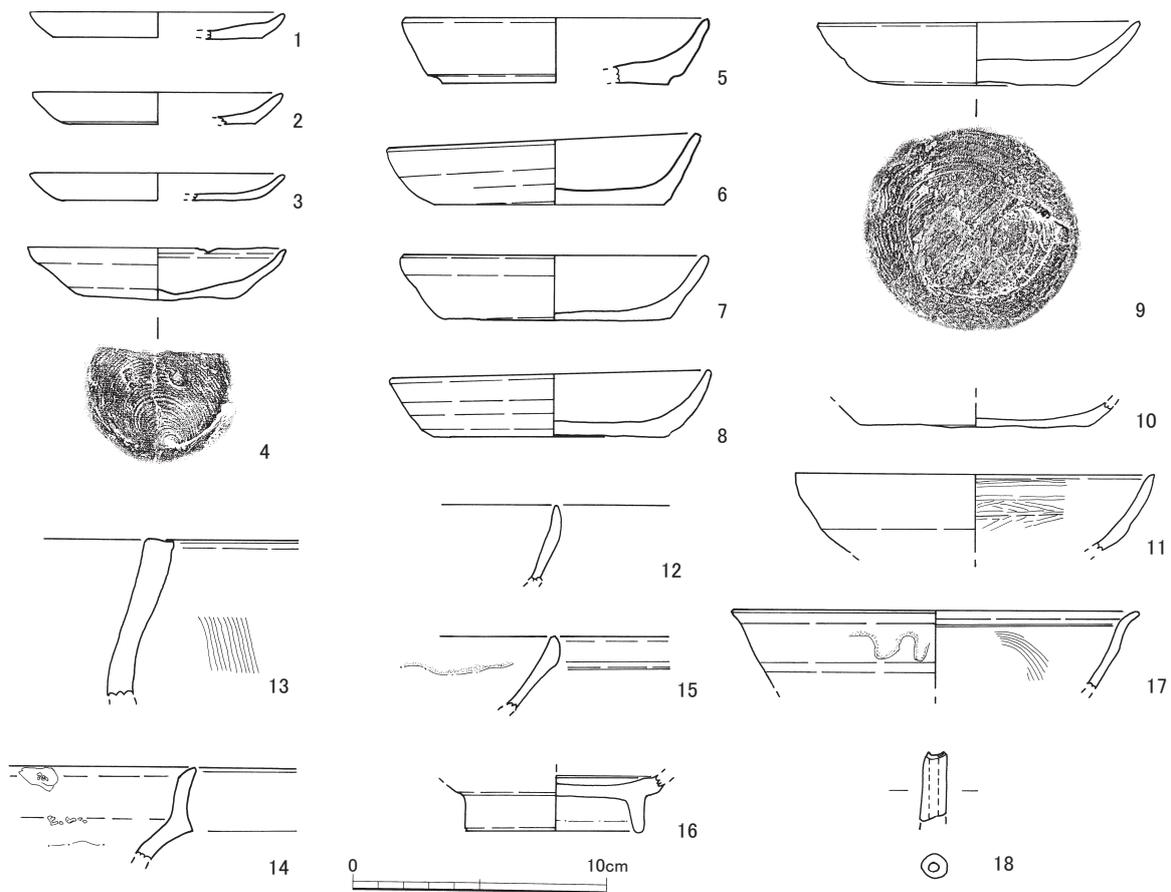


Fig.151 X区041号遺構出土遺物実測図1/3)

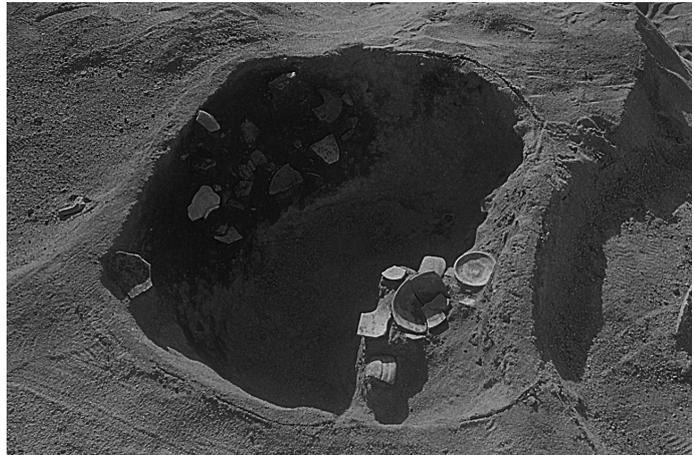
## ② 046号遺構

第1面の南辺よりから検出した円形の土坑である。直径0.9m前後の円形を呈し、検出面からの深さ20cm程度をはかる。

北寄りと南寄りの二カ所に分かれて、遺物が出土した。北側の遺物には完形の土師器皿・坏が混じるが、南側の遺物は破片ばかりで完形品は含まれない。すなわち、遺物相に違いがあるわけだが、ともに土坑壁に沿うように出土しているので、046号遺構に伴うものとみて間違いないだろう。土坑の南と北から、それぞれに廃棄が行われた結果と考える。

出土遺物を、Fig.152に示す。1～21は、土師器である。1～6は皿で、1～4は、底部をヘラ切り、5・6は回転糸切りする。7は、碗である。内外面はヘラ磨きする。8～20は、8から16は底部をヘラ切り、17～20は回転糸切りする。ヘラ切りの坏は、底部を押し出して丸底に作る。外底部には、指頭圧痕が並び、体部は横ナデ、内面はコテ当てで平滑に調整し、あるいはその上からヘラ磨きを加える。糸切りの坏は、丸底にはしないで、横ナデ調整することとどまるが、20は回転糸切りでありながら底部を押し出して丸底にし、内面はコテ当てして平滑に調整している。外面の底部と体部の境界部分には、指頭圧痕は見られないが爪痕が並んでおり、指先で成形したことを示している。糸切りの坏で丸底坏を作ったという体であり、折衷的な様相として注目したい。また、19は、内底部にヘラ磨きが加えられている。これも折衷的な要素である。21は、灯火器の脚部分である。まれに碗を伏せたような台から長く伸びた一脚部分をへて、皿部を付ける土師器の灯明台が出土するが、21はその支脚部分の破片である。22～26は、白磁である。22は、鳳首瓶の破片である。鳳の頭の後ろ側に当たる。実測図の天地が逆である可能性もあるが、施文的にはこの天地の方が落ち着きがよく、確定できなかったのでそのまま掲載している。23は、小碗である。27は玉縁碗だが、薄造りで体部中位に屈曲を持つ。内面には圈線は入れずに滑らかに見込みにつながる、また、高台は、断面台形の輪高台で、径も広いなど、いわゆるIV類の玉縁碗とは異なる特徴を示す。27は、褐釉陶器の壺底部である。

12世紀前半の廃棄土坑と見て大過ないであろう。



Ph.211 X区046号遺構(北東より)



Ph.212 X区046号遺構遺物出土状況

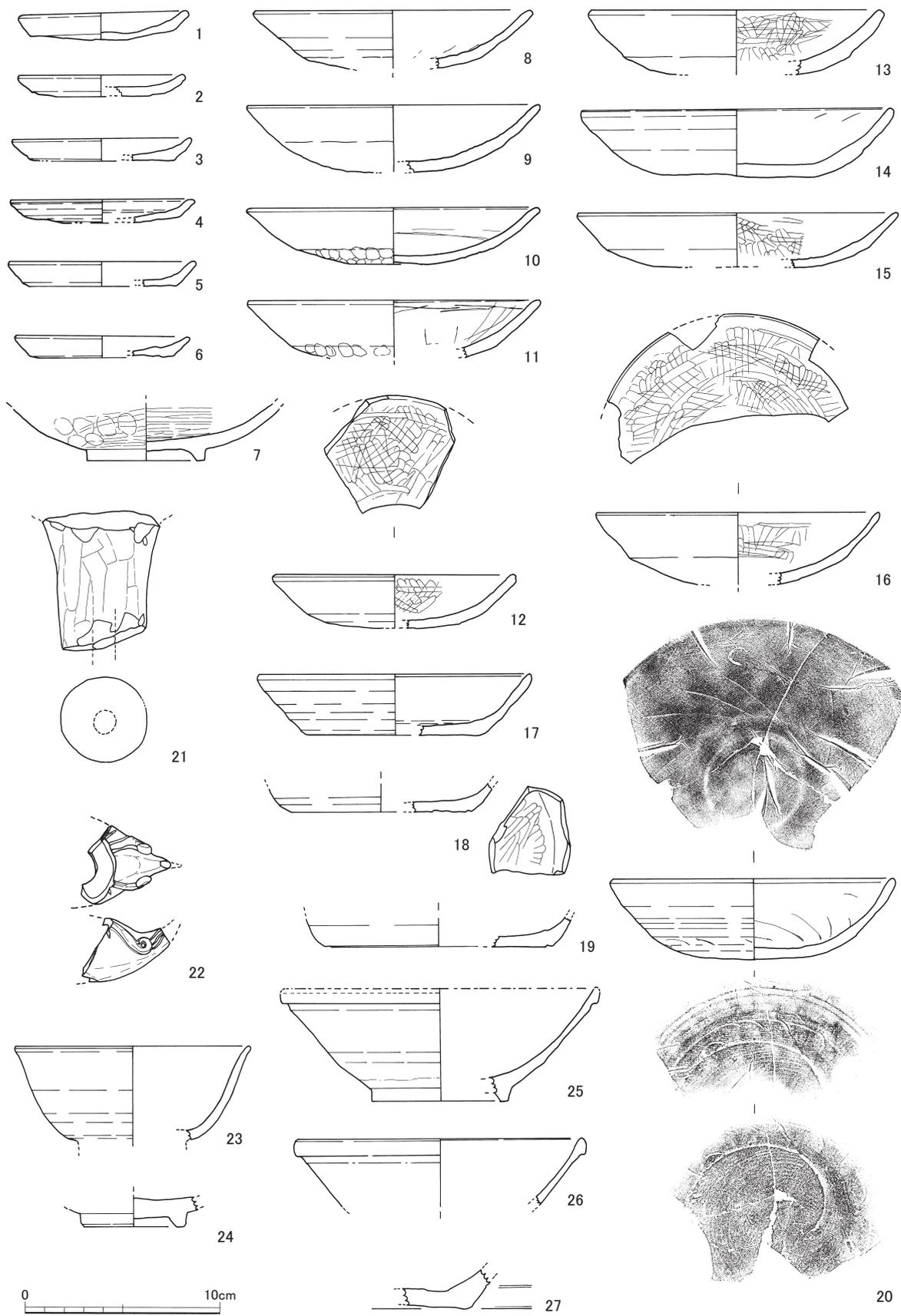
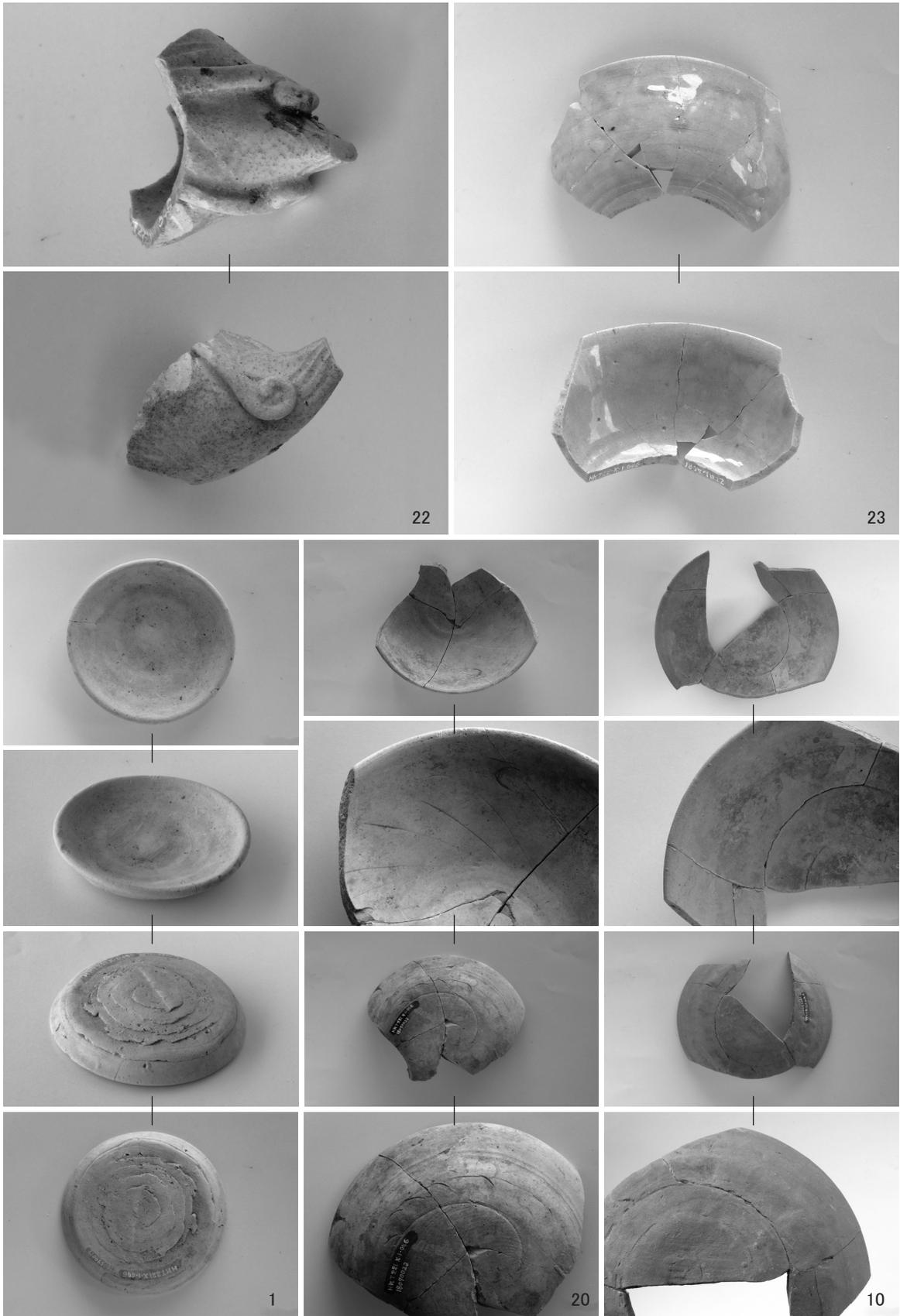


Fig.152 X区046号遺構出土遺物実測図(1/3)



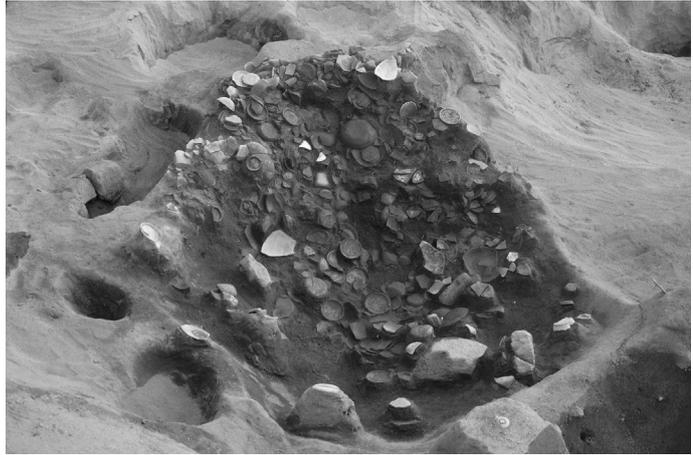
Ph.213 X区046号遺構出土遺物

### ③ 161号上層遺構

第2面東辺の中ほどよりから検出した円形の土坑である。

長辺2.4m、短辺2.0mの略円形を呈し、検出面からの深さは68cmをはかる。埋土中には、土師器が集中廃棄されており、大量の遺物が出土した。土師器は土坑の中央から全体的に分布するが、特に南側においては、土坑壁に沿って上まで伸びている。この上端部分はずでに第一面において顔を出していた。このような出土状態を見ると、南側からの廃棄が主であったと考えられる。

161号上層遺構の精査、遺物取り上げを終え、土坑底面を検出しようとした段階で、土坑壁面が直に深く落ちていることに気づいた。それは結果的にいえば、井戸掘り方の壁にあたるわけだが、下層と上層で異なる性格の遺構であることが想定できたため、堆積土壌の観察に努めたところ、土師器の一括廃棄は下層遺構の埋土上位部分に当たることを確認した。下層遺構は後述する井戸であるが、井戸を廃絶した際に井側を除去するために掘り方を大きく掘り下げ、井側を抜いた後は速やかに埋め立てる。土師器の一括廃棄は、その埋め立ての過程で、くぼみを利用して廃棄行為が行われたものである。



Ph.214 X区161号上層遺構(南西より)



Ph.215 X区161号上層遺構上位遺物出土状況



Ph.216 X区161号上層遺構中位遺物出土状況

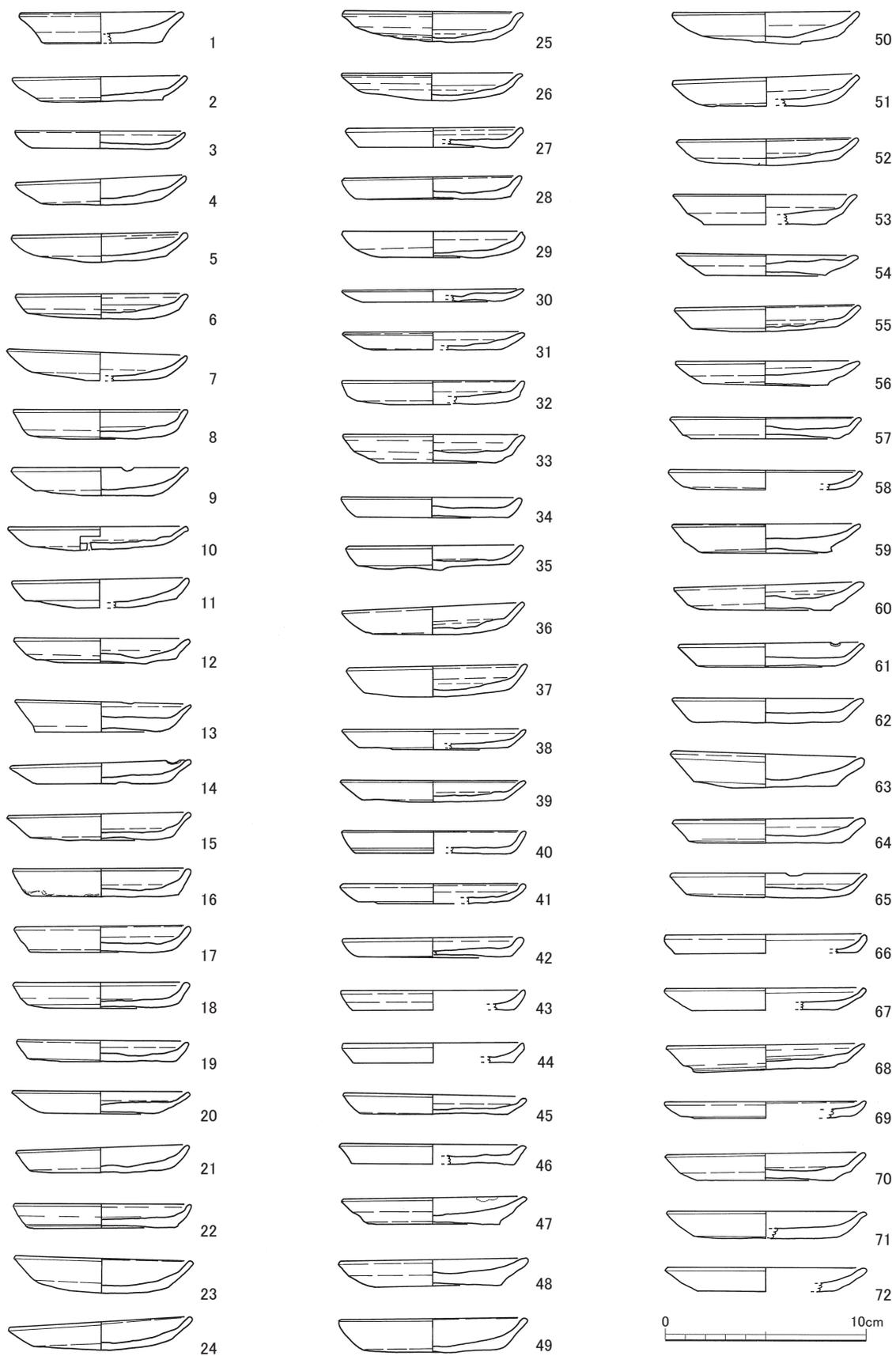


Fig.153 X区161号上層遺構出土遺物実測図1(1/3)

1~124は土師器皿である。1~72は、底部をヘラ切りする。73は、ヘラ切りの皿に高台を貼り付けたもので、高台付きの皿、もしくは托である。74~124は、底部糸切りの皿である。81の内底部には、ヘラで撫でたような痕跡が並んでいる。125~149は、土師器の坏である。125~138は底部ヘラ切り、139~149は回転糸切りする。ヘラ切りの坏は、例外なく底部を押し出して丸底にするが、糸切りの坏は平底のままにとどめる。ヘラ切りでは、内面をコテ当てし、あるいはヘラ磨きを加えて平滑に調整するが、糸切りは横ナデ調整にとどめる。例外は147で、底部を押し出して丸底とし、外底部

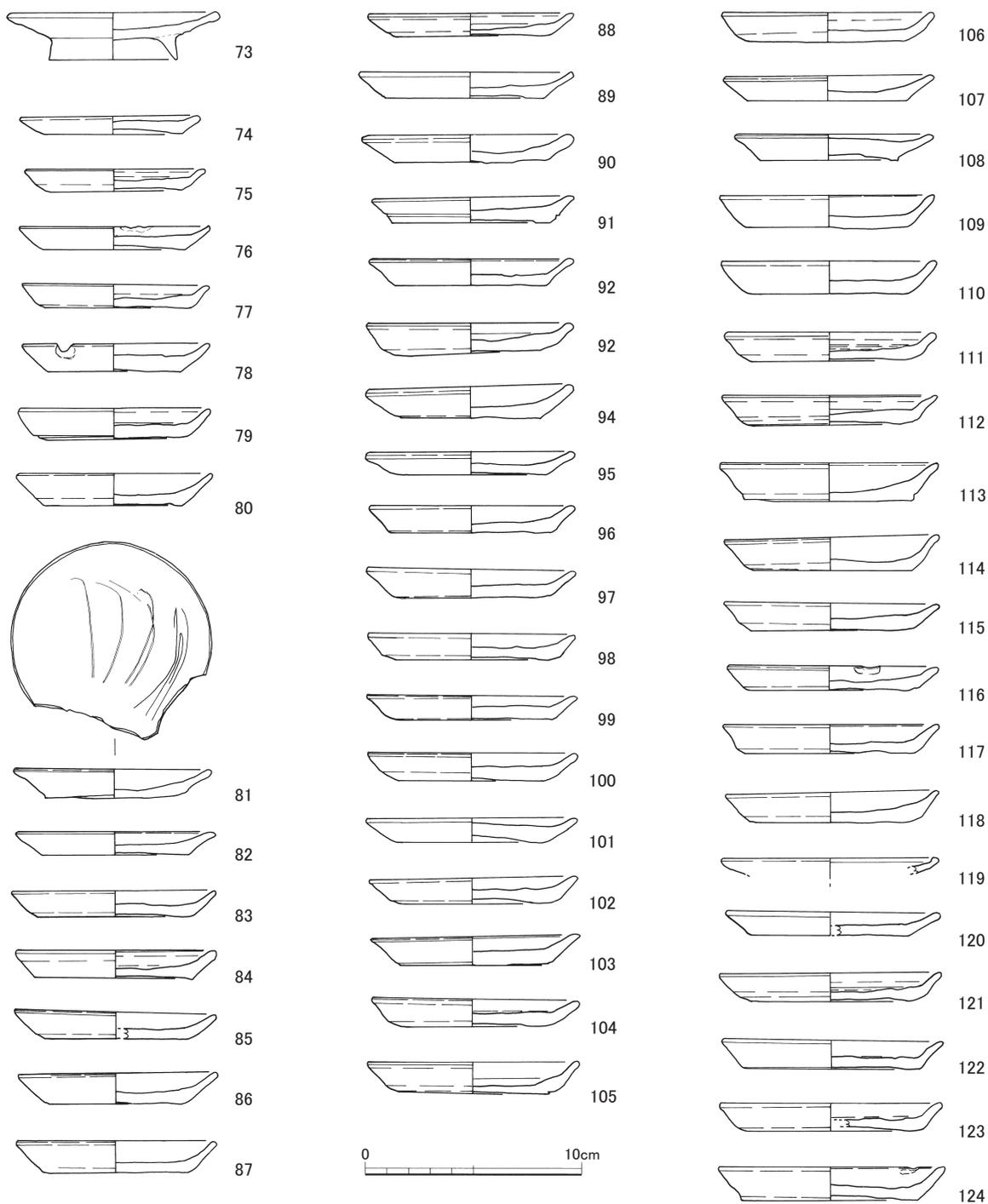
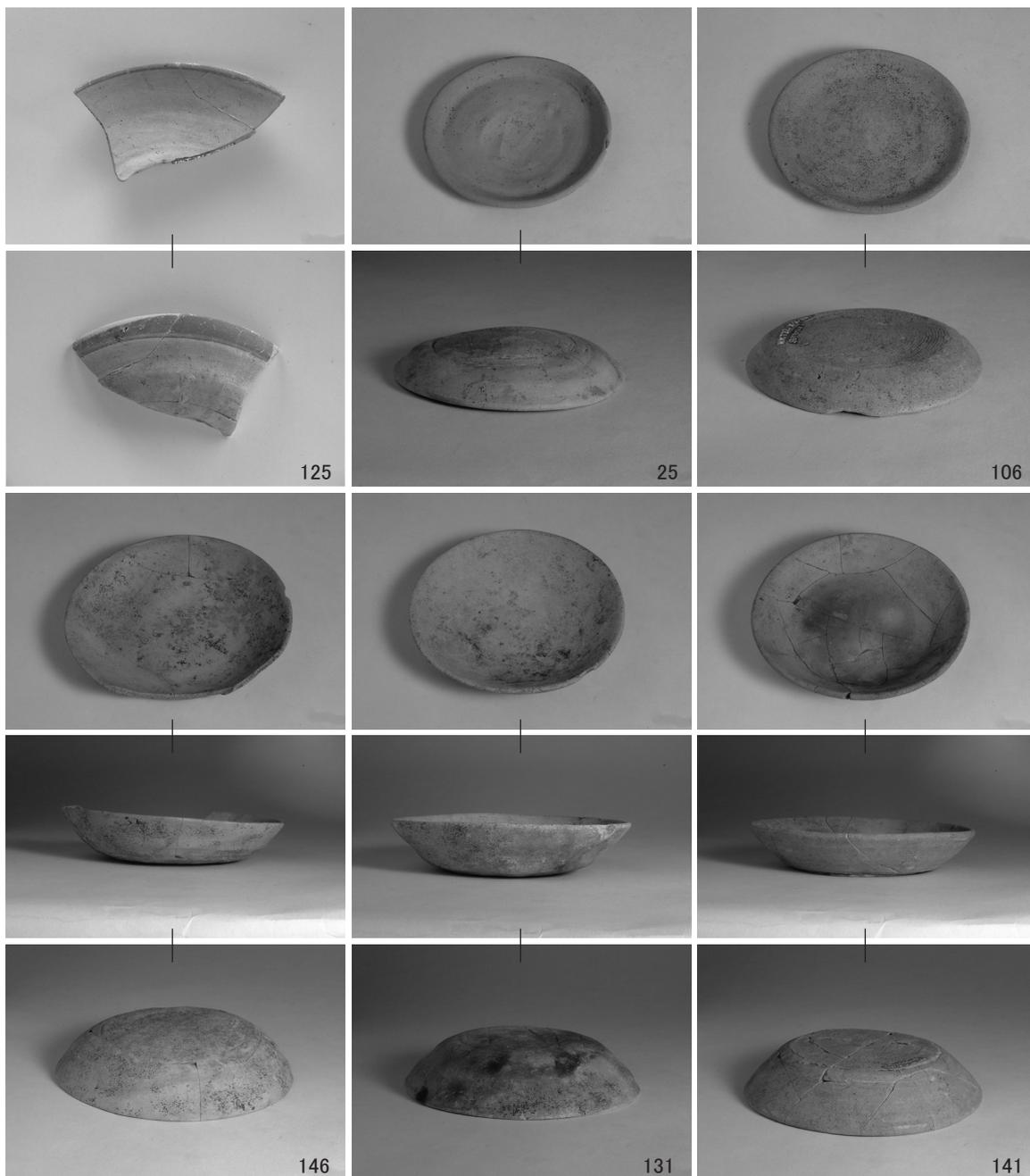


Fig.154 X区161号上層遺構出土遺物実測図2(1/3)



Ph.217 X区161号上層遺構出土遺物1

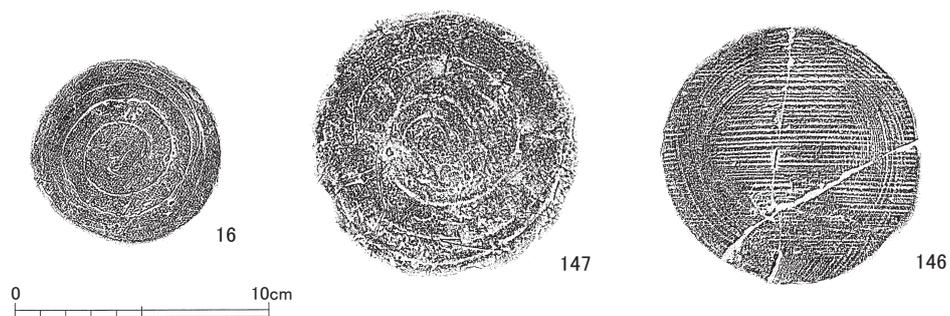


Fig.155 X区161号上層遺構出土土師器底部拓本(1/1)

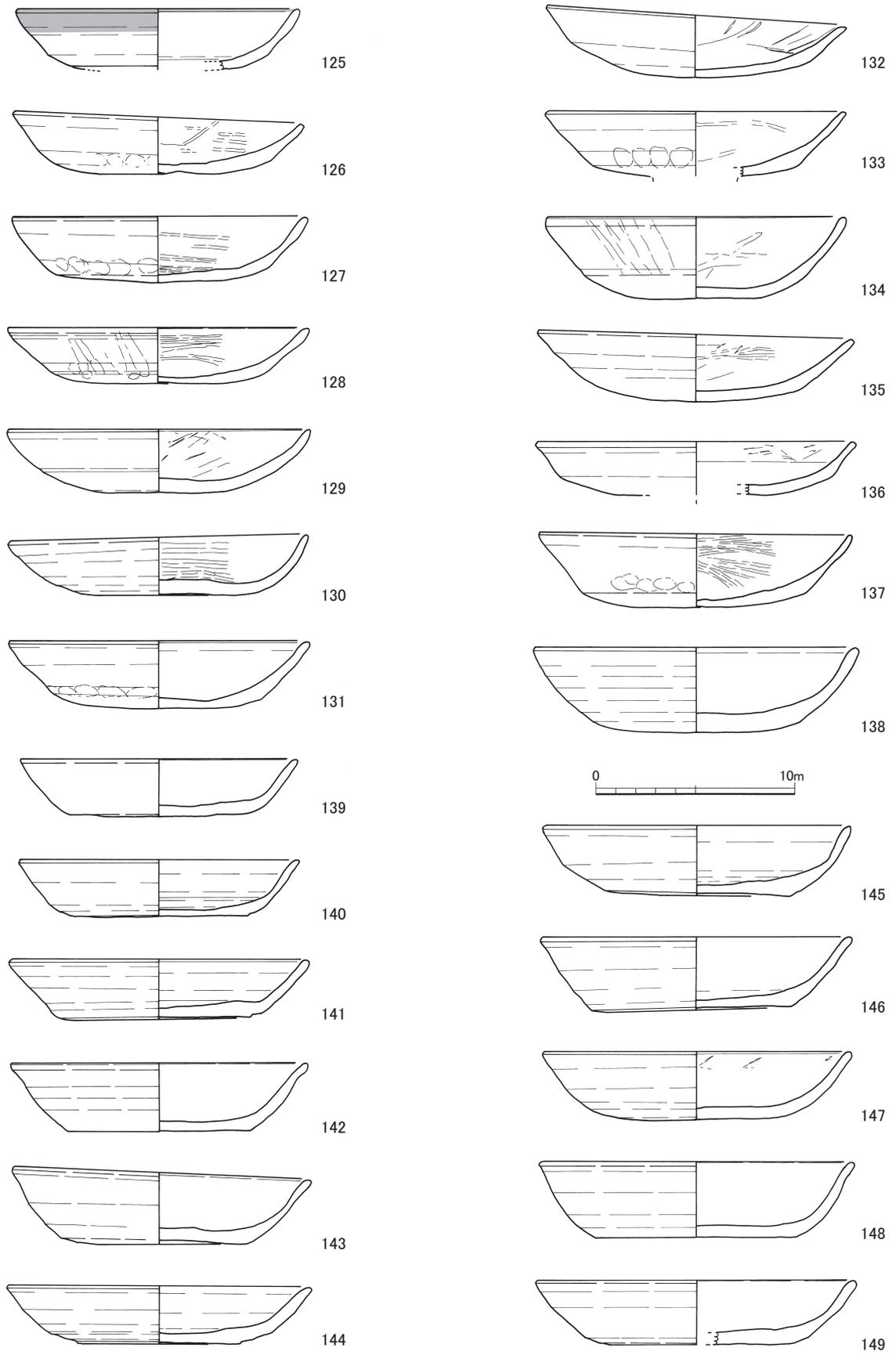


Fig.156 X区161号上層遺構出土遺物実測図3(1/3)

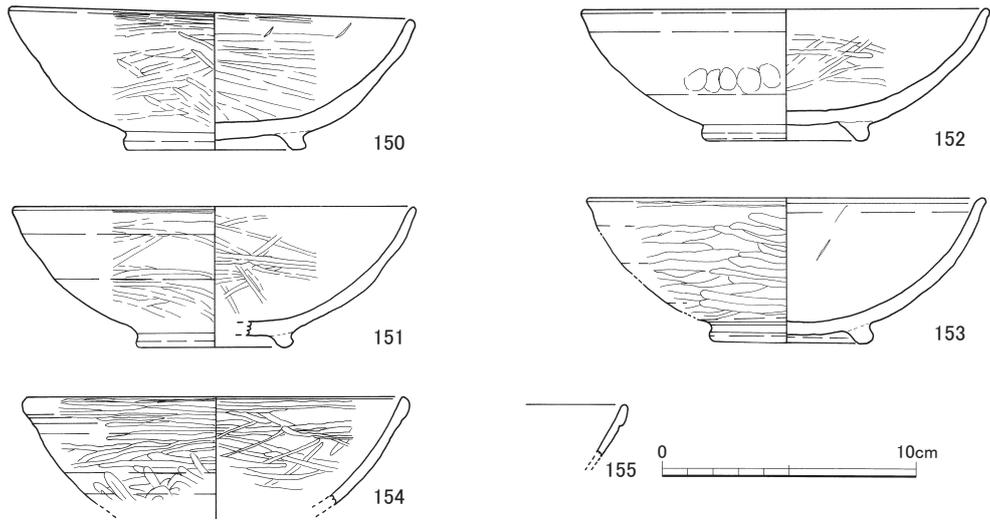
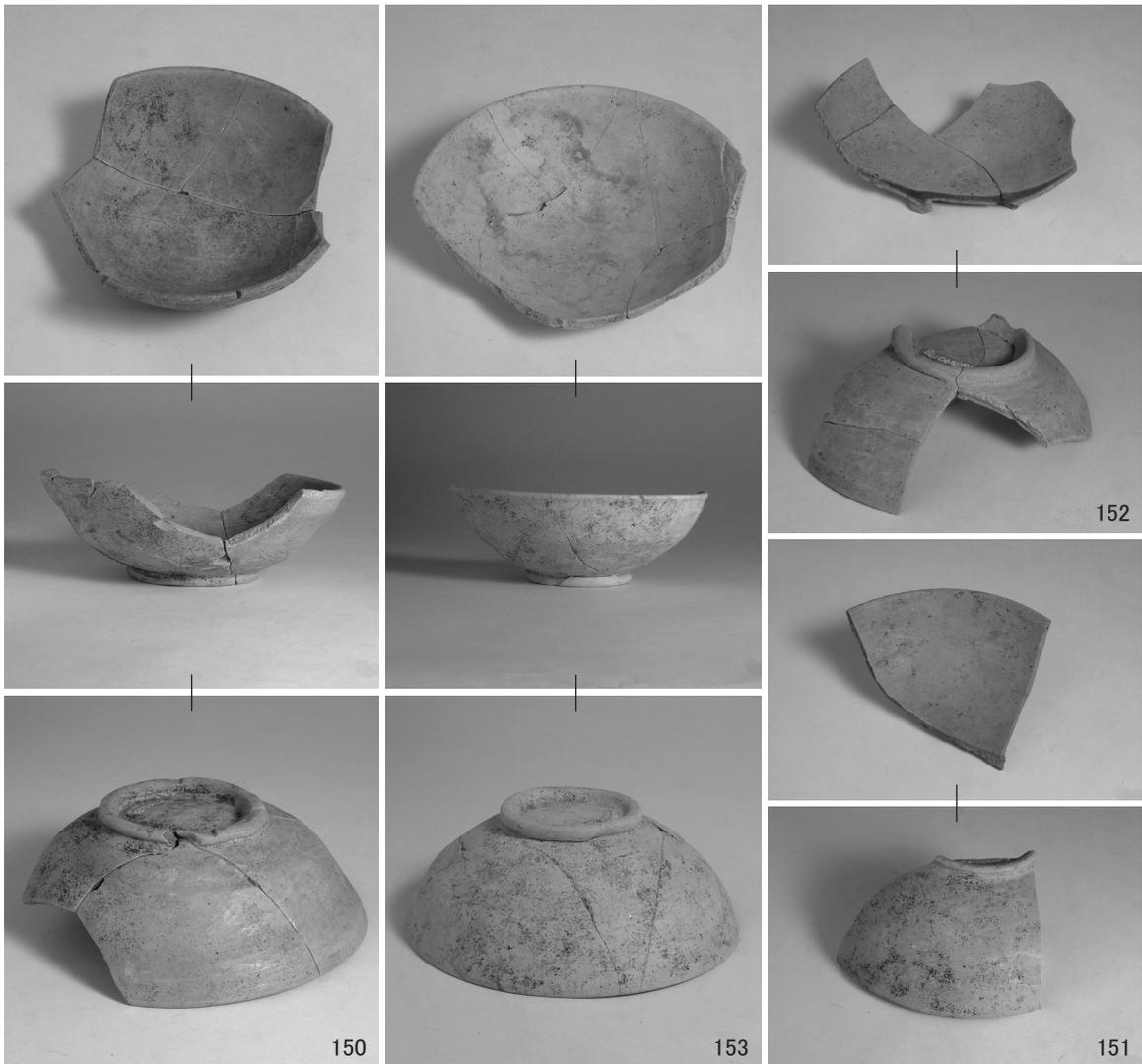


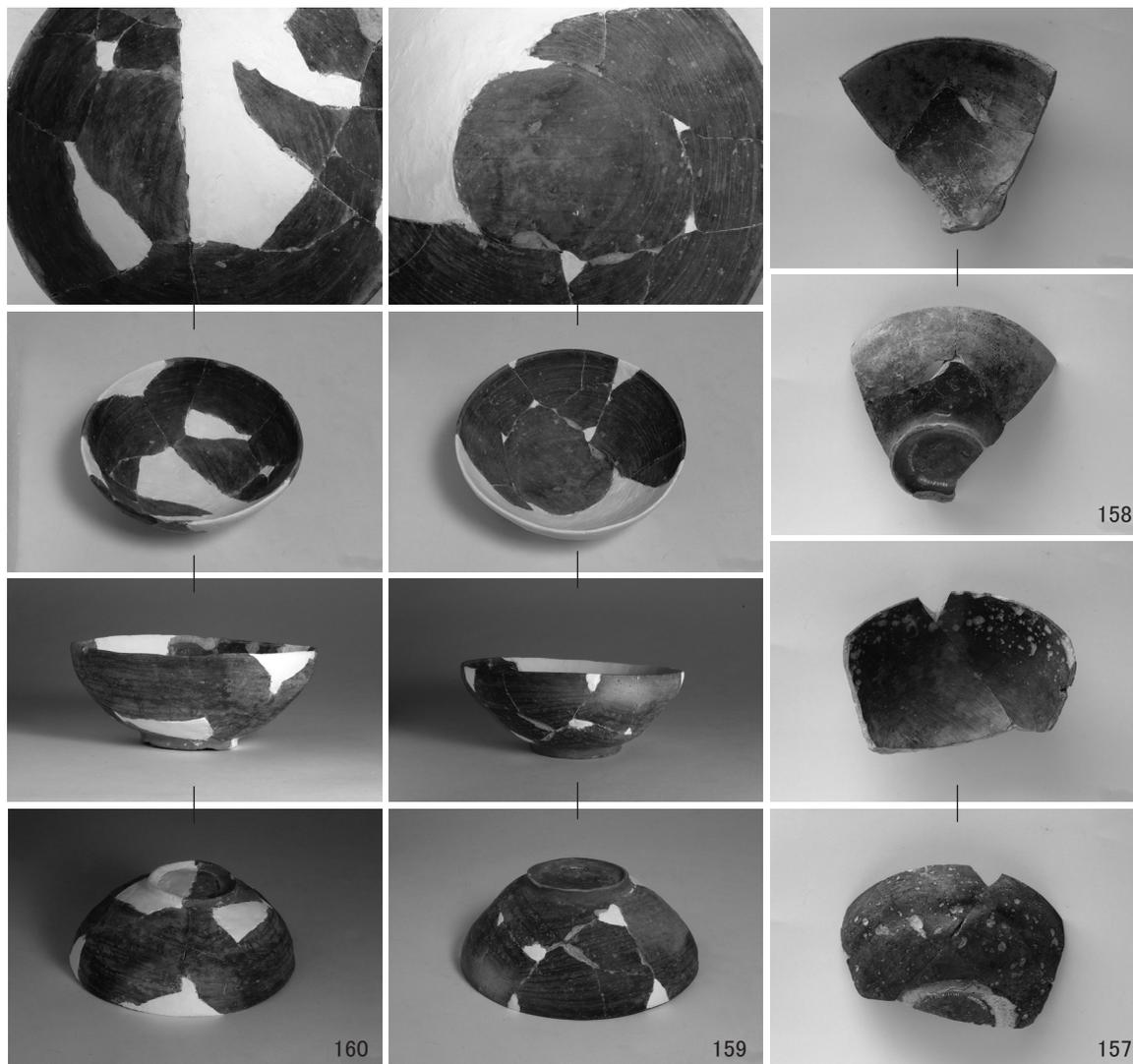
Fig.157 X区161号上層遺構出土遺物実測図4(1/3)



Ph.218 X区161号上層遺構出土遺物2

の周囲には指頭圧痕が見られ、内面はコテ当てして平滑に調整している。125の口縁には、外面から内面にかけて、帯状に赤色顔料が塗布されている。150～155は、土師器碗である。底部押し出しで丸底にしたのち、高台を貼り付けて成型している。内面はコテ当て及びヘラ磨き、外面はヘラ磨きだが、条線は幅広で浅くとらえにくい。154・155は、口縁を肥厚させた玉縁碗である。内外面ともに密にヘラ磨きする。154は、比較的条線がとらえやすいが、ヘラ磨きに規則性は感じられない。玉縁碗はこの2点だけであり、しかも小片なので、一括廃棄に伴った遺物ではなく、廃棄時に混入した可能性を考えるべきであろう。

156～174は瓦器である。図示したものはすべてが楠葉型瓦器である。156は皿である。皿はこの一点しか出土していない。157～174は碗である。157～167は、体部外面のヘラ磨きが体部下位に及ぶもので、ヘラ磨きの間が若干ながらあくもの（158、160、166、167）とびっしり詰まるもの（162、163、165）とがある。168～174は体部外面にヘラ磨きを行わないものである。口縁部の横ナデ調整を除いて指頭圧痕が並んでいる。内面の条線は、ほとんどの瓦器において密に施されるが、167と169においては、若干の隙間が認められる。171・172は、口縁部の小片である。175は底部片である。内



Ph.219 X区161号上層遺構出土遺物3

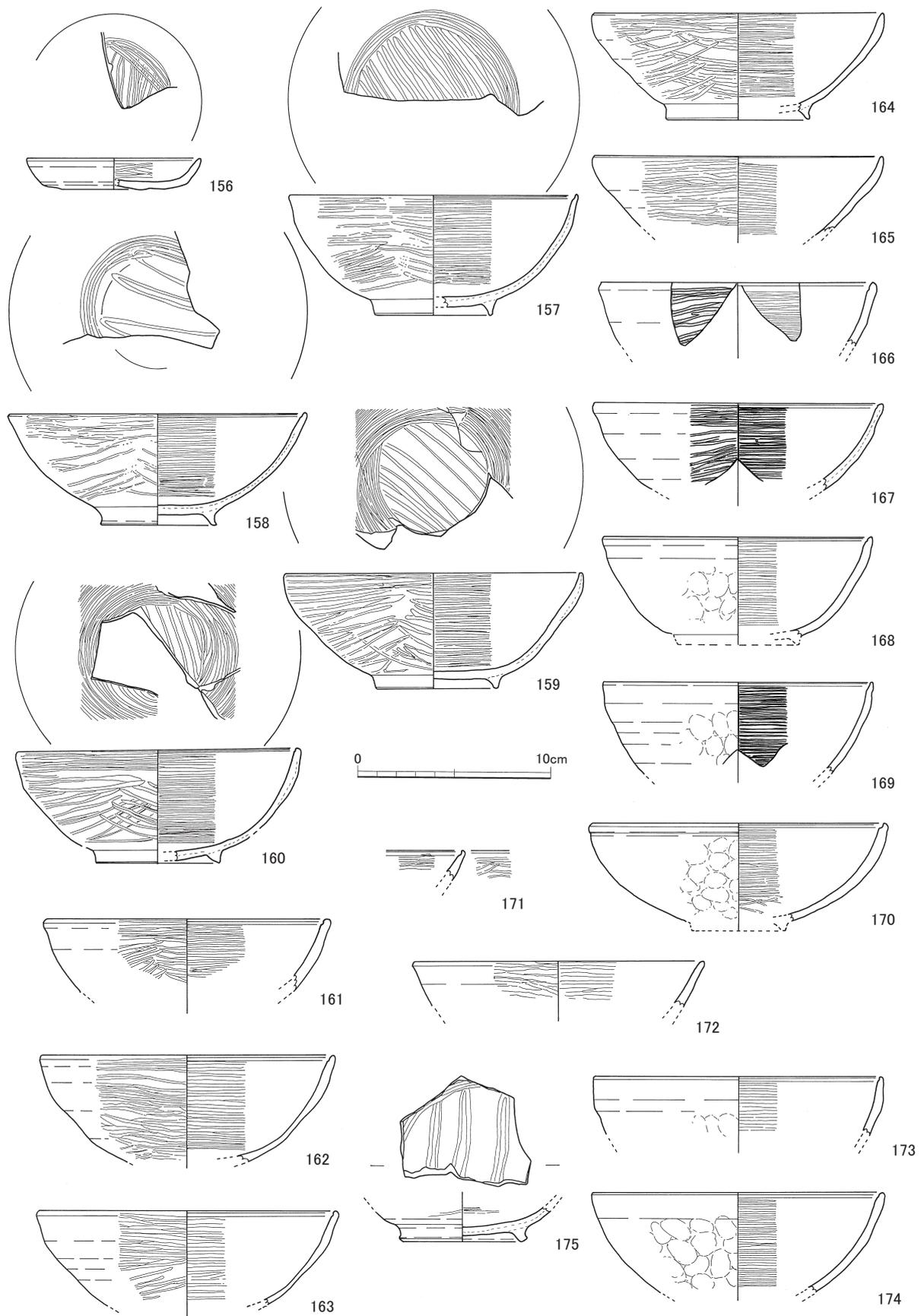


Fig.158 X区161号上層遺構出土遺物実測図5(1/3)

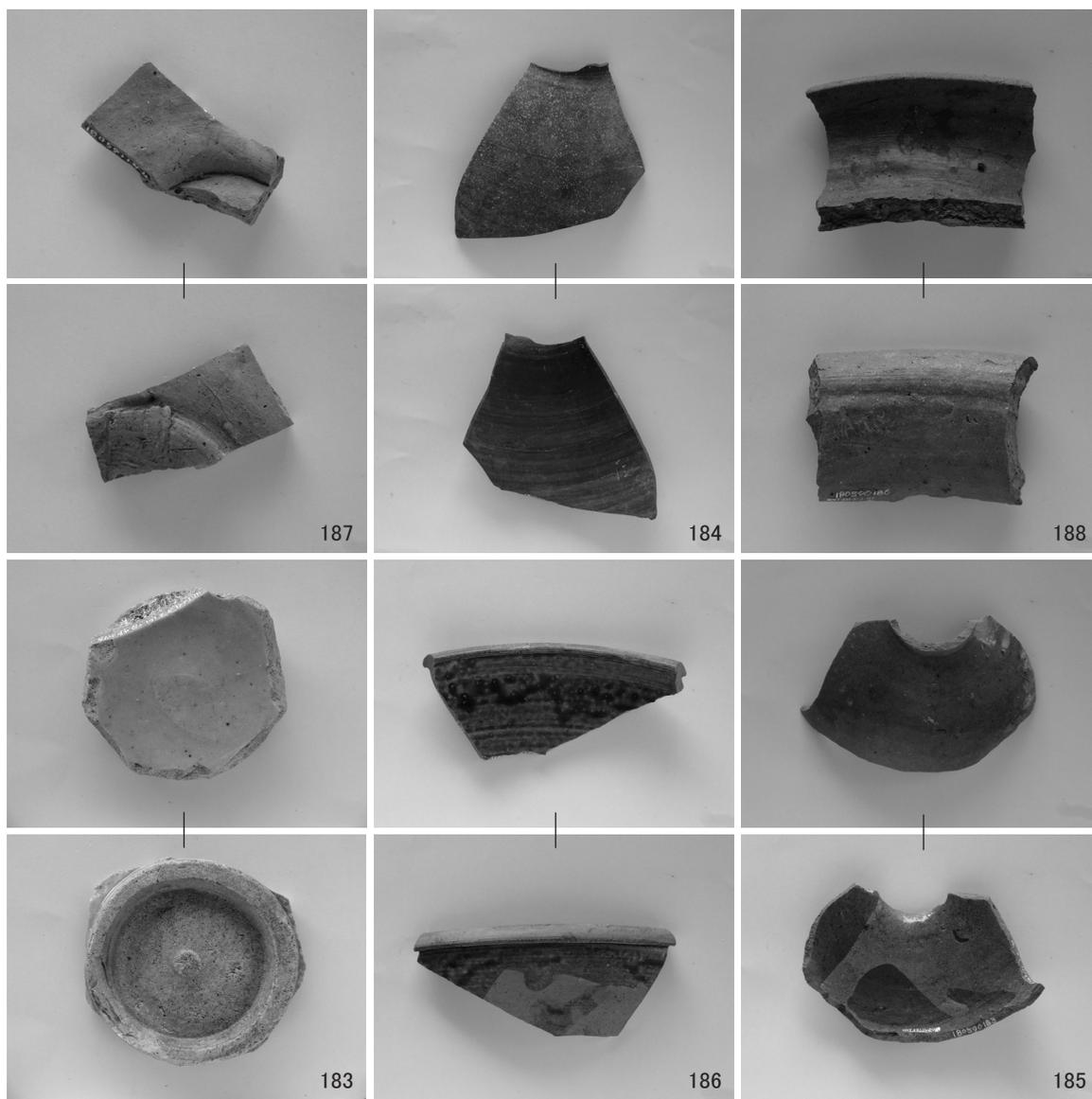
底部にはジグザグ状の暗文が見られる。ところで、体部外面のヘラ磨きが省略されるのは、楠葉型Ⅲ期の特徴だが、168～174においては法量の縮小や内面の条線の簡略化は全く見られず、胎土もⅡ期以降の白くてきめ細かいものと違って、灰色でやや粗く、器壁も比較的厚い。つまり、体部外面のヘラ磨きが見られない点以外は、他の瓦器と全く違いがなく、この点だけをもって時期を下らせる必要はないと考える。したがって、すべてを楠葉型Ⅰ期の範疇でとらえたい。

176～183は白磁である。176は、玉璧高台の白磁碗で、古代の定窯系の白磁である。177は皿である。復元口径16.2cmと碗をしのぐほどの大きさである。178～183は碗である。183の底部には、「陳」の墨書が見られる。二文字目は墨痕跡を確認できるものの、文字としては判読できない。184は、高麗系無釉陶器の壺である。体部内外面には強い横ナデ痕が見られる。185は、褐釉陶器の壺である。

186は、黄緑釉をかけた盤である。内面と体部上半部分に施釉する。口縁部には、目痕が並ぶ。

187は中世須恵器の平底碗である。東播系須恵器か。188は、中世須恵器の壺の口縁である。内外面とも横ナデ調整する。

161号上層遺構は、12世紀前半の一括廃棄遺構と考えられる。



Ph.220 X区161号上層遺構出土遺物4

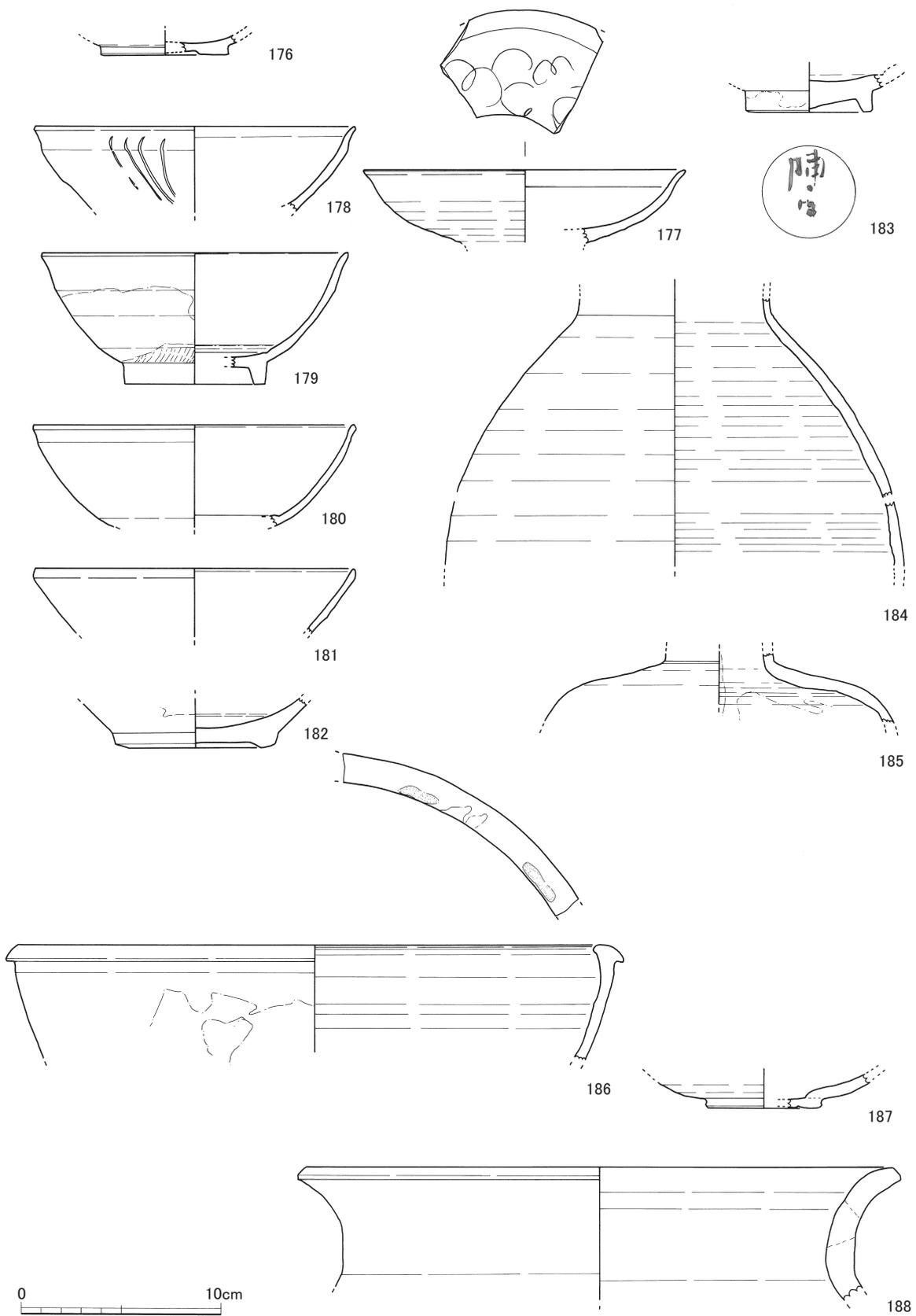


Fig.159 X区161号上層遺構出土遺物実測図6 (1/3)

#### ④ 161号下層遺構

前述したように、土師器を中心とした一括廃棄土坑である161号遺構の下部は、そのまま壁が立って深くなり、井戸であった。

掘方は、第2面上で径2.5mの円形を呈する。掘方の壁面には、上の部分で小さな屈折が認められる。これを井戸廃絶時に掘った、井側抜き取りにかかわるものとするれば、本来の井戸掘方は、直径2.1mほどの円形を呈したことが推測される。井側は、第2面から1.3m前後掘り下げたところで確認した。すなわち、これより上においては、井戸廃絶時に井側を掘り取ったものと考えられる。井側は、直径75cm前後の結い桶である。掘方のほぼ中央に据えられていた。湧水のため、水溜は確認できなかった。

出土遺物を、Fig.161に示す。1～8は、下層の掘り下げ時に出土した遺物、9～11は井側内からの出土遺物、12～16は井側掘方からの出土遺物である。1～4は、土師器である。1は皿で、底部を回転糸切りする。5～8は、白磁である。7の外面には、ワラビ手状の沈線文が並んでいる。9～11は、井側から出土した白磁である。9は平底の皿であるが、底部外周は、鋭くどがっている。11は、体部外面にワラビ手状の沈線文を並べるもので、7と同じ型の碗である。12・13は、土師器である。12は、薄手の皿で、底部は回転糸切りするが、若干押し出して丸底気味に成形する。13は、底部へら切りの丸底坏である。14は白磁碗である。15・16は、中世須恵器である。15は壺で口縁は大きく外反し、端部が上に屈曲して上面に浅い溝を作る。16は、甕である。口縁部は15と共通したつくりとなる。いずれも、体部外面は平行叩きで、体部内面から口縁部は横ナデ調整する。

井側掘方、井側内、井戸廃絶時の堆積土の遺物に大きな相違点はなく、おおむね同時期と考えて大過ないだろう。したがって、上層の土師器一括廃棄遺構とも時期差はなく12世紀前半の井戸である。

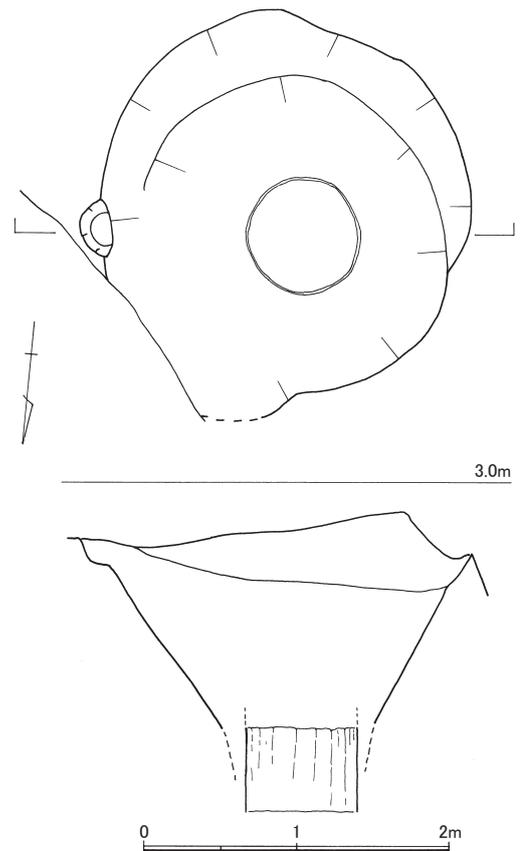


Fig.160 X区161号下層遺構実測図(1/50)



Ph.221 X区161号下層遺構(北西より)



Ph.222 X区161号下層遺構井側検出状況(北西より)

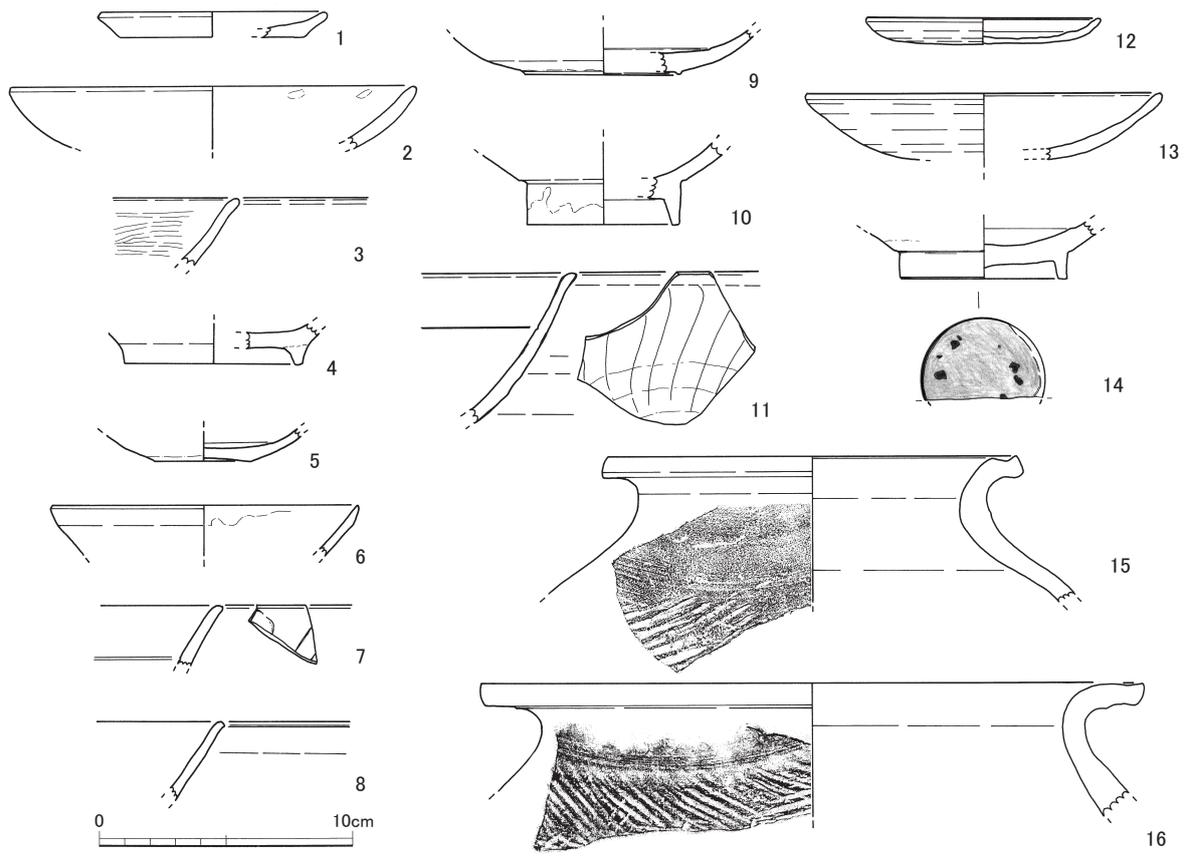


Fig.161 X区001号遺構出土遺物実測図(1/3)



Ph.223 X区161号下層遺構出土遺物

⑤ 201号遺構

第2面の調査区中ほど、南よりで検出した土師器溜りである。掘り込み等は確認できなかった。より上位からの掘り込みがあったとみるべきだろう。

土師器の坏が一括して廃棄されていた。皿が混じっていないことは特徴的である。また、完形品はなく、小片に割れているものが多かった。甑落としのような、習俗的な行為が想定される。

出土した土師器の一部を、Fig.163に示した。1～13は土師器の坏である。すべて外底を回転糸切りし、内鹿部に静止ナデ調整をおこなう。14は、土師器の甑の口縁である。口縁上面は横方向の刷毛目調整、口縁外面は斜め刷毛が認められる。体部外面は、縦方向の刷毛目調整、内面は、横方向のけずりである。坏ばかりの一括資料にはそぐわない遺物であり、混入したものであろう。

土師器の特徴から、13世紀代の一括廃棄遺構であると考えられる。

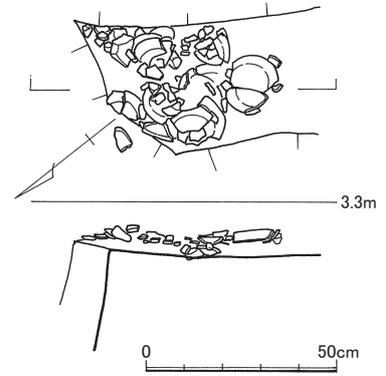


Fig.162 X区201号遺構実測図(1/20)



(北西より)



(南西より)

Ph.224 X区201号遺構

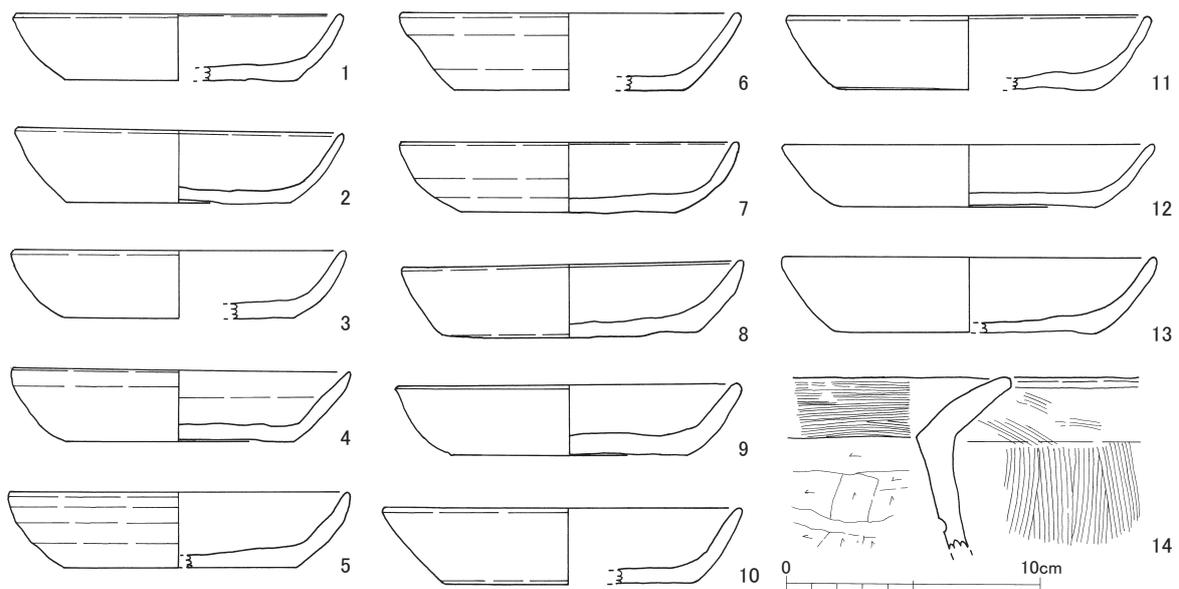


Fig.163 X区201号遺構出土遺物実測図(1/3)

⑥ 318号遺構

第3面で調査した土坑である。第2面調査時において、すでに上端を検出していた。

平面形は、長径3.0m(推定)、短径2.5mの楕円形を呈する。全体的には二段掘り、東壁は三段掘り状で床面は、第3面から1.4mの深さを測る。壁面は、二段掘り部分で屈折して傾斜を変える。

埋土中から瓦質すり鉢の大型の破片が、西側から流れ込む形で出土した。おそらく、西から投棄されたものであろう。

出土遺物の一部をFig.165に示す。1は、土師器である。底部は回転糸切りである。内外面は横ナデ調整する。大きさの割には、器壁は厚い。2は、瓦質土器の湯釜である。口縁部は横ナデ調整、体部外面はヘラ磨き、内面には指ナデを縦に行なったことを示す窪みが並んでいる。外面には、煤が付着している。3は、瓦質土器の鉢である。角形の鉢の、角の部分であろう。内面は横方向、外面は縦方向のハケ目が残る。4は瓦質土器のすり鉢である。口径26.0cm、底径12.5cm、器高9.1cm。口縁の相対する二か所を外側にゆがめて、双口につくる。体部外面は縦ハケ調整で、底部の際には、指頭圧痕が並んでいる。内面は横ハケ調整で、4本単位の楯状工具で、摺り目を入れる。内底部際付近は、使用のために摩耗して、摺り目は途絶えがちになる。

このほか、土鍋、防長型の瓦質すり鉢、青磁、白磁、陶器などの破片が出土した。

16世紀前半の廃棄土坑であらう。

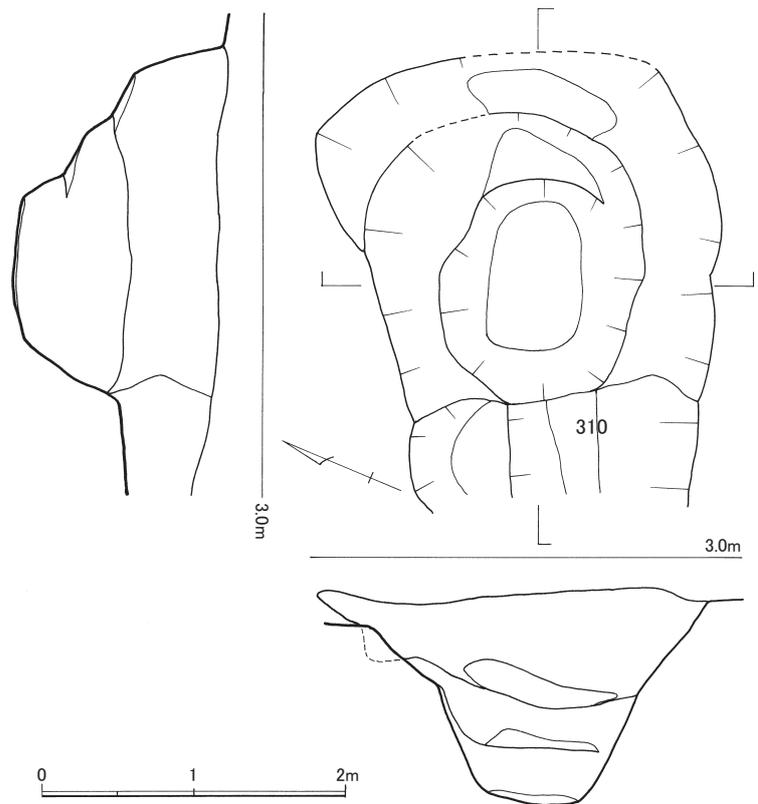


Fig.164 X区318号遺構出土遺物実測図(1/50)



Ph.225 X区318号遺構検出状況(北東より)



Ph.226 X区318号遺構完掘状況(北東より)

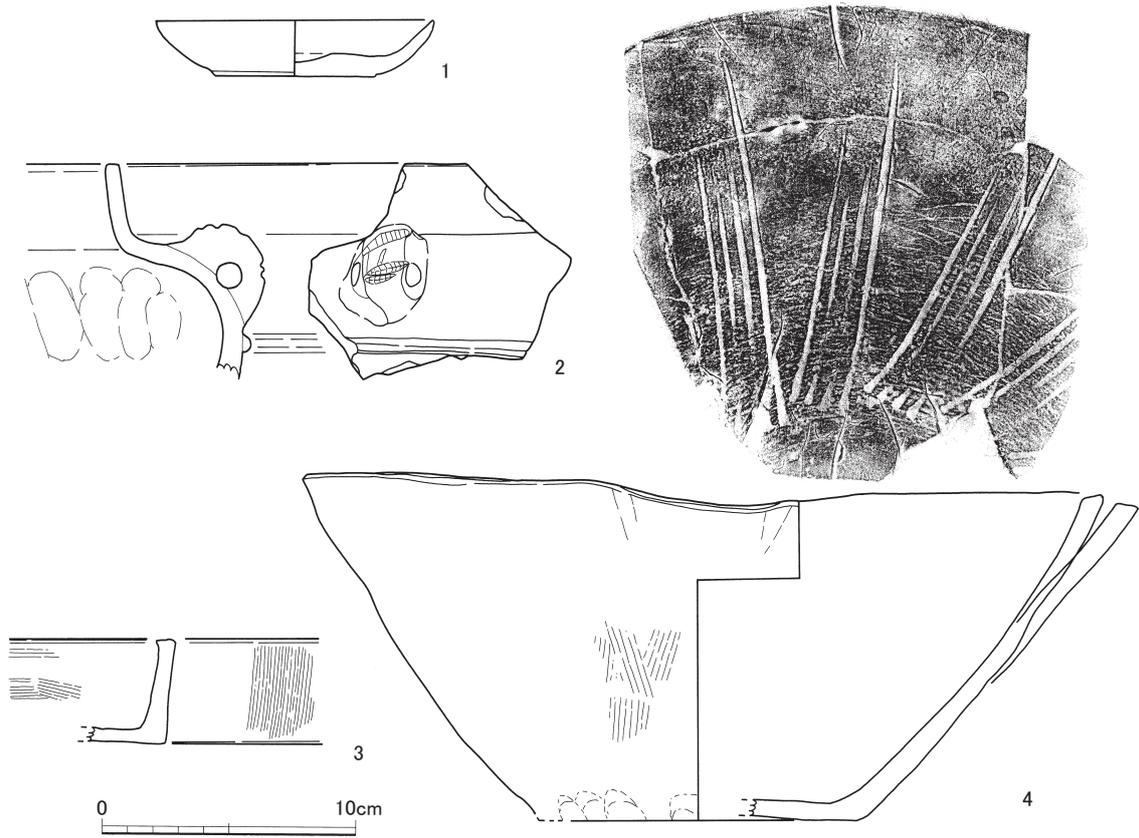


Fig.165 X区318号遺構出土遺物実測図(1/3)



Ph.227 X区318号遺構出土遺物

⑦ 337号遺構

第2面、中央付近から検出した土坑である。重複関係の多い部分なので、遺構の全体的な形状は不明である。遺存部位からみる限り、楕円形の浅い土坑である。

出土遺物をFig.166に示す。1～3は、土師器である。1は小皿、2・3は坏である。底部は回転糸切りする。2は、底径が小さく、体部は大きく開く。3は、体部が直線的に上に延びる通常の形態だが、器壁が厚く、作りが雑な感がある。4は青磁碗である。外面には、沈線で菊弁を描く。花卉の頭を描く鋸歯状の線と、花卉の側縁を描く縦線とは、ほとんど一致している。5は土師器で、鍋である。いわゆる土鍋とは形状が異なって、外面の口縁部直下に粘土紐を貼り付けて、鏝状の口縁とする。7は、土師の竈であろう。裾部と思われる。外面はハケ目調整、内面は、横方向にヘラ状工具を用いた横方向のナデ調整を行う。

13世紀代の遺構である。

⑧ 370号遺構 (=310、=317号遺構)

第2面から検出した溝状遺構である。攪乱と大型遺構の重複によって、溝の連続関係が容易にわからなかったために、部分ごとで遺構番号を付けていた。そのため、一条の溝でありながら、異なる遺構番号が付いている。ひとまず、それを整理しておく。X区中央部分で検出した310号遺構は、西にのびて370号遺構につながる。310号遺構と、370号遺構の間は、075号遺構、345号遺構などに隔てられている。310号遺構の東側は318号遺構（前述）に切られる。さらに東端は353号遺構に切られている。X区東側の318号遺構の北側にみられる383号遺構は浅い段落ちだが、310号遺構の上端に当たる。383号遺構の上端の延長は、その西側では削られて遺存していなかったが、370号遺構の北側は斜面で、その上端は調査区北壁の奥を通ることが予想され、383号遺構の上端に当たると思われる。

なお、この北側上端については383号遺構以外は不確定なため、溝としては310号遺構・370号遺構を主として報告する。なお、遺構番号を併記するのは不便なので、370号遺構で代表させることにする。370号遺構は、幅1.8～2.0m、深さ50～80cmで、緩く弧を描きながら、北東から南西に続く。溝の断面は、U字型を呈する。

出土遺物をFig.167に図示する。1～5は、土師器である。1・2は皿で、3～5は坏である。底部は、

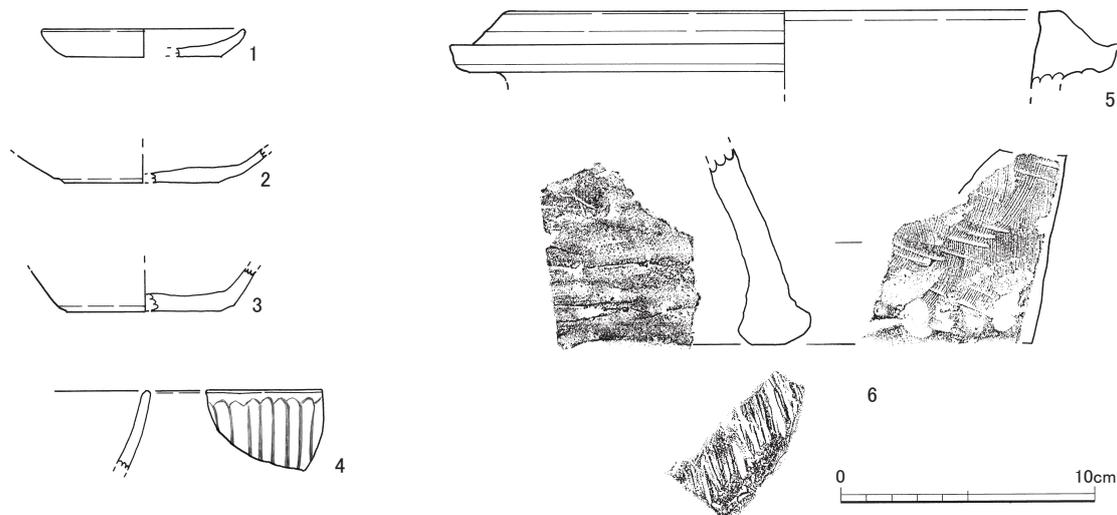


Fig.166 X区337号遺構出土遺物実測図(1/3)

回転糸切りする。1・2の皿は、口径に対して器高が低く、体部の立ち上がりは小さい。6・7は、白磁碗である。このほか、370号遺構からは、黒色土器B類、瓦質土器の鉢が出土している。310号遺構からは、瓦質火舎・湯釜などが出土した。

土師器の坏、瓦質土器などから、370号遺構、310号遺構の年代観は14世紀～15世紀を想定するのが妥当であろう。



Ph.228 X区370(310、317)号遺構(西より)

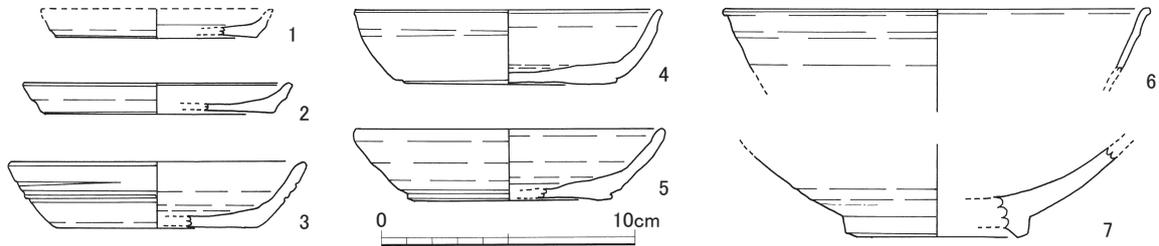


Fig.167 X区370(310、317)号遺構実測図(1/3)

### ⑨ 377号遺構

第3面において、310号遺構 (=370号遺構) の床面付近で検出した土壇墓である。310号遺構に切られて墓壇の半分程度を失っている。310号遺構の壁面から検出し、精査したものである。

頭蓋骨の一部が遺存しており、埋葬遺構と知れる。棺釘の出土はなく、木棺墓とは考えられない。遺存状況からみて、頭位は西であり、顔は北を向いていたと考えられる (附論267頁)。

明らかな副葬品はなく、時期は不明である。



Ph.229 X区377号遺構(北東より)

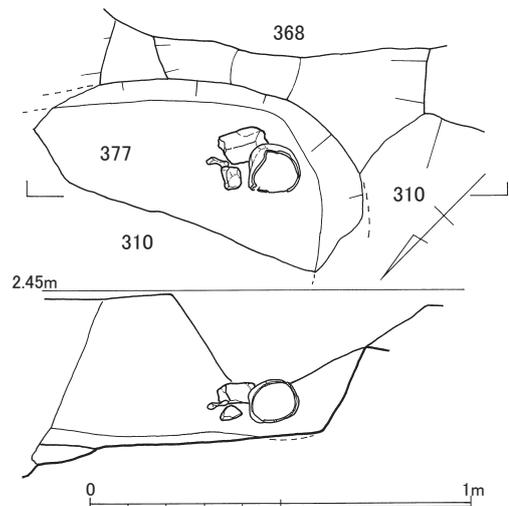


Fig.168 X区377号遺構実測図(1/20)

⑩ 385号遺構

第3面において、310号遺構（=370号遺構）の床面から検出した井戸である。310号遺構に切られて大半を失っている。

掘方は一辺2mほどの方形を呈し、第3面から井戸水溜の底までの深さは、1.3mほどを測る。掘りかたの中央には、一辺80cmの方形に板を組んで井側とする。方形板組の各角には、木杭が打たれていた。掘方の中央には、直径約50cmの曲物を据えて水溜とする。曲げ物の深さは30cmほどが遺存していた。



Ph.230 X区385号遺構(東より)

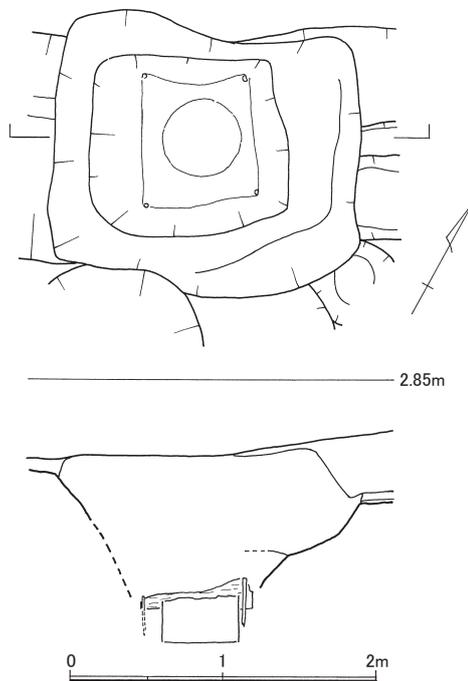


Fig.169 X区385号遺構出土遺物実測図(1/50)



Ph.231 X区385号遺構(井側・水溜検出状況)



Ph.232 X区385号遺構(井側角、木杭遺存状況)



Ph.233 X区385号遺構(井側・水溜遺存状況)



Ph.234 X区385号遺構(水溜・曲物完掘状況)

出土遺物をFig.170に示す。1～4・11～13は土師器である。1は皿である。内外面とも横ナデ調整で、内面には放射状に暗文が入る。良質な胎土を用い、赤茶色を呈する。2は、土師器の高台坏である。内面はヘラ磨きする。3は、碗である。丸みを持って内湾する体部から、小さく外反して口縁を作る。口縁部外面は横ナデ調整、それ以外は、密に横ヘラ磨きする。4は壺である。短く外反した口縁を持つ短頸壺である。内外面ともに横ナデ調整する。11・12は、甕の口縁部である。11の内面は横方向のハケ目調整、外面は縦方向のハケ目調整をする。12は、口縁部の内外面は横ナデ調整、体部内面は、縦方向のヘラケズリ、体部外面は縦ハケ調整する。13は、壺の口縁である。外面の口縁部直下に突帯を貼り付け、なでつけることによって、二重口縁のように見せている。口唇部は内傾して斜めに面取りされている。内面は横ハケ調整、外面は縦ハケ調整する。5～10、14・15は須恵器である。5は坏もしくは皿である。外底部はヘラ削り、体部外面から内面は横ナデ調整する。6は、皿である。7～10は、高台坏である。内底部はナデ調整、体部内外面は、横ナデ調整する。14・15は、壺である。14は、締まった頸部から大きく外反する口縁を持つ。体部内面には、刷毛目様の擦痕がみられる。口縁部と体部外面は、横ナデ調整する。15は広口壺で、口縁は短くまっすぐに立ち上がる。内外面ともに、横ナデ調整である。

16は軒平瓦の瓦当である。顎部分の破片で、瓦当文様は下半分が残っている。遺存部分から見て、鴻臚館式の軒平瓦である。この他、平瓦や焼き塩壺などが出土している。

なお、9・10・15は、井側内=方形板組内からの出土である。

8世紀後半の井戸である。

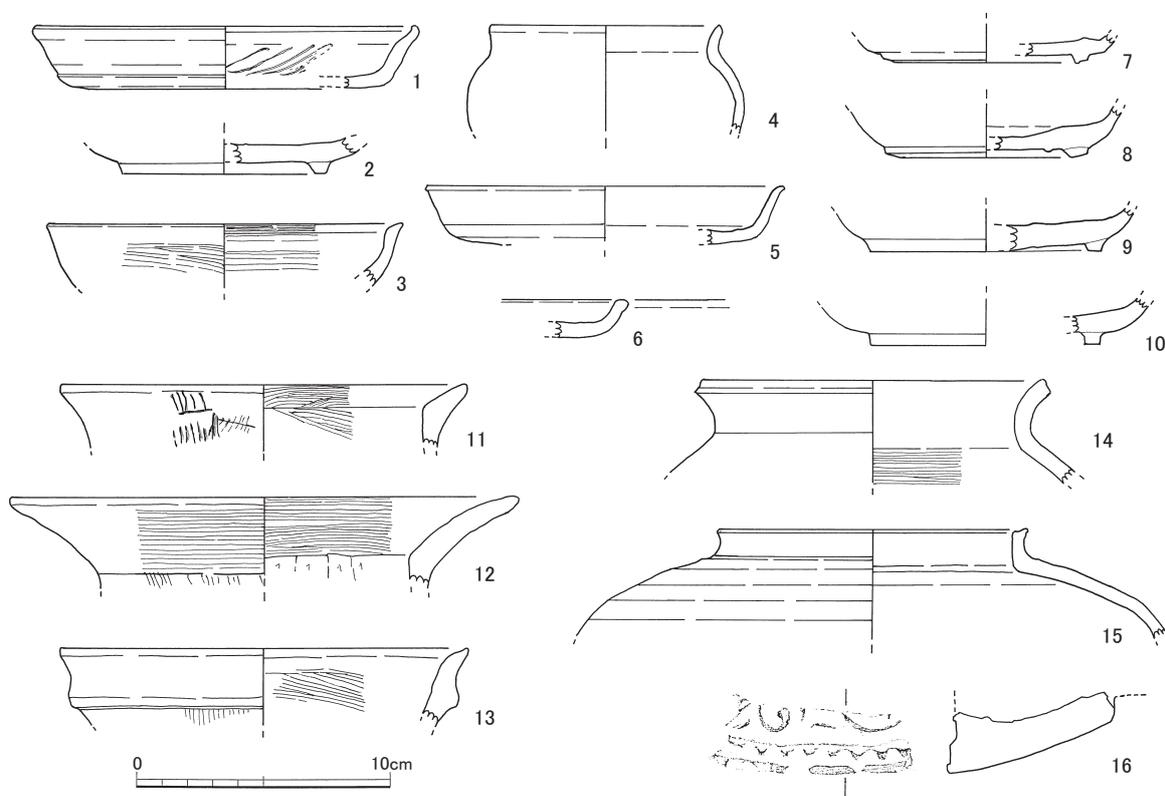


Fig.170 X区385号遺構出土遺物実測図(1/3)

⑪ 386号遺構

385号遺構に切られて検出した井戸である。385号遺構の調査時、その掘方北壁から立った状態で平瓦が、掘方最下部近くで直線的に伸びる木質の痕跡が検出され、精査したところ、井戸が出土した。これを386号遺構とした。

386号遺構の掘方は、そのほとんどが385号遺構の掘方によって失われており、井側の周囲で残っていたにすぎない。

井側は、遺存した木質から見ると、75cm程度の方形板組である。ただし、方形板組も385号遺構によって掘り取られていて、「コ」字型に遺存したに過ぎない。水溜は、おそらく曲げ物と思われるが、

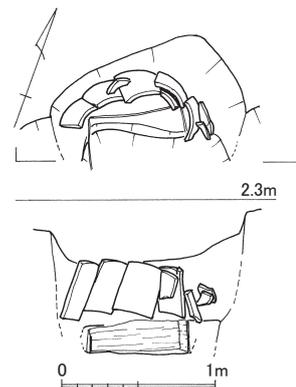
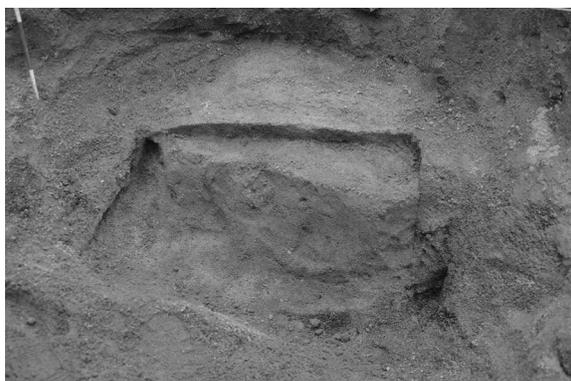


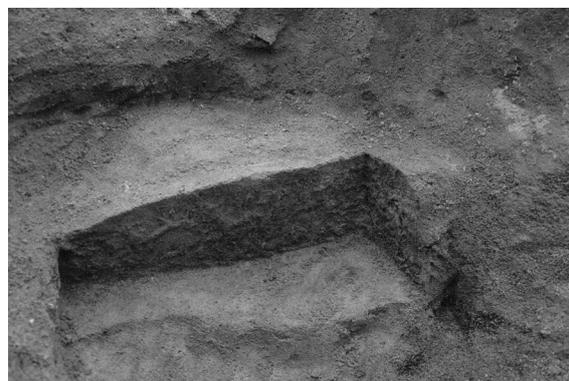
Fig.171 X区386号遺構実測図(1/50)



Ph.235 X区386号遺構(南東より)



Ph.236 X区386号遺構方形板枠検出状況(南東より)



Ph.237 X区386号遺構方形板枠完掘状況(南東より)

残っていなかったもので明らかではない。方形板組の直上には、平瓦を円弧状に立て並べていた。やや斜めに傾いて、倒れ気味になっており、それはおそらく、385号遺構掘方掘削による影響だろう。瓦は、おそらく井側として、積み上げられていたのであろう。遺存した瓦配置から推測すれば、瓦による井側の直径は70cm程度となる。

これらの瓦は、すべて鴻臚館式に伴う平瓦である。

出土遺物をFig.172～175に図示する。1～3は、須恵器である。1は坏蓋で、端部は軽く「く」字型に折り曲げる。2は高台坏である。3は、鉢である。口縁部は、やや内側に突き出し気味に内傾する。4・5は土師器の甕である。体部内面はケズリ、外面は縦方向のハケ目調整をする。6～10は、平瓦である。凹面は布目で、凸面は縄目叩き痕が見られる。7・10の凹面には粘土板を切り出した際の糸目が強く残っている。6には、「卍二」の刻字が見られる。

8世紀中頃から後半の井戸であろう。

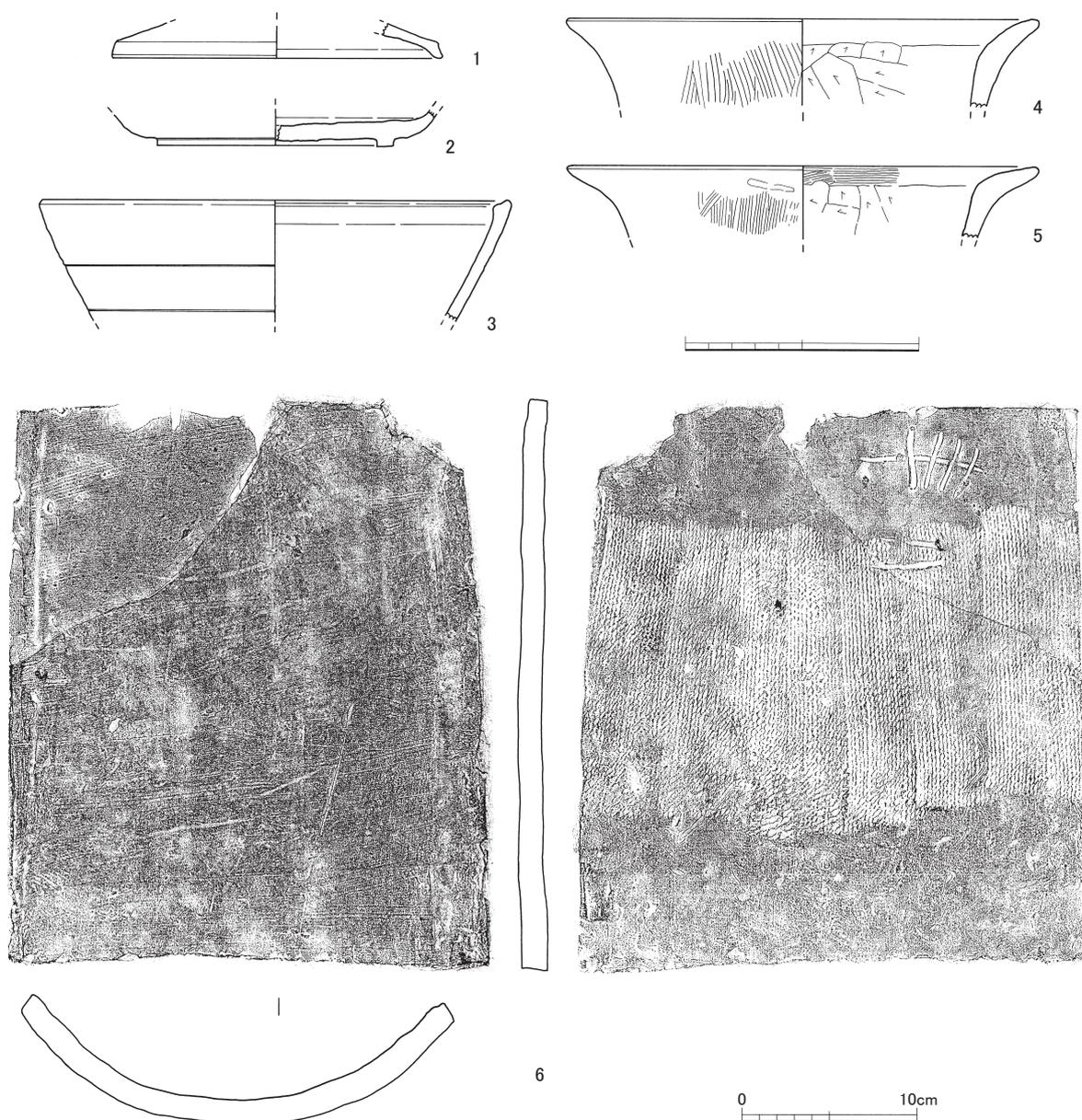


Fig.172 X区386号遺構出土遺物実測図1(1/3、1/4)



Ph.238 X区386号遺構出土遺物1

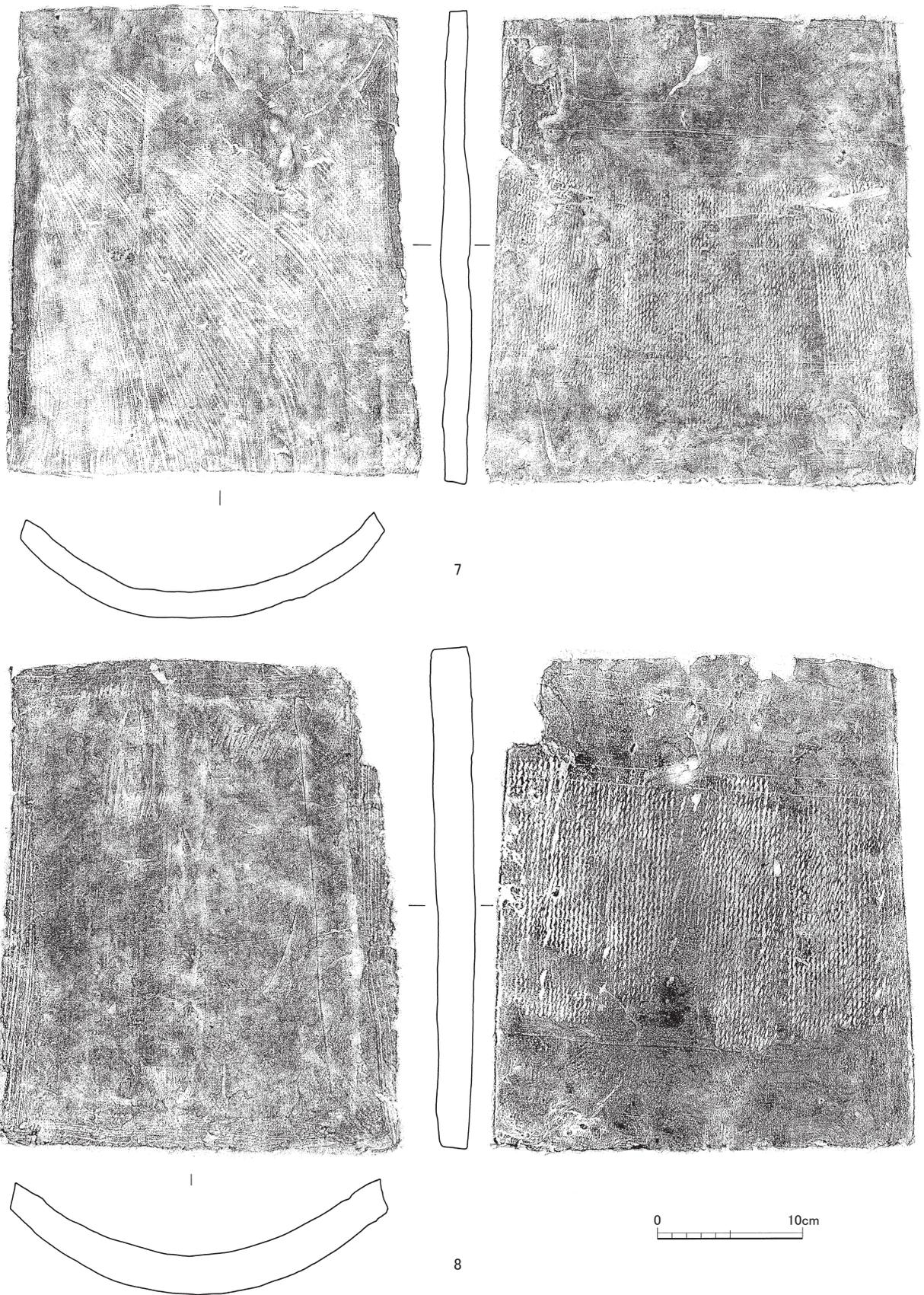
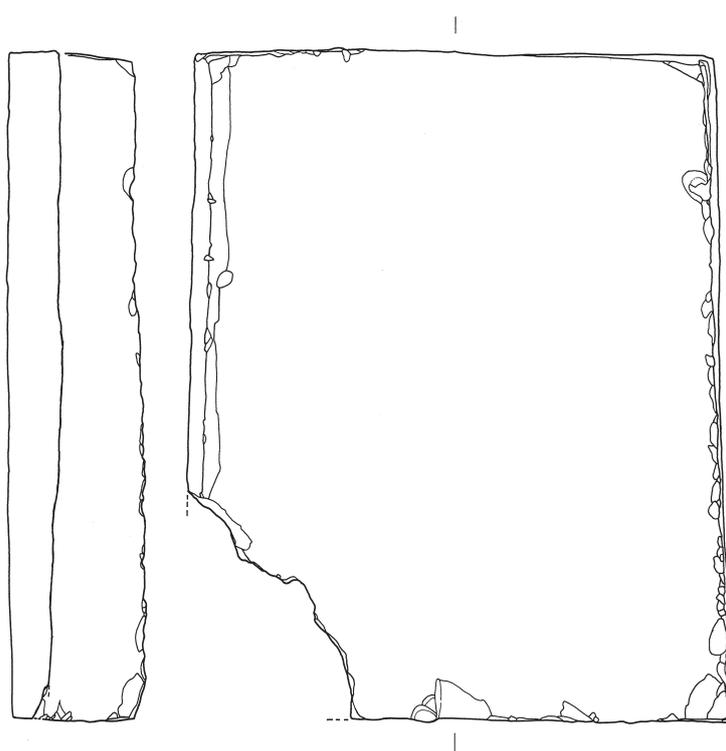
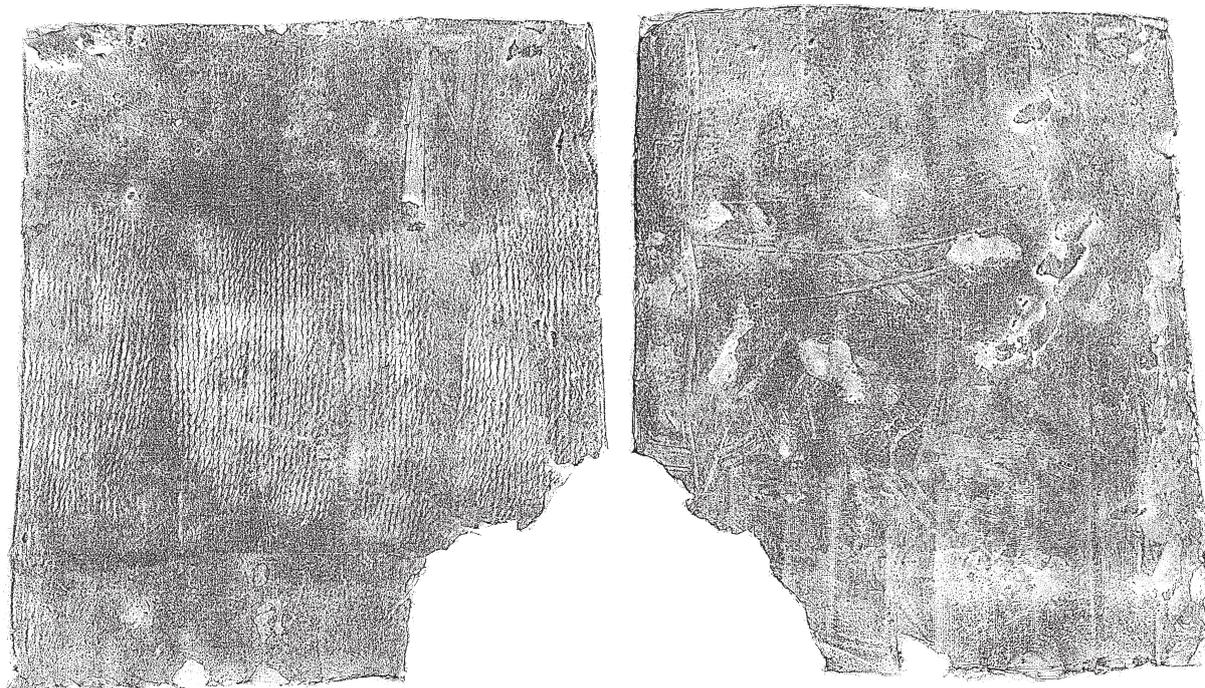


Fig.173 X区386号遺構出土遺物実測図2(1/4)



Ph.239 X区386号遺構出土遺物2



9

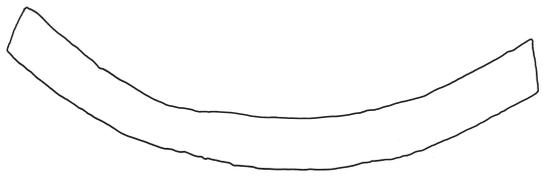


Fig.174 X区386号遺構出土遺物実測図2(1/4)



Ph.240 X区386号遺構出土遺物3

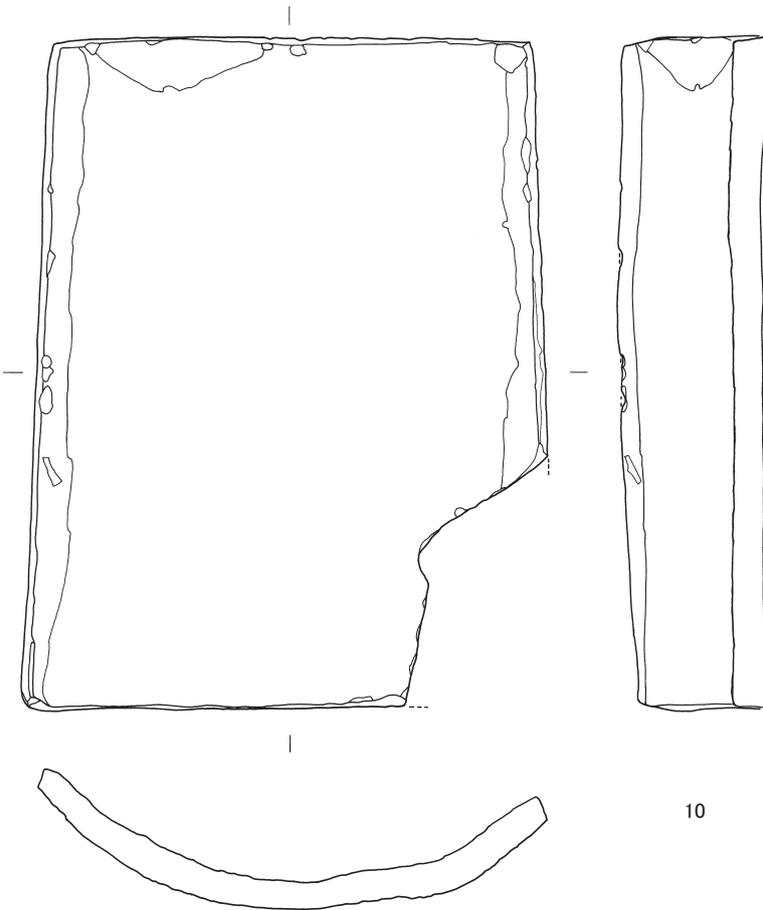
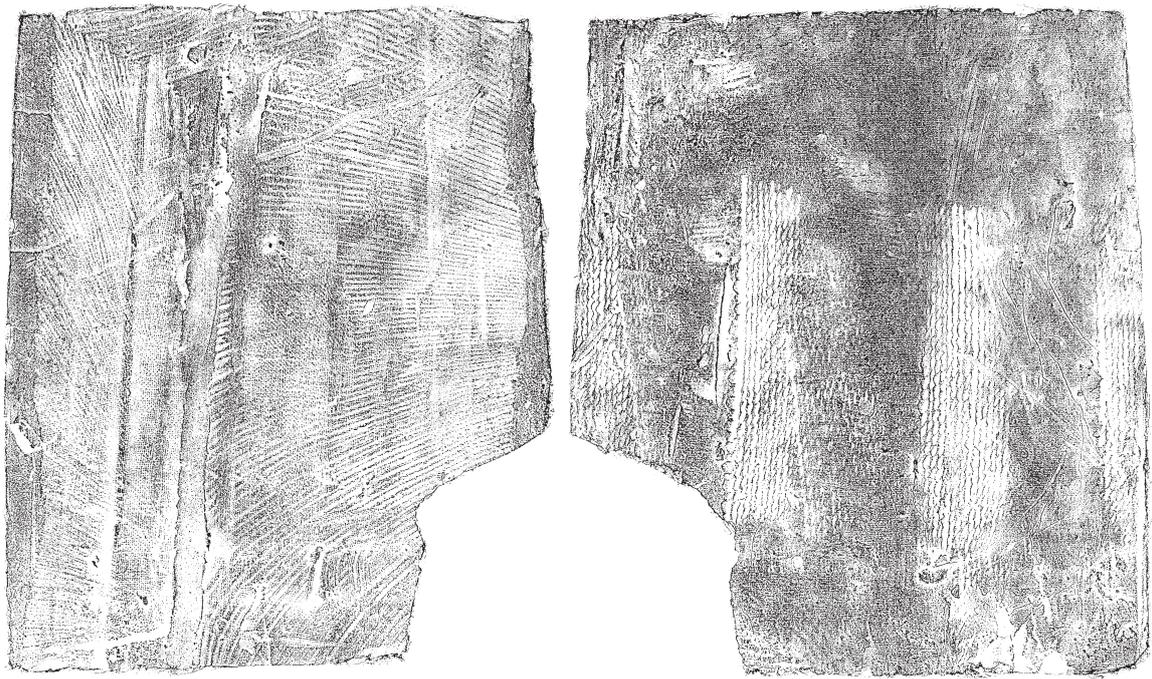
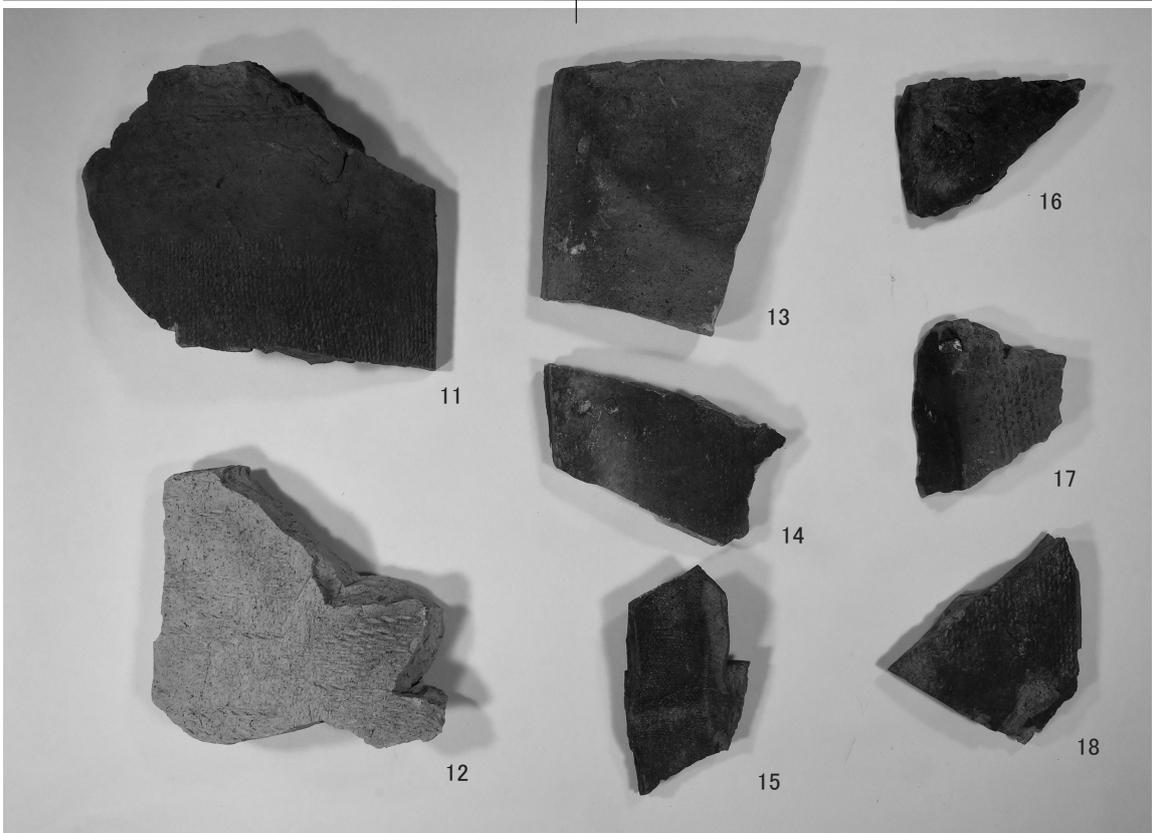
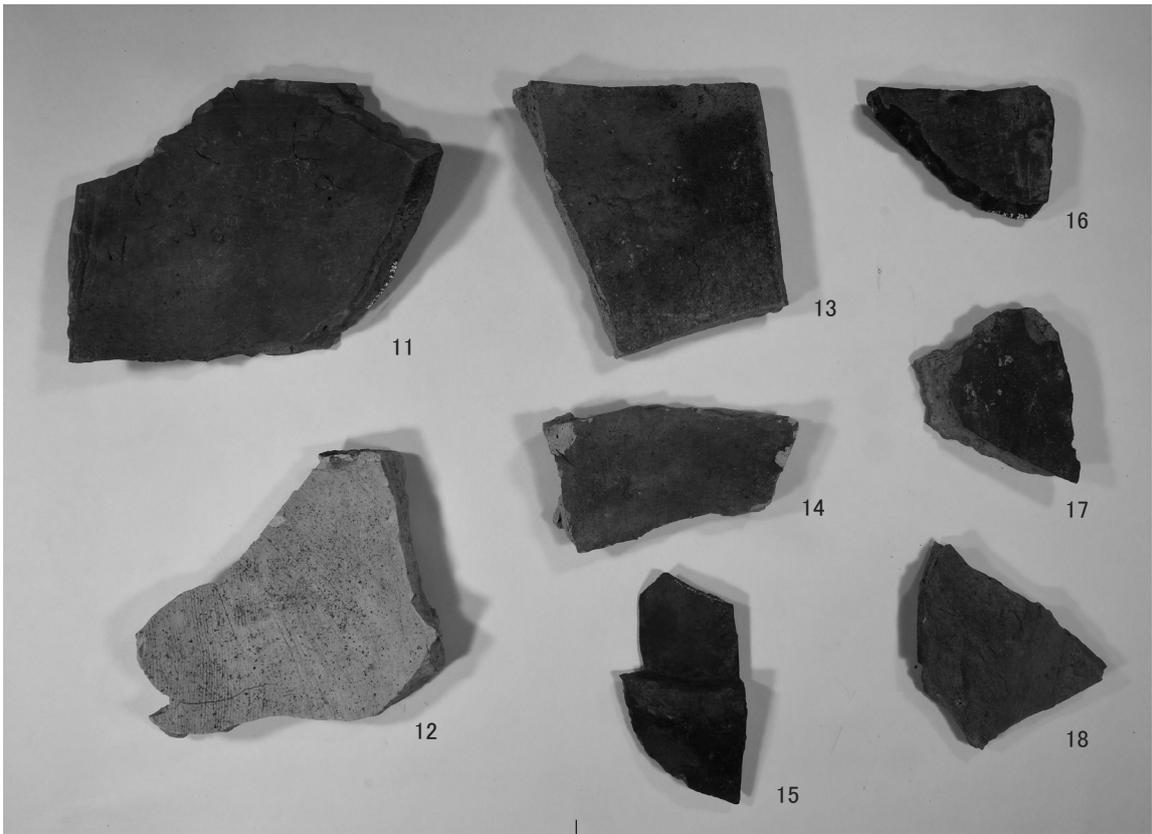


Fig.175 X区386号遺構出土遺物実測図3(1/4)



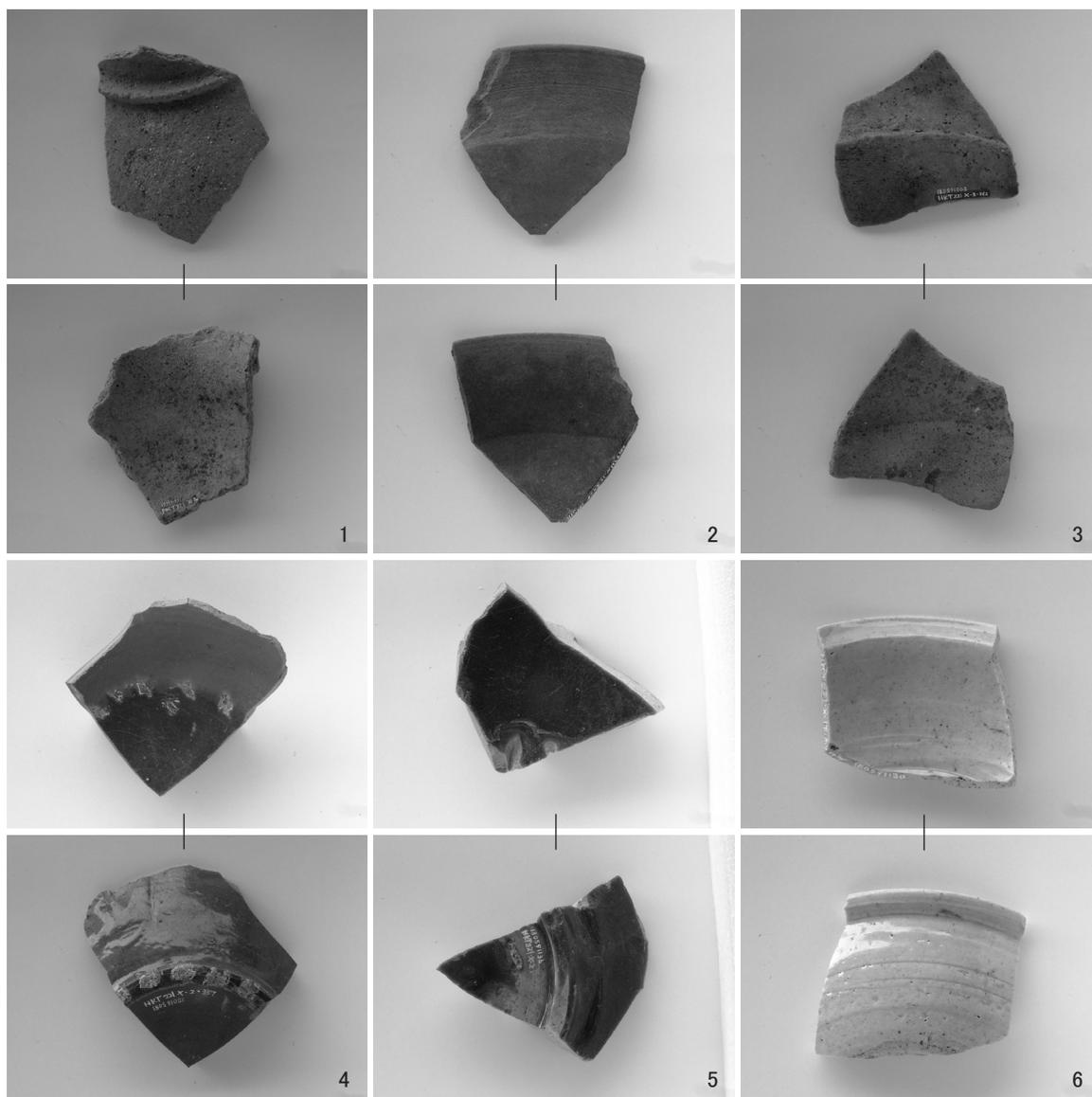
Ph.241 X区386号遺構出土遺物4

⑫ その他の出土遺物

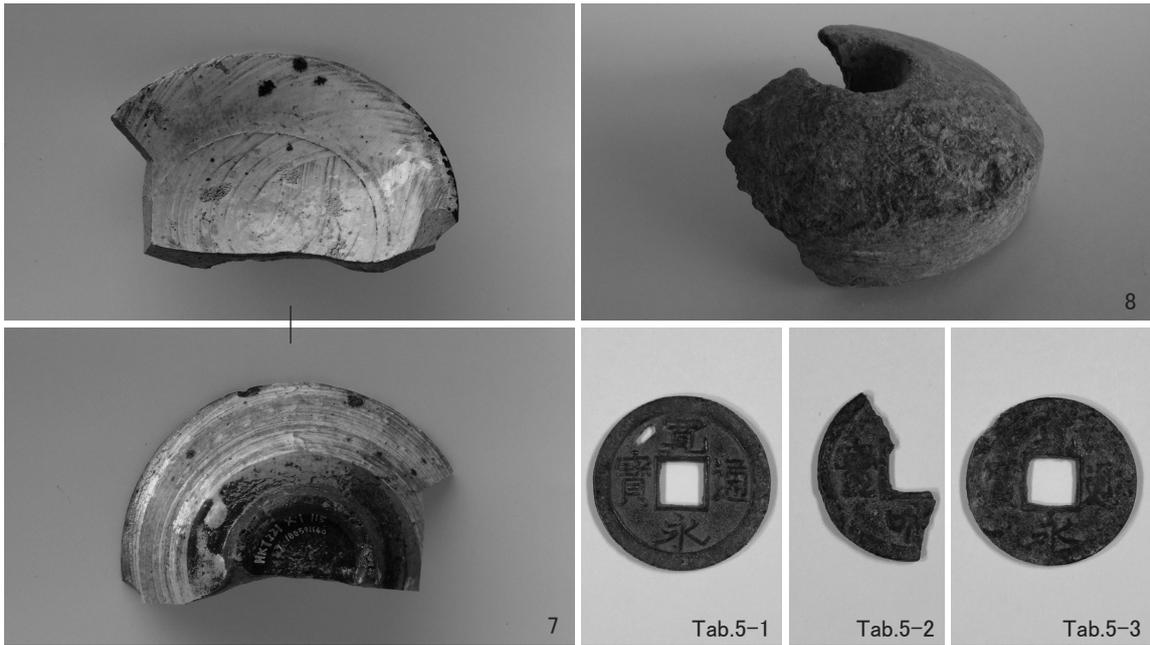
以下、主要遺構の報告中で触れることができなかった遺物の中から、看過できないもの、特殊なものを選んで紹介する(Ph.242・243)。

1～3は、弥生土器である。1は壺の肩部から頸部の破片で、頸部の付け根に貼り付け突帯を巡らせる。2・3は高坏の坏部分破片である。これらは、弥生時代後期の土器である。この他、弥生時代中期後半の甕をはじめ古墳時代の古式土師器にいたるまで、遺構は検出されなかったが、遺物としては出土が見られる。4は越州窯系青磁碗である。全面施釉の優品で、9世紀代の遺物である。5は龍泉窯系青磁の盤である。緑色の釉がたっぷりと掛かり、高台内を輪状に釉剥ぎする。14～15世紀代の青磁は、案外出土していないのであえて示した。6は白磁碗である。薄手で、体部は丸みが強く、口縁は水平に小さく折れ曲がる。12世紀ころの白磁だが、見慣れないタイプの碗である。7は、朝鮮王朝の粉粧沙器の皿である。朝鮮王朝の陶磁器は、量は多くないが、当該期の遺構からはしばしば出土する。8は、滑石製品である。底が平坦で、上面が台形状に盛り上がる円環型石製品である。

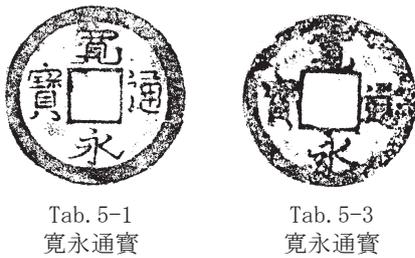
Tab.5、Fig.176にX区からの出土銭貨を示す。X区からは4点の出土にとどまった。



Ph.242 X区その他の出土遺物1



Ph.243 X区その他の出土遺物2



Tab. 5-1  
寛永通寶

Tab. 5-3  
寛永通寶

Fig.176 X区出土銭貨拓本(1/1)

Tab.5 HKT221 出土銭貨一覧表

| X区 |         |                                  |    |       |
|----|---------|----------------------------------|----|-------|
| 番号 | 出土遺構    | 銭貨名                              | 字体 | 備考    |
| 1  | 044     | 寛永通寶                             | 楷書 | 新寛永   |
| 2  | 120     | □ <sub>欠</sub> 和□ <sub>欠</sub> 寶 | 篆書 | 宣和通寶か |
| 3  | 採集      | 寛永通寶                             | 楷書 | 新寛永   |
| 4  | 074 井側内 | □□□ <sub>欠</sub> □ <sub>欠</sub>  |    |       |

### 3. 小結

X区の調査においては、3面の遺構面を設定し、調査を行った。第1面は近世以降を主に調査し、2面で中世の遺構を、第3面で、古代から中世の遺構を調査した。

X区は221次調査地点では砂丘が最も高い地点であり、8世紀の井戸の検出にみるように、古代から土地利用されていたことが明らかとなった。特に386号遺構は、鴻臚館式に伴う平瓦を井側に多用しており、X区周辺の土地利用と古代官衙との関連について、考える必要があるだろう。

X区においては、161号上層遺構について述べておく必要がある。土師器の皿・坏を主体とした一括廃棄遺構である。完形品を廃棄した遺構であり、供食儀礼における使い捨ての器としての土師器皿・坏を、強く感じさせる遺構である。実は、161号上層遺構の一括廃棄の際立った特徴は、瓦器にある。すなわち、在地の筑前型瓦器碗も破片としては少量みられるが、瓦器の大部分は楠葉型瓦器である。これは、楠葉型瓦器碗の出土が全国的に比較しても多い博多遺跡群にあっても、これまで見られなかった状況である。そのことと供食儀礼との間に関係があるのかを含め、その意味するところについては、さらに他の調査区の成果を交えて検討を加え、次年度の報告書で再論したい。